

佐藤時啓退任記念展

with

研究室卒修生

+

卒修生

交差する時間

Intersecting Time

卒修生

from the series *Photo-Respiration* #22. 1988

研究室生

卒修生

卒修生

卒修生

卒修生



本PDFをご覧いただく際は
[見開きページ表示][表紙を表示]
の設定をお勧めいたします。
[Two-Page View] and
[Show Cover Page] recommended.

Contents PDF版では項目にハイパーリンクが設定してあります。
The table of contents in the PDF version is hyperlinked.

ごあいさつ 日比野克彦 Greetings Katsuhiko Hibino 002

会場風景 Installation View 004

「幕間の光景」 湯浅良介
“View of an Intermission” Ryosuke Yuasa 018

シンポジウム「交差する時間—藝大の教育と生きることの実践」
Symposium “Intersecting Time – Education at Tokyo University of the Arts and the Art of Living” 020

研究生 + 卒修生 作家頁 Artist Pages of Laboratory Students and Graduates 030

堤有希 Yuki Tsutsumi 032

陳雨心 CHEN YUXIN 034

山本愛子 Aiko Yamamoto 036

許力静 Xu Lijing 038

Saba Bagheri 040

王憶冰 WANG Yibing 042

藤本涼 Ryo Fujimoto 044

戴乃理子 Noriko Yabu 046

朴ミナ PARK MINA 048

伯耆田卓助 TAKUSUKE HOKIDA 050

Alexandre FERREIRA 052

元木みゆき Miyuki Motoki 054

呉在雄 OJAEWOONG 056

g.a.d.o. – Lena Skrabs & Paloma Sanchez-Palencia 058

下西進 Susumu Shimonishi 060

紀雪哈 JI XUEHAN 062

福島周平 Shuhei Fukushima 064

水除琉聖 Ryusei Mizuyoke 066

神垣優香 Yuka Kamigaki 068

桐生眞輔 Shinsuke Kiryu 070

李承禧 Lee Seunghee 072

浩琦 HAO QI 074

飯野哲心 IINO TESSHIN 076

李赫奕 Lee He-Yi 078

秋本瑠理子 Ruriko Akimoto 080

魏子涵 WEI ZIHAN 082

朴ナヒョン Nahyun Park 084

佐藤翔心 Shogo Sato 086

黒川裕美 Hiromi Kurokawa 088

神沼美虹 Kanuma Miya 090

石山和広 Kazuhiro Ishiyama 092

秋山果凜 Karin Akiyama 094

王露 WANG LU 096

Niels Cibois 098

わたる（石川智弥+古屋祥子） WATARU (Tomoya ISHIKAWA + Shoko FURUYA) 100

曹原 CAO YUAN 102

菊地拓児（+林哲／コールマイン研究室） Takuji Kikuchi（+ Akira Hayashi / coal mine lab.） 104

樋口紗也香 Sayaka Higuchi 106

彭飛源 Feiyuan Peng 108

Arthur Geslin 110

横山渚 Nagisa Yokoyama 112

林煜涵 Lin Yuhan 114

髓良彦 Yoshihiko Zui 116

鈴木のぞみ Nozomi Suzuki 118

李佳璐 LIJIALU 120

David Meran 122

小野寛志 Kanji Ono 124

門馬さくら Sakura Momma 126

宮寄ユニカ Unica Miyazaki 128

山本千愛 Chiaki Yamamoto 130

栗山斉 Hitoshi Kuriyama 132

Roman Peter Prostejovsky 134

田中一平 Ippei Tanaka 136

袁辰 YUAN CHEN 138

NIE ZEWEN 140

村上裕 Hiroshi Murakami 142

砂田百合香 Yurika Sunada 144

まきわだ（牧田沙弥香+大和田愛子） MW (Maki+Wada) 146

『交差する時間』振り返り会議録
Minutes of the Intersecting Time Review Meeting 148

「退任展を終えて」 佐藤時啓
“On the Holding of The Retirement Exhibition” Tokihiro Sato 158

謝辞 Acknowledgements 162

佐藤時啓退任記念展
研究室生
卒修生
交差する時間
Time

ごあいさつ

日比野克彦

東京藝術大学長

佐藤さんと最初にあったのは佐藤さんが藝大の写真センターにいた頃だったと思う。上野の中央棟の地下にある写真センターは、私の学生時代からあの場所にありました。私も写真の授業で暗室に入って、白黒のプリントをした記憶があの空間にはあります。(当時私が使っていたのはキャノンFTb、自身でプリントした学生時代の仲間たちが写っている写真は今でもアルバムに貼ってあります)。いつ頃だったかは確かではないですが……ある時、写真センターに行ったら佐藤さんがいて、小さな子供がいて、佐藤さんが「うちの子です」と紹介してくれました。そんな風景は私の記憶にプリントされています。1999年に先端芸術表現科を佐藤さんと私を含む5人の教員でスタートさせました。佐藤研究室にはいつも多くの学生が出入りしていて、家のような空間がそこにはありました。佐藤さんからは直接は聞いてないけれども「うちの子です」という声が聞こえます。

遺伝子に性質がプリントされていくように、佐藤さんのものの見方、空気の捉え方、表現者としての動き方、そして生活の過ごし方はきっと、それぞれにそれぞれらしく、それぞれの写真センターでプリントさせていくのでしょう。

佐藤時啓先生のますますのご活躍を楽しみにしております。

キューバのハバナビエンナーレでの作品も楽しみです。

Greetings

Katsuhiko Hibino

President, Tokyo University of the Arts

I believe the first time I met Mr. Sato was when he was working at the Photography Center at Geidai (Tokyo University of the Arts). The Photography Center, located in the basement of the central building in Ueno, had already been there since my student days. I have memories of entering the darkroom for photography classes and making black-and-white prints in that space. (Back then, I used a Canon FTb, and the photos of my friends, which I developed myself, are still in my album today.)

I'm not exactly sure when it happened, but one day when I visited the Photography Center, Mr. Sato was there, and so was a small child. He introduced the child, saying, "This is my kid." That scene remains printed in my memory. In 1999, we launched the Department of Intermedia Art with five instructors, including Mr. Sato and myself. The Sato Lab was always filled with students coming and going, creating a home-like atmosphere. Although Mr. Sato never said it directly, I can still hear the words, "This is my kid," echoing in that space.

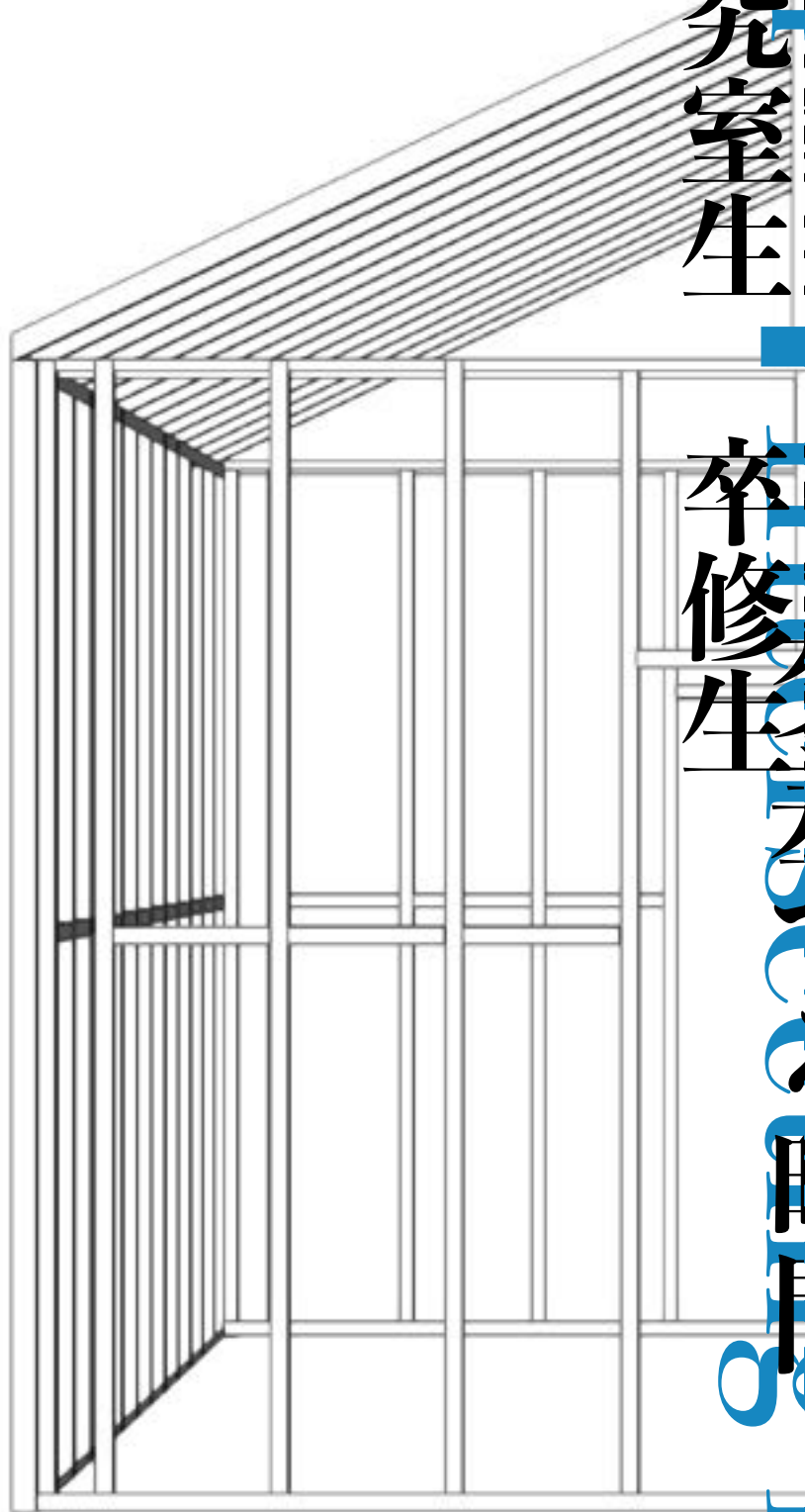
Just as traits are printed onto our genes, Mr. Sato's way of seeing the world, his sense of atmosphere, his movements as an artist, and his approach to life will surely leave their marks on each person, each in their own way, at their respective Photography Centers.

I look forward to seeing Professor Tokihiro Sato's continued success.

I'm also excited about his work at the Havana Biennale in Cuba.

研究室生

卒修生



会場デザイン:湯浅良介

会場構成制作:「佐藤時啓退任記念展 with 研究室生+卒修生—交差する時間— Intersecting Time」実行委員会

Exhibition Design:Ryosuke Yuasa

Exhibition Design and Production:「Tokihiko Sato Retirement Memorial Exhibition with Laboratory Students + Graduates —Intersecting Time—」Executive Committee

会場風景
Installation View



佐藤時啓退任記念展

二、交差する時間

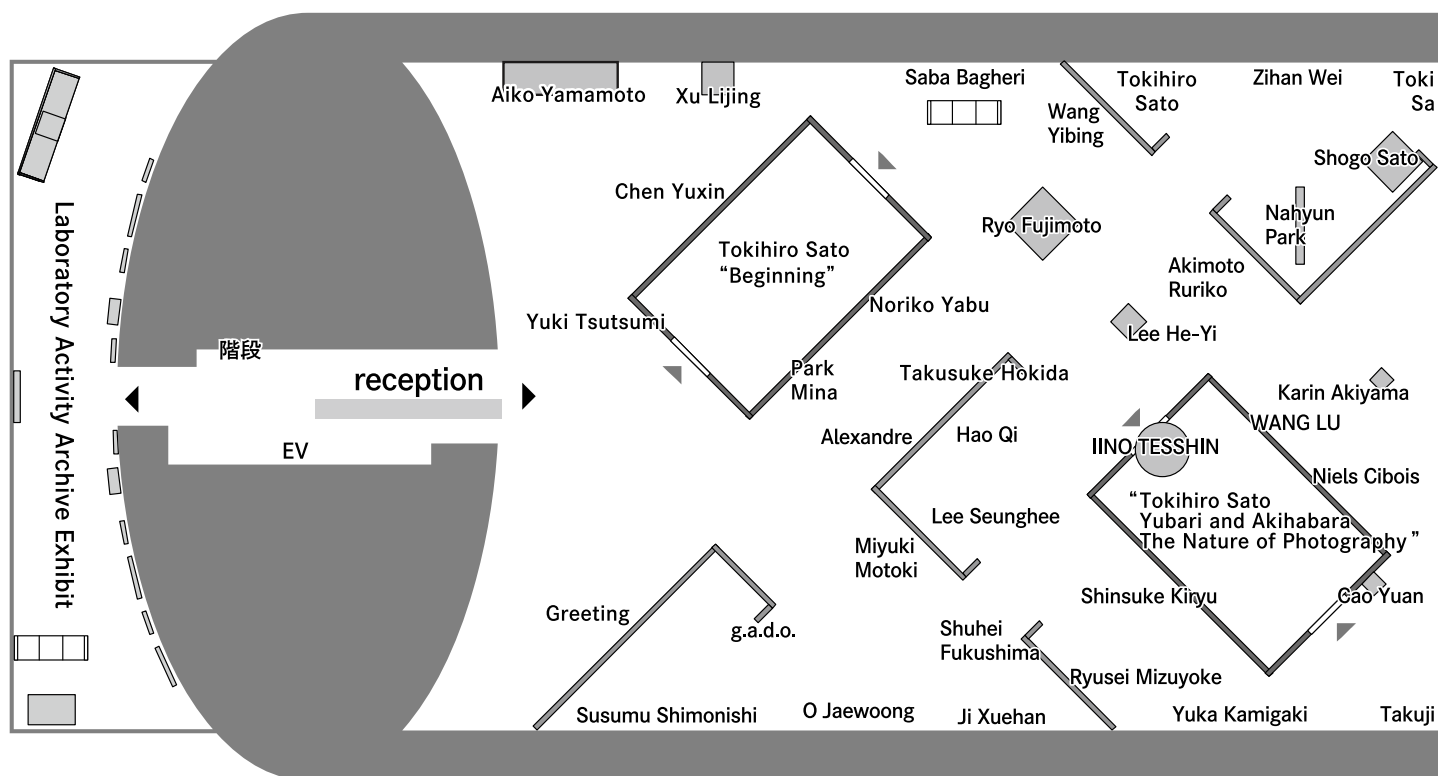
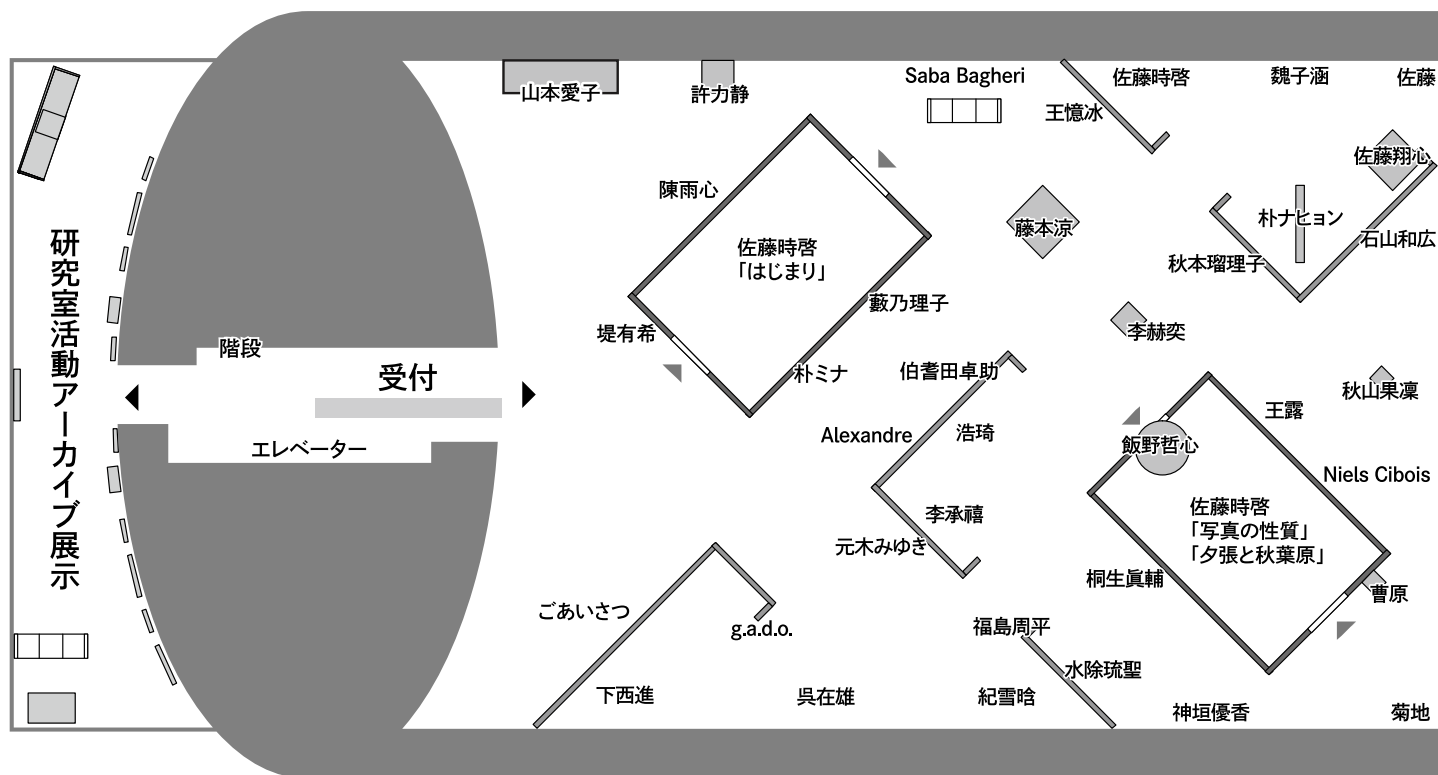
Time

佐藤時啓退任記念展

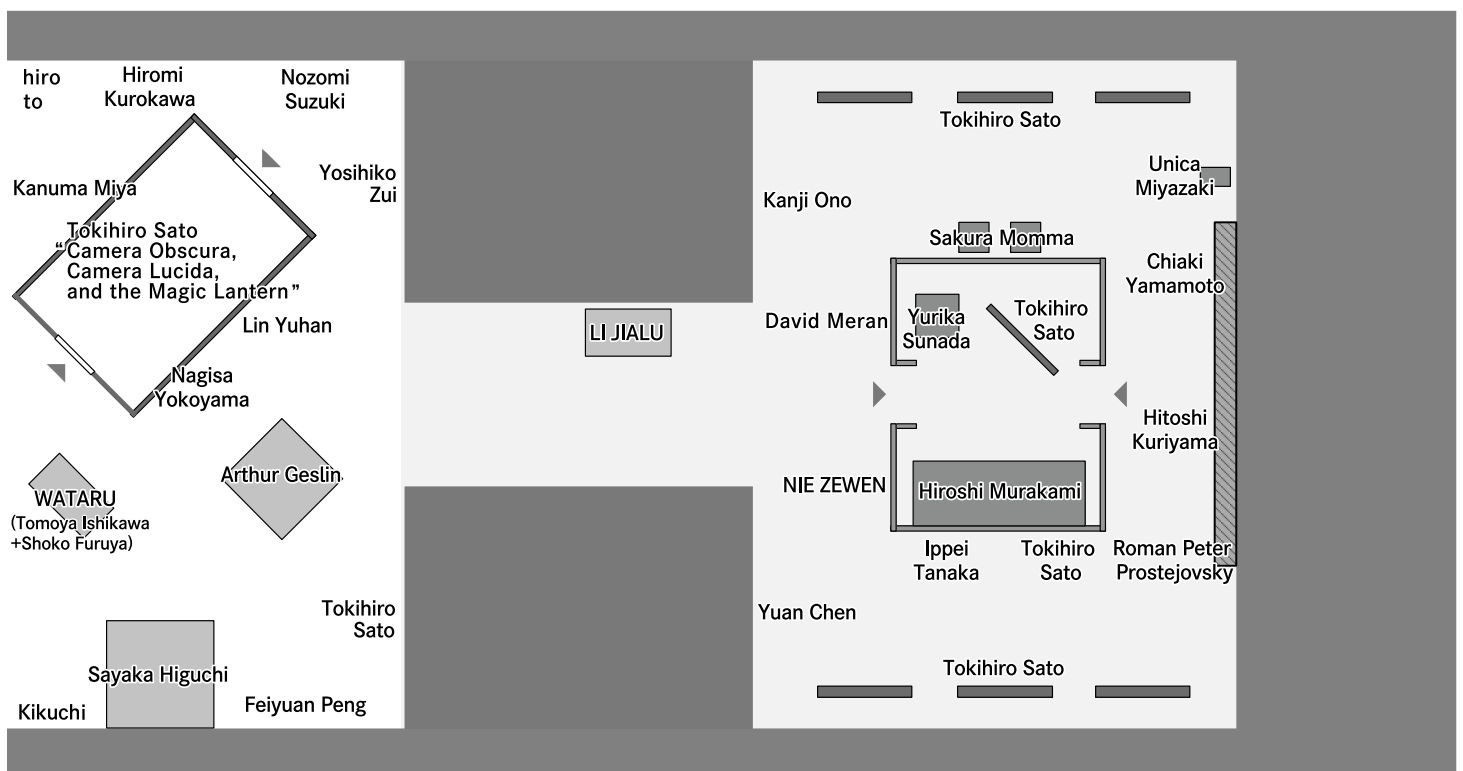
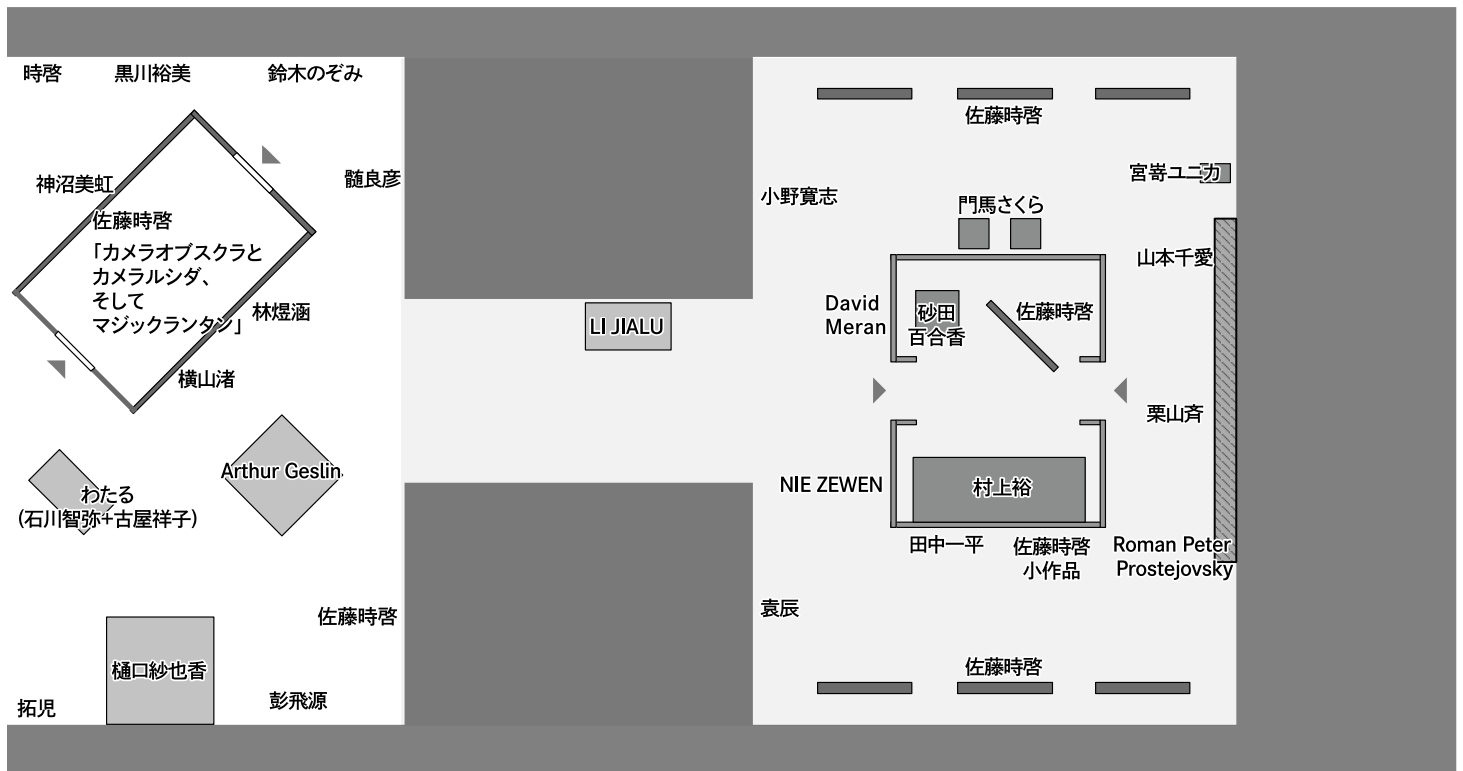
with 研究室生 + 卒修生
—交差する時間—Intersecting Time

会場MAP

美術館入り口前
まきわだ
(牧田沙弥香+大和田愛子)



In front of the entrance
of the museum
MW (Maki+Wada)







佐藤時啓退任記念
with 研究家生々々
交差する時間 — INTERSECTING TIME —
展覧会









0











「幕間の光景」

湯浅良介

建築家／多摩美術大学准教授

“風景を作りませんか?”と藝大近くのデニーズでドリンクバーを飲みながら佐藤先生にお話したのは先生との最初の顔合わせでした。即答で、“いいですね”と応えてくださり、“小屋があると内と外が生まれます”と僕が続けると、“僕がつくれます”と先生自ら小屋を作ってくれることも決まりました。プレゼンなど一切せずに、先生のこれまでの写真作品から得たインスピレーションで、あんなふうに光の風景を作るように会場を作れたらいいな、と思っただけのもの、初対面ということもあり少し緊張していろいろな説明を省いて完成のイメージだけを“風景”という言葉に集約して伝えてしまいました。それでも先生はその言葉だけでイメージを膨らませて方向性を決めてくれました。そんなふうに方針が決まったために、先生には僕がどうして風景が良いと思ったかなどは伝えていませんでした。展示も終わって時間も経ってしまいましたが、当時の僕の言葉足らずを補足できたらと思いこのテキストを書かせていただきます。

皆さんもご存知のとおり、佐藤先生の写真には光が映っています。それも単体の光というよりも幾つもの光が、群れていたり、飛び跳ねているようだったり、行進しているようだったり、まるで光たちが戯れて何かを肯定してくれているように僕は感じています。そもそも僕たちが見ているものは380～780nmの可視光線が目の中の物質を反射や透過した光を網膜が捉え、“見えている”と感じています。実際には目で捉えられない光もたくさんあり、地球を通過している光さえあります。そう考えると僕たちは、降り注ぐ光の中にいる、とも考えられます。その無数の見えない光を、佐藤先生の写真の中に見ているように感じていました。そしてまた、カメラがコンマ以下、一瞬とも言えるシャッタースピードで光をフィルムやセンサーに定着・保存させているとしても、光が瞬いている、その僅かな時間の幅を先生の写真から感じていました。

修了生数十名の方の作品と佐藤先生の作品が同時に展示される、という展示の内容を最初に伺った時、この先生の写真のように光たちが自由に立ち振る舞う状態を風景として見せられたら、そしてその光たちを修了生の方たちの作品に置き換えることである時間の幅を肯定的に捉えた状態として表すことができたらと想像しました。大人数で收拾がつかなくなりそうだなと思ったのですが、“風景”という状態であれば收拾がつかなくても成立するのではないかと考えてみることにしました。展示空間に限らず、デザインする、となると何かをまとめたり削ぎ落としたり、見やすく分かりやすくすることが選択される場面が多くありますが、雑然とした状態をどう肯定するか、ということに興味がありました。デザインという名のもとに好きだった街並みやお店や雑誌が小綺麗にまとめられ味気なくなってしまうと感じることもあり、どうしたら混沌としたそのままとも言える状態

を肯定的に作り出せるのだろうか考えることもありました。雑然とした街並みには、その状態だからこそ表れているものもあると思うのです。まとめきれないそのままの状態、そういう自由さは、僕自身が藝大にいた頃感じていた空気感とも近いのかもしれない。佐藤先生が、“風景いいですね”と即座に反応してくれたのも、風景がもつそのままの状態とも言える肯定的な空気感に可能性を感じてくれたからでしょうか。

風景をつくるということだけであれば、人工物のない見晴らしの良い景色という設定でもよかったと思いますが、街並みでは家があるから人がいる風景として見えるように、そこに人の痕跡や活動を感じることがこの展示では大切だと思いました。小屋があればそれは先生を象徴し、小屋の外で修了生の方たちが自由にそれぞれを表現していれば、それは先生と教え子の方たちとの関係を表しているとも思いました。それで、基本的には小屋の中に佐藤先生の作品、小屋の外に修了生の方たちの作品を展示するとよいのではと考えました。

また、展示壁が一定数必要となった時には、展示壁を塀や柵として見立てることで、小屋と塀の間は庭、塀と塀の間は道となり、より街並みらしい風景を作ることが可能となりました。ある作品は庭に置かれ、ある作品は塀に飾られ通りから見られ、ある作品は家の外壁に飾られ庭から見られることになります。それは街の中に誰かが書いた落書きや掲げられたポスター、庭に置かれた盆栽や家の窓のような人の振る舞いの表れが、街の風景をかたち作る一つ一つのエレメントだということを思い起こさせます。

小屋や塀は、佐藤研修了生で作家の堤有希さんの白いテキスト作品で覆われました。ものに白い布がかかった状態で想起されるのは人のいない古い家の中の家具に覆い被さったゴーストのような状態ですが、そこでの白い布は、家具を埃や劣化から守ると同時に、その時間と空間がこれまで使われていた時間と今後使われるかもしれない時間との幕間であることを表象してもいます。風景を作り出そうと見立てた街並みの小屋や塀に白い布が覆い被さることは、展示空間にある時間の幅を持ち込み、退任展というこれまでの時間とこれからの時間の幕間を示してくれたように思います。そしてその白い風景を先生のかつての教え子の皆さんの作品が彩る幕間の光景は、佐藤先生と修了生の皆さんの間に流れる信頼に満ちた空気感にも近いのではないかと考えていました。

View of an Intermission

Ryosuke Yuasa

Architect/Associate Professor, Tama Art University

“Should we build a landscape?” I posed this question to Professor Sato as I sipped my drink from the drink bar at the Denny’s near the Tokyo University of the Arts campus during our first meeting. He replied immediately: “Sounds good.” I continued, “And if we added huts, that would create inside and outside spaces” to which he replied, “I will build them,” deciding on the spot to construct the huts himself. Inspired by the professor’s work, I had had the idea of building a kind of exhibition space where we could create a landscape of light in a similar way, but due to the nervousness associated with meeting for the first time, I neglected to provide any explanations of my ideas and conveyed my vision of the end result though the single word “landscape.” Nevertheless, the professor took this word “landscape,” expanded on it, and decided the direction of the exhibition. And because the direction was decided in this way, I ultimately never explained to the professor why I had wanted to make a landscape. Now that some time has passed since the end of the resulting exhibition, I thought that I could write down here all that I failed to say at that time.

As you may know, Professor Sato’s photographs depict light. And rather than a single light, I get a sense of many lights gathering together, jumping, marching, and dancing in some form of affirmation. Now, when we “see” something, our retinas are simply capturing light reflected off a material in front of us and transmitted within the visible light range of 380 - 780 nm. In reality, there is a lot of light that our eyes cannot see, which also includes light that passes through the earth. Looking at it this way, you could say that we exist among a shower of light. And while cameras have a shutter speed of less than a tenth of a second, and in this mere instant they capture and save light onto the film or sensor, when looking at Professor Sato’s photographs I felt that I could see lights still twinkling during this miniscule window of time.

When I first heard about the content of the exhibition, in which dozens of students’ works and Prof. Sato’s works would be shown simultaneously, I wondered if it would be possible to portray this idea of lights behaving freely, as in his photographs, in the form of a landscape, and I had the idea to replace the “lights” in this concept with the students’ works, as a positive representation of a range of time. I thought that with the work of many different people involved, things could get a little chaotic, but that if we were able to present this as a landscape, then we could make the chaos work. When it comes to designing in general - not limited to exhibition spaces - there are many situations in which a choice is made to combine things, make cuts, and essentially make things easier to see and understand, but I had been interested in the idea of showing clutter and chaos in a positive way. I sometimes feel that the streets, stores, and magazines that I used to love have since

become bland, neatly put together all in the name of “design,” and I was considering ways in which I could positively create a state of chaos that could be described just as it is. I believe there are elements of a chaotic streetscape that only come about precisely because it is chaotic, and this kind of freedom, this state of things as they are, may in fact be similar to the atmosphere I felt when I was a student at the University of the Arts. And I think that perhaps the reason why Professor Sato immediately replied “Sounds good” to my idea of making a landscape is because he also sensed the potential of the positive atmosphere of things being left as they are, which is how a landscape could be described.

If it were only about making a landscape, then a setting with a nice view and no man-made structures would have been fine, but I thought it was important for this exhibition to include traces of people and their activities, as a cityscape with buildings is seen as a landscape that includes people. If there were huts, these huts could represent the professor himself, and the relationship between the professor and his students could be represented by having the many students freely expressing their ideas outside the huts. So, I thought that essentially the professor’s works could be displayed within the huts, with the work of the students displayed in the exterior areas.

When it became necessary for there to be a certain number of gallery walls in the exhibition, by presenting them as walls or fences we could create the idea of gardens between a hut and a fence, and roads between fences, making the landscape look more like a cityscape. Some works could be displayed in the garden, some displayed on a fence and seen from the street, and some displayed on the exterior wall of the huts and seen from the garden. This would remind us that graffiti painted by someone or posters hung in a city, bonsai trees placed in a garden, windows of houses, and other signs of human behavior are all individual elements that combine together to create a cityscape.

The huts and walls were covered with white textile works by Yuki Tsutsumi, an artist and a graduate of Professor Sato’s lab. Objects covered in white cloth may conjure up ghostly images of covered furniture in old, abandoned houses, but in addition to protecting the furniture from dust and deterioration, these textiles represented the interlude between the time and space that has been used in the past and may be used again in the future. The white cloth covering the huts and fences of the townscape, which were intended to create a landscape, brought a certain breadth of time into the exhibition space and indicated the interval between the past and the future time of the exhibition. I also thought that the white scenery decorated with the works of his former students might be similar to the atmosphere of trust that flowed between Professor Sato and his students.

シンポジウム「交差する時間—藝大の教育と生きることの実践」

Symposium “Intersecting Time – Education at Tokyo University of the Arts and the Art of Living”

日時:11月9日(土) 14:00~16:00

場所:東京藝術大学 中央棟 第一講義室

内容:佐藤時啓研究室の現役生と卒修生によるシンポジウム

目的:本展覧会には、東京藝術大学先端芸術表現科で教育を受けた59名の研究生・卒修生が参加。今回はその内の11名が登壇し、先端芸術表現科や研究室の教育をどの様に受け止め、また現在どの様に「生きている」のか、話を聞き出す。

Date:

Saturday, November 9, 14:00–16:00

Venue:

Tokyo University of the Arts, Central Building, Lecture Room 1

Overview:

A symposium showcasing the work of current and alumni students from Tokihiro Sato’s lab.

Purpose:

This exhibition features 59 artists who have studied in the Department of Intermedia Art at Tokyo University of the Arts. In this session, 11 of them will take the stage to share their perspectives on the training and education they received in the department and the lab, as well as how they are currently engaging with their artistic practices and endeavors in life.

トークリレー登壇者

秋本瑠理子 2015年修士課程修了…p.080

石川智弥 2005年修士課程修了…p.100

呉在雄 2022年博士課程修了…p.056

紀雪哈 博士課程在籍中…p.062

下西進 2015年博士課程修了…p.060

髓良彦 2014年修士課程修了…p.116

鈴木のぞみ 2022年博士課程修了…p.118

田中一平 2011年修士課程修了…p.136

朴ナヒョン 2017年博士課程修了…p.084

牧田沙弥香 2019年修士課程修了…p.146

村上裕 2023年博士課程満期退学…p.142

Talk Relay Speakers

Ruriko Akimoto – Completed Master’s Program in 2015…p.080

Tomoya Ishikawa – Completed Master’s Program in 2005…p.100

Jaewoong Oh – Completed Doctoral Program in 2022…p.056

Xuehan Ji – Currently Enrolled in Doctoral Program…p.062

Susumu Shimonishi – Completed Doctoral Program in 2015…p.060

Yoshihiko Zui – Completed Master’s Program in 2014…p.116

Nozomi Suzuki – Completed Doctoral Program in 2022…p.118

Ippei Tanaka – Completed Master’s Program in 2011…p.136

Nahyun Park – Completed Doctoral Program in 2017…p.084

Sayaka Makita – Completed Master’s Program in 2019…p.146

Hiroshi Murakami – Withdrew from Doctoral Program in 2023…p.142



はじめに

田中 進行を務めます、田中と申します。よろしくお願いいたします。まず始めに佐藤先生よりご挨拶いただき、今回の展覧会はどのように作られたか簡単に振り返りたいと思います。

佐藤 お集まりいただきましてありがとうございます。佐藤時啓です。先端芸術表現科が1999年に完成しまして、その年から私は教員として関わって参りました。立ち上げ時は5人の教員。川俣正、藤幡正樹、渡辺好明、日比野克彦、そして私。まあ私が最後になりました。

そもそも先端芸術表現科ができたきっかけですが、80年代～90年代、画家が物を作ったり彫刻家が映像の作品を作ったりと、伝統からはみ出すように様々なメディアが広がっていきました。そういう時代の要望に応えるように、新たな科の計画ができたのです。上野は東京美術学校時代から続いていて、もともとは徒弟制度的な教育が行われてきたわけですから。それとちょっと違うような形を先端芸術表現科の中で考えました。例えば、新たな関係性の表現、インタラクティブですね。「他者と表現者」「社会と表現者」「世界と表現者」というような、関係性を考える視点が出てきました。一人の表現ではなくて多くの知を結集して、一つのことをやり遂げる。今回の退任展も僕個人のというよりも、僕が25年の間に関わった卒業生たちと一緒に作り上げる、最後のプロジェクトというか、そういうものを実現させました。

私のアイディアとしては「風景を作る」ということをコンセプトにして、建築家の湯浅さんと相談しながら、空間のイメージを紡いでいきました。小屋を建て、壁を立てて、人が歩き回る。ラ

ンドスケープですね。その制作もみんなに協力して頂き、展覧会ができていったんですね。

今日は「生きる」とってどういうことなのか、思っていることをみんなに話してもらえたらと思います。大学で勉強して、社会に出て、それぞれ活動しているわけだけど……藝大に入ってその後食っていけるのかみたいな、そんな現実的な話もありますが(笑)。じゃあ食えていれば生きていけると言えるのか。そういうことも含めて話してもらえればいいなと思います。それでは、今回の展覧会がどのように出来上がったのか、振り返ってきたいと思います。

田中 会場構成ではLGSという素材で小屋と壁を作る、なかなか大掛かりな建て込みをしています。佐藤先生のアトリエでOB、OG、現役生も含めて制作をしています。

佐藤 取手市内の何箇所かに作品を収納していたんですが、藝大を退任するにあたって自宅から近い行田市の、40年前のセブンイレブンをスタジオとして使っています。そこで今回の壁作りを始めて、週末合宿を有志のみんなと何回か繰り返しました。搬入当日、10tウィング車へLGSの壁を半分に折るように分解して積んだのですが……制作当初、トラックの高さを調べずに始めて、途中でちょっと設計を直して収まるようにしました。

田中 10トン車にギリギリ入った、というようでしたかね(笑)。

佐藤 そうですね。ここからは平面図に書いてあった場所を実際の空間に落とし込んでいく作業。いつもスタジオで作ったものを美術館に持ち込むと、思っていたより小さく感じるんですが、今回はあんまり感じなかったですね。

田中 CG作成や墨出しなんかも、それぞれの作業で得意な卒業生がいて、すごい知恵だなと思いつつ。トータル5日間ですかね。美術館の外で部材を切ったりしながら、小屋を組み上げていきました。屋根ができてきた頃、今回の特徴でもある布が掛かるのですが、堤さんの制作でしょうか？

佐藤 彼女が会場全体とのコラボレーションで、LGSで作った小屋に大布の作品を被せたんですね。これを前提として作ったんですが、大変な作業ですよ。

田中 そこから個人の搬入が始まって、今に至るということですね。ありがとうございます。

登壇者によるトークリレー

では続いて本日のメインでもありますトークリレーということで、出品者11名が登壇します。会場でキャプションをご覧になったかと思いますが、自分自身の制作について、佐藤先生であつたり研究室が、自身と作品へどう影響し合ったかが書かれています。本日はそういうところをもう少し掘り下げて、聞いていきたいなと思っています。それと先生から「生きるとは何なのか」というお題がありました。写真もプロジェクターで写しながら進めていきたいなと思います。秋本さんから行けますか？

秋本 初めまして、秋本瑠理子と申します。私は今回の先生の退任展にピンホール現象を使った作品を出展しております。先端で先生の授業を通じてこの現象に出会い、それ以来、ピンホールを用いた写真や映像制作を続けています。

今回の作品は、佐藤先生のゼミに入った際、初めて制作した、ピンホールカメラで撮影した写真と、大学院を修了した後に各地を巡って撮影したピンホール写真を組み合わせて一つの作品としたものです。この二つの作品の中で時間の流れを感じていただきたいという点と、先生の退任展にあたり、作品展示を通じて感謝の気持ちを伝えられればと思い、この形にしました。

先生のゼミは毎週金曜日に開かれていて、先端のゼミ室や井野団地の部屋に学年を超えて集まる貴重な時間でした。毎回さまざまなテーマがあつたと思いますが、その中で制作の話であつたり、それぞれの悩みであつたりを共有しながら、一緒にものを作る場だったと記憶しています。私にとってもこのゼミの時間は非常に大きな学びとなりました。作品づくりだけではなく、人としても成長できる空間だったと感じています。



秋本瑠理子

現在、私は美術教育の博士課程2年として教育の現場に携わっています。まさに、そのような自由闊達に意見を言い合えるような「学び場づくり」をどう実現するかが、今の私の大きな課題です。作品だけではなく、価値観や教育の在り方という幅広い面においても、佐藤研究室での経験が今活かしている。そのように感じております。

石川 学部は藝大の彫刻科で、入学は先端の学部が新設された年でした。隣で四年間ずっとウォッチしてきて、修士で一



石川智弥



《てざわりの旅》(2021)

空間インスタレーション・ミクストメディア(楠・シリコン樹脂・蛍光顔料)／技術協力:株式会社愛和義肢製作所、書(毛筆文字):桐生真輔(京都芸術大学)、平曲:CD『琵琶法師の世界 平家物語』
「ユニバーサル・ミュージアム さわる! “触”の大博覧会」国立民族学博物館(大阪) 出品作品



本展出品作品接写

期生として門を叩きました。修了してからは助手と非常勤講師、合わせて7年間ほどスタッフとして関わったのですが、大学を離れたのちに美術作家業をほぼ廃業。しばらくはレーシングカーを作る会社に就職したりしてたんですけども、結婚を機に制作を再開しました。ふつうとは反対ですね。彫刻科の同級生だった妻とアートユニットを結成して、妻が当時やっていた

「手でみる美術作品」という活動に合流し、2021年に大阪の国立民族学博物館で広瀬浩二郎先生が企画した「ユニバーサル・ミュージアム展」で、木彫の人物像をベースにしたインスタレーション作品を発表しました。この作品は佐藤研の後輩で京都芸術大学教員の桐生くんとのコラボレーションです。

広瀬先生は全盲の文化人類学者で、博物館、美術館というのは視覚障害者にとって全く取り付く島がない施設だと異義を唱える研究もなさっています。その方が「近頃『手で触れる美術展』というのは多く実施されているが、ほとんどが『触れてもよい展覧会』にすぎない」と批判していたので、活動当初から「触らないとわからない」触ってもらうからにはそれ相応のものを与えなければ、ということを重視してきました。でも、今回美術のど真ん中みたいな藝大でやると、触っていいよって言ってもちょっと指でふれる程度だったり……まあ、やっぱり壊したら怒られる、弁償しなきゃいけないとかって恐怖があると思うので、視覚に頼りすぎない美術表現なんてまだまだ「周辺」だっているというのは実感しました。

それでも革命は周辺から起こるっていう言葉もありますし、もうしばらくこの辺をうろついていこうと思っています。

呉 呉在雄と申します。韓国からの留学生でした。もともと東京工芸大学写真学科で、正統な写真をずっと撮っていました。その大学では3年生になると特別講座という、いろんな作家さんを招いた授業があります。そこで佐藤先生と初めて出会いました。自分が写真をどういうふうに撮って行こうかと悩んでいたその頃に、先生の作品を見て、あ、これだ。と私はちょっと感動しました。そこから自分の写真はどんどん変わっていったなと思っています。

修士の時に、電車の中から窓の外側を撮った写真があります。写真って私が見たものとはちょっと違うものを写している、と気がついてから、ではカメラに任せて撮るとどうなるだろうというところから、そんな作品を撮りました。3年生の頃は目に見えないものを撮ろうという気持ちが強くて、風をどういうふうに写そうかなと考えた時に、やはり木を撮るのが一番いいなと思って、風の強い日を選んで写真を撮りました。

今展示している作品は《昼と夜-東京》です。私が住んでいるマンションから外側を撮ったもので、雲があって昼に見える写真だけれども、建物の光は夜の姿になっている。私は今まで時間を研究しながら撮ってきて、昼と夜というこの様な写真に至りました。

いま日本に来て16年目なんですけれども、やっぱり外国人と



呉在雄

してはビザが一番問題ですね。今年もビザのことで先生に相談したこともあるんですけども、やはり学校を卒業してからは就職じゃないと、なかなかビザが下りないということで。私は9月から会社に勤めることになって、やっと就労ビザで生活しています。紀 紀雪晗と申します。中国からの留学生で、現在は博士3年生です。佐藤先生の「生きること」の話に関して触れたいです。自分なりの理解では、自分の心に従い、自分の心をトレーニングして、生活のすべてをきちんと体験することだと思っています。佐藤研は先輩たちと一緒にいろいろなイベントを通して、「遊びは大事」ということをよく体験させてくれて勉強になりました。この遊びは「生きること」を感じさせ、また証明します。でも先生が言う遊びは、ただの遊びではなくて一種の態度だと考えています。



紀雪晗



《寝そべり》(2024)より 写真



《Overture》(2024)より「千葉県夷隅郡、小波月海岸、海の音」写真、音声

例えば佐藤先生の《光・呼吸》のシリーズで、遊びから出発し、海で泳ぎながら、制作途中で必ず苦勞をかけますね。しかしこの遊びからの体験こそが、「生きることを感覚に伝える」と思います。このようなことも私の制作にすごく影響を与えていました。私の《寝そべり》シリーズは自分の制作行為そのものを表現として行い、自分が生きることを感じたいという考えから作り始めました。当時、中国の若者たちが社会のストレスに直面して低欲望という状態が普通になっていました。そこで彼らに自分をゆっくり休ませ、寝そべる状態を体験してもらいながら、自分でシャッターをコントロールさせます。それで今回展示された作品は、更に写真と制作の過程について考えました。

写真はもともと対象物とか被写体によって情報を伝えていきます。でも私は純粋にどうやって自分の行動によって表現を行うかを考えながら、深夜にカラーのフィルムを直接ドラムの表面に置いて叩きました。実際には撮影場所は山とか森の中、海とかでしたが、露出不足で場所など写真の客観的な情報をすべて消しました。それ故に自分の動き、自分の「遊び」そのものを強調したくて、表現しています。もちろんこれは「生きることを感じるための、私自身の修行の過程です」。

下西 下西進です。本日のタイトルに副題をつけまして「生き延びるための家事と育児」としています。私は1995年に武蔵野美術大学に進学し、入学当初は舞台美術を専門にしておりました。その頃影響を受けた展覧会、(原美術館で開催の)「Photography and Beyond in Japan」に出品していた作家の一人が佐藤先生だったんですね。

私の作品は、6m余りある一脚を自作し、カメラを取り付けて写真や映像を撮影するというものです。撮影機材の自作や、都市にカメラを据え、撮影者そのものがパフォーマンス的であるといったことは、佐藤先生から大きな影響を受けていると思います。

作家活動に加え、科学研究費の助成を受けて山岸章二という写真プロデューサーの研究をしています。先日、T3東京国際写真祭で、この研究について発表しました。サンフランシスコ近代美術館のサンドラ・フィリップスさんが、あなたの研究に関して何でも協力したいと申し出を下さり、今また動き始めているところです。

私は小田原に住んでおりまして、魚がめちゃくちゃ安く売られているんです!ハワイでは高級魚のシイラが、ここではなんと一匹500円なんですね。今は市民農園を借りて多くの収穫があるため、魚を捌き、自分で育てた野菜を食べる生活です。私の妻は美術館の学芸員をしており、この後ご紹介する鈴木の



下西進

ぞみさんの個展を現在担当しています。妻の仕事が忙しくなると、私が家事育児の大半を担当することになり、美術界を裏方で支えている気持ちで励んでいます。

生業の一つとして、我が家からほど近い場所にある、杉本博司が設立した財団での勤務があります。ここでは、杉本さんと話す機会もあり、実はひっそり自分の研究も進めています。妻が勤めている美術館で杉本作品を買い、それが回り回って自分の職場の財団にも還元され……。つまり、私の育児家事が日本の美術、ひいては世界の美術界を牽引しているという状況です。

髓 髓良彦と申します。自分が藝大に入る前は、最初に電気工事士をして、そのあと職を転々としていました。やっぱり自分で信念を持って、何か一つの仕事やそういったものをしていきたいと思ったので、電気工事士・CADオペレーター・インテリアショップの店員を経て、藝大に来てしっかり美術を学ぼうと思いました。

今回展示している作品は、中央の写真に鉄や、自分が捌いたイノシシの骨とかそういうものが写っています。社会が回っていく中で犠牲になって、でもそのおかげでまた回って生きていく、そういうものを表現しています。その左右にある写真は、佐藤先生の故郷である山形で撮りました。ちょっと大吹雪の中めちゃくちゃ寒かったんですけど、鳥海山になんとか登って、耐えて、雪浴びて、でも撮って、帰ってきました。このように醜美と、普通に美しいもの。そういった二つのものを混在させたら、いろんな方に最終的に楽しんでいただけるんじゃないかなと思って、今回そういう構成になっています。



髓良彦

《与えたもう奪いたもう》(2011)
インクジェットプリント、鉄粹

見える、見えない危ういところ。そして、自分の存在位置。そんなあやふやになる世界が楽しくて。基本的にもう色々揺れているんですが、それはさておき、能動的に動く、そんな空間を作りたくてやっています。生きることって自分にとって、まあ戦う強い面もありますけど、ちょっと客観的にふわっと引いてしまつて。自分って今どこにいるんだろうとか、好きな言葉が不可知でいろいろ調べても、なんか全然、うーん。究極の答えが見つからなくて嫌になったんですが、知りきれないっていうのがすごく楽しくて。どこまでも勉強していいんだ。生きることよくわからないですけど、探し続けていくっていうのを良しとして。そうやって行けば、なんか、うん。すごい楽しいことになるなと思つて。で、制作し、生きてます。

鈴木 私は以前、東京造形大学で絵画を学んでいました。



鈴木 のぞみ



展示風景：HIRAKU Project Vol. 16 鈴木 のぞみ「The Mirror, the Window, and the Telescope」、ポーラ美術館(2024)

Photo: Ken Kato



《江戸時代の鏡・森島中良の『紅毛雑話』》(2024)

日本製の鏡、写真乳剤
w.132×h.77×d.4mm

キャンバスに油絵具という伝統的な手法で描くのではなく、支持体となるものにどのように像を定着させたり現出させることができるのか、素材を探りたいと考えて写真を独学で始めました。学部を卒業して6年経ってから、大学院に進学して佐藤先生の研究室に所属しました。はじめは写真の乳剤をしっかりとガラスに固定することや、像を綺麗に出す方法など、佐藤先生に技術的なことを相談していました。

佐藤先生の、無いものは自分で作ったり、困難なものに挑戦されていく姿からも、とても影響を受けています。私は、窓、鏡、レンズなどのガラスがはめられている事物を支持体にして写真を定着させたり、石などにサイアナタイプで影を焼き付けたり、ピンホール現象によって日常にある穴に生じている像を可視化するような作品を制作しています。最近では、江戸時代のメガネに紅毛雑話という蘭学やオランダの文化を紹介する本のイメージを焼き付けるなど、日本の近代化についてリサーチした作品制作を行なっています。このような、日常にあるさまざまな光の現象を通して、ものの持っていた記憶を写真で可視化したいと考えています。それは佐藤先生が、原初的な写真の現象から、最新の技術まで、さまざまなことを通して、写真によって像を現出されている姿勢から影響を受けていると思います。私の場合、自分で決めたコンセプトの中で頑なに考えがちなんですけども、佐藤先生や佐藤研のみんなの柔軟さや、寛容さからも良い影響を与えてもらっていました。

卒業後は、私はとにかく制作を続けられたらいいなと思って。在学中に学芸員の資格を取っておけばよかったとか、カメラのスキルをもっと上げておけばよかったとか、いろいろ後悔もしてはいるんですけど、非常勤講師の仕事やアルバイトなどをしながら、制作を続けています。家族の理解があり、支えてもらっていることも大きいです。まだ作家活動を主軸とした生活は軌道に乗っているとは言えないんですけど、これからも作り続けていきたいし、家族のことも幸せにできたらいいなと思っています。

田中 自分は2005年に先端芸術表現科の学部に入學、2011年に修士課程を修了しています。動く彫刻、装置を作っております。今回の作品は3点あり、中央の作品は、モーターが1回転すると下にバネを動かして不規則な動きをするというものです。向かって右側はラジオが接点になってランダムにラジオがつかたり消えたりします。左側は同じように電球が点滅するっていうような仕組みで、この3点を出しています。コンセプトとしては、気配をどうやって作るかというところなんです。例えば誰も人はいないけども、何かここに人がいるんじゃないかと感じるものが、日常に多々起こると思うんですけど、その時の状況や感覚がとても面白いと思ってまして。それを作品によってなんとか生じさせられないかな、という興味で作っています。先生の長時間露光で一枚の画面の中に複数の動きが集約されてる部分でも、気配が一枚の中で感じとれるところが、近いものとしてあるのかなと今になって感じます。

先端は1、2年のうちに色々なメディアに触れる授業があります。自分は、金属の溶接がとても面白かった体験と、写真っていう媒体にも興味があり、どちらの表現方法に主軸を置かって迷っていた時期に、佐藤先生にポートフォリオでお見せしたら「ぜひ溶接やっていこう!」ってすごいエールをいただきました。あれ?写真の研究室じゃなかったかなと思いながら(笑)。



田中一平



《un-calculation》(2011) 修了制作



本展出品作品

《Lucky chance - 出会うべき出会い -》(2024)

《Lost - 迷う時、-》(2024)

《A tweet between two people - 君だから話せる -》(2024)

当時の先端の雰囲気として、どちらかという写真とかそういうメディアを推奨される空気を感じていたこともあり、逆にそう言っていたことが、今も金属の表現ができていることに繋がっていると思います。

あとM1プロジェクト(別冊p.160参照)という、建築の躯体をつなげて遊具を作るゼミ活動がありました……。簡単に言ってしまうと土木作業を研究室でやるっていうもので。フィジカルにきつい内容だったんですけど、基礎を作ったり、コンクリート流したり、夜通し溶接したりとかが、すごい身体的な力になっていると思っています。先生も彫刻出身ということで、人力でいかに重いものを動かすかっていう、発想が根底にあるのだと感じました。ウインチやジャッキ等を使って、1t、2tするものを動かすみたいな。卒業後にそれを実感するエピソードとしては、三年前ぐらいに自分の車が溝に落ちて、その時ウインチでひっこ抜くことが自分でできて。あ、これは生きる力だなと感じ

ました。自分の今の仕事としては学内のいろんなプロジェクトに携わっている状況なのですが、その中で社会人対象の講座を担当しています。美術に触れたことのない方に向けて、表現に対して大事な部分みたいなのを話すときに、学生生活で教わったものが身体化されているってというか、体の中に残っているので、それを話す時の手がかりにしています。そういった部分も含めて、今に生きているなと感じるところがあります。

朴 私は皆さんとちょっと違うかもしれないのですが、卒業した後は社会人を主軸として生きているので、今回の作品がそれこそ5、6年ぐらいぶりの新作になります(笑)。2010年に研究生として入って、修士の後に2017年の3月、博士として卒業させていただきました。自分の「皮」として着ていた衣類などの飾り物を素材に用いて、自分の「内面の顔」に見立てた仮面や被り物を作り、パフォーマンスをしたり写真や実物

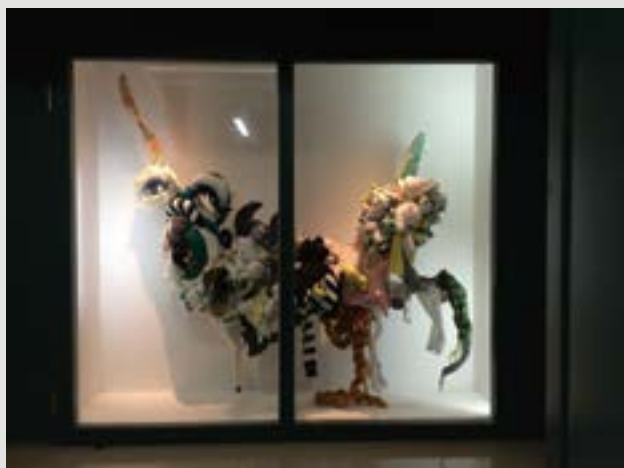


朴ナヒョン



《Greeting hand》(2016) 立体(古着、ミクストメディア)

本展出品作品



《Cluster》(2016) インスタレーション(古着、ミクストメディア)

の展示をしていました。今は東映でCG制作の進行と、撮影の企画、色々な人を手配するとかデータを納品する仕事もやっております。

私が大学で学んできたことすべてをこの会社の仕事にぶっこんでますよ、っていつも冗談半分に言っております。例えば、8×8(別冊p.160参照)という限られた空間の中に、自分はどういった作品を出せるのかをちゃんと考えて、そこに1人で展示したり、たまに2人でコラボしながら展示して、最後にみんなで講評したりして。井野団地での展示だったり、展示以外にも小麦粉変容研究会というのがあります。どこにでもあるような材料で食べられるものを作って、みんなに振る舞って、コミュニケーションをとる。そういったことを研究室に入ってやっていました。母親から「(本当に)美大に入ったんだよね?」と言われたこともあるんですけど(笑)。佐藤研で制作したり、教育として学んでいるっていう時点で、人との関わりが必ず発生しますね。

あと佐藤先生ご自身が写真と彫刻とか、いろんな経験をされていることもあって、基本的に学生のやっていることに否定的じゃないんですね。その学生に向き合って、学生がそうしたいのであれば、じゃあどうすればいいかと、一緒に悩んでいた。そうやって、人との関わりだったりみんなでプロジェクトを1つ成し遂げるっていう経験を持てたことで、佐藤研を出てよかったなとすごく思います。自分は芸術家としてだけでなく、人間として生きていられるかっていうのを試したかったんです。今入っている会社は6年目になります。ちゃんと学校で学んだことが社会人として生きてる証拠かなと思ってます。

牧田 最初初の展覧会について連絡が来たとき、佐藤先生か



牧田 沙弥香

ら「僕の宝箱をひっくり返したような展示にしたい」とあって。皆さんご存知の通りキラキラした物が詰まっている佐藤先生ですから。大学院では、一生懸命遊ぶということを学ばせていただきました。今私は茨城県で茅葺き屋根の職人の仕事を、まだ修行中ですけど……やっています。今回は同じく佐藤先生の研究室を出た大和田愛子さんが育てた小麦藁を使用して、屋根を作ってます。私もやりたいことが先生と同じようにたくさんあるんですけど、光で屋根を葺きたいなとふと思って、それを実現させたのが2年ぐらい前です。屋根の構造体を森につくり、白い服をまとった人がその周りをウロウロします。そこに屋根の形をした光を投影して、長時間露光をしました。呉さんに技術面のサポートと、当日も撮影をしていただきました。

今まで自分が作りたいものは自分で、と貫いてきていたんですけど、茅葺き屋根ってすごい大きいんですよ。人がその下で

暮らすわけですから。その大きいものをやり切って、1人だと到底敵わなくて。今やっている現場で、屋根のてっぺんにある瓦を下ろす作業をしました。一番上で職人が瓦を外して、中間でお家の人と毎日来てくれる人が下まで下ろして、何回か手伝いに来てくれる人たちが足場と地上で受け取って。1日でバーってお祭りのように下ろしたんですけど、なんか、こういった光景が佐藤研でもあったなっていう(笑)。すごいざっくり言っちゃったんですけど、職人の世界ってやっぱり他の人は手が出せない領域っていう雰囲気があって。それを職人が……佐藤研では佐藤先生が、開くことによって、外の人たちが入ってくることができる。伝統は残っていかなければって、守るように閉ざしていても確かに屋根や技術は残るけど、佐藤先生の周りでは、佐藤先生の作ったものだけが残っていくじゃなくて、その周りの人たちも含めて残っていく。やっぱり私達も佐藤先生の宝物だよなって。それがすごい嬉しいし、たぶんみんな嬉しいと思います。すみません、決め付けました。



《茅か光の遊び場》(2022)

写真作品

Photo by O Jaewoong



茨城の茅葺き屋根修繕の様子

村上 はじめまして、村上裕といいます。僕はもともと歴史がすごく好きで、何でも調べるのが好きだったんですね。美術をやるぞってなったときも、やっぱりいろいろと調べて。僕は学生の時間が長かったんですけど、先端芸術表現科の歴史と一緒にたどってきたみたいなのところがあって。現代美術自体も時代として異質さがすごく強い頃。1990年代から2000年代で、まだそういう時代だったんですよ。何か変わったことを考える人たちの集まりなんじゃないか、みたいな雰囲気が結構ありまし



村上裕

た。「ダンス白州」っていう芸術祭の図録の中で、佐藤先生の作品を初めて見ました。多分20もいかない、18歳ぐらい。もう何て言うか、僕自身の実感としては、作品のあり方とか態度っていうか、社会に対してのメッセージの傾け方とか、ずっと、こっちだみたいな確信があって。そういう中で美術をやってきて、ようやく佐藤先生のもので勉強できるようになったことは非常に嬉しくあってですね。美術だと思っているものがここにある、みたいな確信がずっとあって、今日まで来てるっていう感じなんです。今回の作品なんですけれども、週5で働いていて、ほとんどバイトで追われて制作時間が全然ないんですけど、その中でちょっとずつ作品を作っていて、溜まってきた作品を寄せ集めた感じで。もうずっと同じ作品をちょっとずつ形を変えてやっているんですけども。パフォーマンスを普段してしまっていて、日常、自分自身が生きてること自体をテーマにして、映像を取ったりしながら作品を作っています。なんだろう、歴史って何なのかなとか思うんですよ……。

会場から

田中 以上11名、出品者のトークリレーでした。スピーカーの皆さん、ありがとうございました。残り時間がわずかになりますが、会場の皆さんからもう少し、ちょっと突っ込んで聞いてみたいことなど、投げかけていただけますでしょうか。

質問者 佐藤研究室のゼミ活動ではどういうことをさせていたんですか。

佐藤 いま、小麦粉変容研究会が一番思い出に残ってるかもしれない(笑)。ゼミで教えるのは、もちろん美術を前提としたものなんですけど。アーティスト・イン・レジデンスっていうのがあるんですね。それは大学を出てからとか在学中でもいろんな土地に行って、そこで滞在をしながら制作をするっていうものです。そのときにまず主導権を握れるのは、食べ物を作れる人なんです!世界中で小麦粉が手に入るんですよ。研究室ではまず最初にうどんだったかな。それから大陸に渡って餃子を作り、最後にヨーロッパまでたどり着いてピザになって。ピザ窯を作って毎年佐藤研主催のピザパーティーをやっているんです。これ、勉強といえば勉強なんだけど、そんなストレートなものではなくて。ただ生きる力の一つではあるなとすごく思ってるんですね。

さっき遊びの話もありましたけど、毎年スキーにも行ってましたよね。今回の展示では中国、韓国、そしてヨーロッパから8人ぐらい、留学生が自費で来てくれたんです。その人たちはみんな、遊びに一緒に行った人たちなんですよ。ゼミで本当はちゃんとそれぞれの自己紹介とか、8×8で展示したものの批評とかを毎週やってるんですけど、そういうのは結構忘れるんです(笑)。そうじゃないものが残っている感じはありますね。

田中 確かに食の思い出は大きいですね。アートプロジェクトとかレジデンスでも、生活とともに制作も動かしていくってことを考えると、必ず食というのはついて回りますよね。家庭科みたいなことかもしれないですけど、抵抗なく、すぐその場で料理できるって実は結構すごいことなんじゃないかなと思ったりします。制作にも直結する、大事な力になっているように感じます。佐藤 あと最近だと、留学生がいろんな国から来るんですよ。イラン人でいつも怒りの作品を作っていたんですけど、その怒りの意味ってなんだろうとか、我々には理解できない部分があって。それがだんだんと、あ、政治状況のことを含んでいるんだとかがわかってきたり。拙い英語でみんな会話するわけです。いろんな国から来ているので。それぞれの文化の違いとか経験の違いとか、そんなことを遊びや生活の中から学べるというかな。勉強の方ではなかなかわからないことが体験できたな、というのはありますね。

さいごに

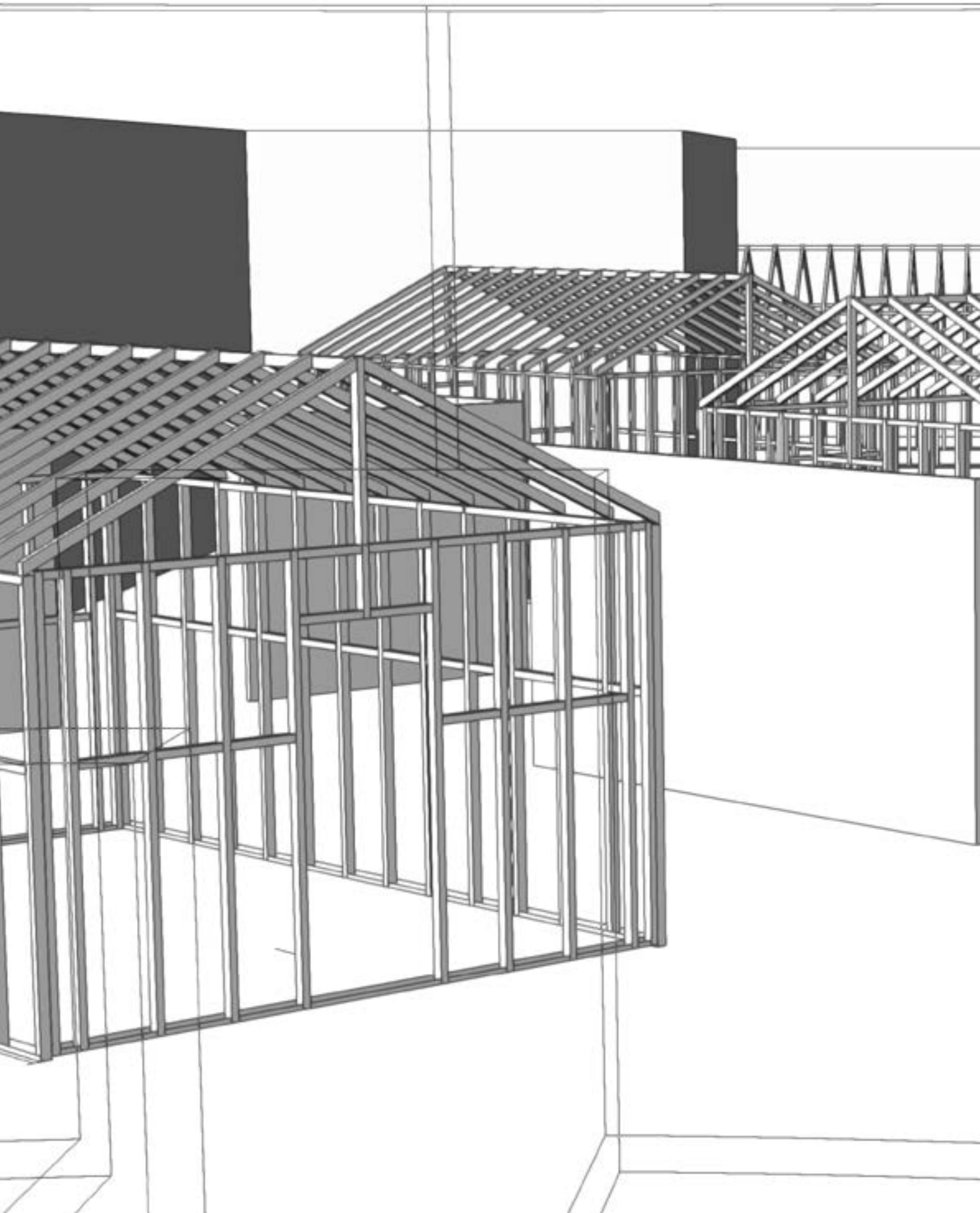
田中 ありがとうございます。ではそろそろ時間になりますので最後、先生の言葉で締めて終われば。

佐藤 さっき「宝箱」と言ってくれましたけど、自分自身の可能性を広げられたのはやっぱり……20代の人たちと25年間接してきたわけですね。僕自身も生活やいろんな制作をしてきたわけだけでも、常に気持ちが20代のままで。今回展覧会を作ったことによってその20代だった人たちが今、それぞれの年齢になってまた一堂に集まった。一つのコミュニティが新たに生まれた感じがして、これが今回の展覧会の意味なのかなという気はしています。

「生きていくこと」をテーマにしたんですけど、僕が制作の中で「なんで作品を作るんだろう」と考えるうちに、それはやっぱり「生きるためだ」と気がついたんですね。自分が一番夢中になれるものとは、人それぞれ違うけれど、僕自身は作品を作ることだったんです。そのために自分がこう、ピカピカッとやっている。側から見たらちょっと変なことかもしれませんが、それによってできてくる作品のイメージを抱いて作っていく。それがやっぱり僕にとっては生きる力というか……明日もまたやろう、みたいなことが常に起こるわけですよ。

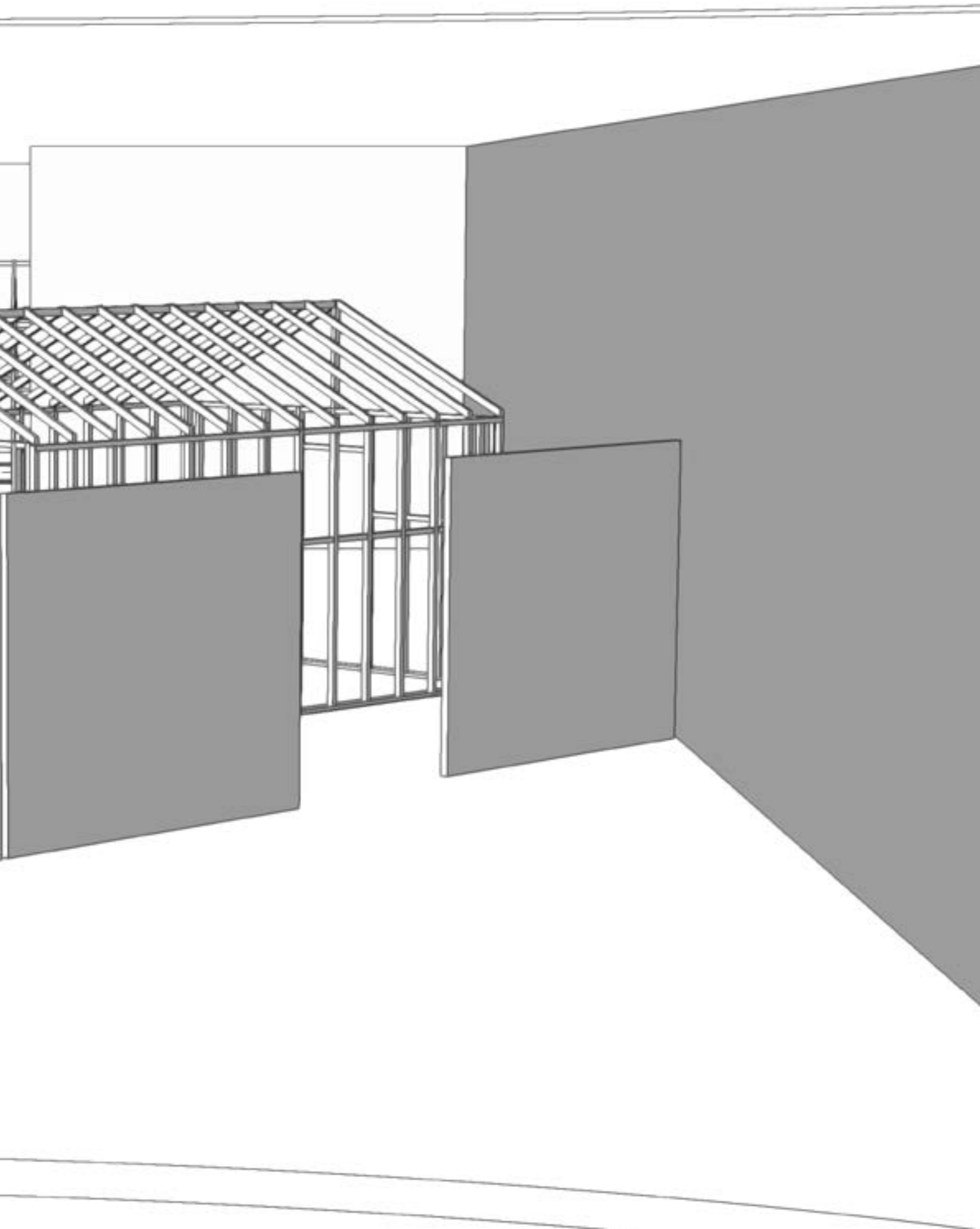
これまでの藝大は作家になることが全てだったけれど、別にそういうことではないんですね。幸せはいろんなところに転がっていて、それをしっかりと、ものにしていければいいわけで。何かのためになるアートというのは、もちろんいろいろ出てきたと思うんですが、必ずしも有効なアートだけではなくて、本当に個人向けの内向きの表現であっても、少しずつ大きくなって社会を動かす力になるんじゃないかな、というのが僕の信念なん

です。それは遊びも一緒だし、楽しむこともそうなんですけど。そうやってだんだんと、社会とアートっていうものの関係性が築かれていくのを夢見ています。なかなか長い間考えていることで、まあちょっと問題もあるんだけど……。本当にそう願っております。今日集まってくださったご来場の方々、展示に参加してくれたアーティストの方々、皆さんの未来を考えながら、今日は終わりたいと思います。



研究生 + 卒修生 作家頁

Artist Pages of Laboratory Students and Graduates





レースのかべ

Sheer Walls

—
テキスタイルワーク
布

Sewn textile
Textile

在籍中、佐藤先生の作品《リヤカーメラ》の鑑賞者と、操縦者のどちらも経験させていただく機会がありました。

両者は同じ空間を体験していますが、受け取る感覚の質が異なります。

鑑賞者は、暗がりに映し出されるイメージに集中します。

車輪の振動と外部の音を感じることができるので、周辺を移動しているだろうことがわかります。

刻々と変化し映し出されるイメージの軌跡の美しさと、不確かな移送の不安とが入り混じり、不安定な感覚があります。

操縦者は、自由に空間を移動できます。

しかし、鑑賞者を乗せた車体は重量があり、外部環境を感受する寛容性は低下します。

終着点までに移動することが重要となり、周辺で起こっているわずかな変化を感じ取ることはできません。

移動の過程で起こっている途中経過に目を向けることができなくなってしまう。

同じ空間内で同じ軌跡をたどった両者の体験の異質さがわかり、両者が一つの身体となって不自由さを補い合っているように感じた経験となりました。

私にとって《リヤカーメラ》は、不確かで不安定な空間の質を露呈し、そのままを肯定してくれた作品としてありました。

During my time at the university, I had experienced Professor Sato's artwork *Rear Car Camera* both as a viewer and an operator.

Although the viewer and the operator are involved in the same space, the quality of the sensations received was different.

The viewer focuses on the image projected in the darkness.

They can feel the vibration of the wheels and the sounds of the outside world, suggesting that movement is occurring, outside of their control.

There is a sense of instability mixed with the beauty of the trajectory of the ever-changing and projected image and the uncertainty of the moving.

In contrast, the operator is free to move around.

However, the body carrying the viewer is heavy, its tolerance for sensing the external environment is reduced.

It becomes important to reach the destination, and they cannot sense the slightest changes occurring around them.

They are unable to focus on what happens during the process of moving.

Through the *Rear Car Camera*, I realized the difference in the experiences of both parties despite following the same trajectory in the same space. They merge into one body as if they are compensating for their sensory organ deficiencies.

Rear Car Camera exposed the uncertain and unstable quality of space, affirming it as it is.

会場に点在する小屋や塀を
透するレースの布で覆います。
壁の向こう側もこちら側も構造体も
透けて見えます。
床を引かずった裾は
すぐに踏んずけてしまうドレスのように
とても動きづらいものです。
レースの壁は
個と個を仕切って区別する強さはありません。
構造体に支えられ
しっかりとここにたっています。

Huts and fences around the venue are covered
with sheer clothes.

The cloths are translucent.

Thus, both sides and even the building's
structures are still visible.

A headline that drags on the floor makes it very
difficult to move,

as if it's a dress that can easily be stepped on.

The translucent walls are not strong enough to
separate and distinguish one from another.

Those stand firmly there supported by the
structures.

1986年山形県生まれ。武蔵野美術大学卒業後、株式会社布に勤務。退社後、
2019年より東京藝術大学大学院美術研究科修士課程へ。修了後、作家活動の
ほか、テキスタイルデザイナーとして建築家のプロジェクトにも携わる。現在、
熊本と東京を拠点に活動中。

Born in 1986, in Yamagata Japan.

Graduate from Musashino Art University, Japan. (2009)

After graduation, she worked as a textile designer at NUNO Corporation. (2009-2018)

Graduate from master's degree of Tokyo University of the Art. (2022)

Yuki Tsutsumi now lives and works in Kumamoto and Tokyo, Japan.

She created space using textiles and other materials.

And also she collaborates with architects as a textile designer.

陳雨心

Chen Yuxin

2024年博士課程修了

Playground

—
写真

印画紙、インクジェットプリント

Photography

Paper, Inkjet print



佐藤先生の授業では、遊び心を持って研究を始めることが奨励されていました。先生は、「遊び」と「研究」は対立するものではなく、むしろ相互に影響し合うものだと教えてくださいました。私が写真を「遊び」として始め、それが学問の対象になったとき、遊び心を持ち続けることに戸惑いを感じましたが、先生が《リヤカメラ》で校内を巡る姿を見て、「研究」に遊び心を取り入れる大切さを学びました。特に、「ニューカラー」時代のカラー写真が私の表現欲を刺激し、その影響を受け現在の作品に取り組んでいます。今回の出展作品には、その時代への敬意と私自身の「遊び心」を込め、遊びこそが写真家にとって最大の味方であることを、改めて実感しました。

In Professor Sato's class, we were encouraged to start our research with a sense of playfulness. He taught us that "play" and "research" are not opposing concepts, but rather they influence each other. When I began photography as a "play," I felt confused about how to maintain that playful spirit when it became an academic subject. However, seeing the professor moving around campus with the *Rear Car Camera*, I learned the importance of incorporating playfulness into "research." In particular, the color photography of the "New Color" era stimulated my desire for expression, and I am currently working on my pieces influenced by that era. In the works I am exhibiting this time, I have infused my respect for that period and my own "playfulness," and I have once again realized that play is the greatest ally for a photographer.

私にとって写真の一番楽しい時期は「ニューカラー」時代であり、モノクロからカラーへの移行は新たな遊びの可能性を与え、日常の彩りを最大限に引き出しました。彼らが表現した、色と形で遊ぶ写真には、生活の楽しさや発見が満ち溢れており、私もまたその時代の写真家の視点に憧れを抱きました。

今回の出展作品は、そんなニューカラー時代への敬意を込め、私なりの「遊び心」を取り入れた表現であり、遊びこそが写真家にとって最も強力な味方であることを再確認しました。

For me, the most exciting era of photography was the “New Color” period. The transition from black and white to color opened up new possibilities for play, maximizing the vibrancy of everyday life. The photographs from that era, which played with color and form, were filled with the joy and discoveries of daily existence, and I found myself admiring the perspectives of those photographers.

My exhibited work is a tribute to the New Color era, incorporating my own sense of playfulness. Through this process, I have once again reaffirmed that playfulness is the most powerful ally of a photographer.

中国浙江省生まれ
日本写真協会会員

2024年東京藝術大学大学院美術研究科 先端芸術表現専攻 博士課程 修了
世界を認識しつつ、写真という行為を通じていかにアイデンティティを確立するか、それが自分の作品のテーマだと考えています。

Born in Zhejiang Province, China.

Member of the Japan Photographic Society.

Graduated from the Advanced Art Department, Graduate School of Fine Arts, Tokyo University of the Arts in 2024.

My work explores the theme of how to establish identity through the act of photography while recognizing the world around me.

山本愛子

Aiko Yamamoto

2017年修士課程修了

Waver

—
染色

絹布に染料、顔料

Dyeing technique

Dye and pigment on silk cloth



自身の作品には、「揺らぎ」や「あわい(間)」をテーマとすることが多くあります。それは、佐藤研での日々や経験が自然と反映されたもののように感じています。ゼミにはさまざまな文化的背景を持つ学生が集まり、異なる価値観や考え方が交わる場でした。そこで過ごすうちに、異なることが当たり前であるという感覚が自然と身につきました。個々の意見や感性が交わり、ときに思い通りにならないこともありながら、その中でそれぞれが自分の揺るがない部分を見つけ、確立していく場だったと実感します。当時は何気なく過ごしていましたが、振り返ると非常に豊かで高度な環境だったと思います。

私が制作で用いる染色という技法は、水や染料の動きによって生まれる偶然性が魅力のひとつです。思い通りにならないからこそ、揺らぎやあわいといった流動性がそこに生まれます。今振り返ると、佐藤先生やゼミ生たちと過ごした時間が、自身の根底にある考え方に大きな影響を与えてくれたのだと感じます。

Many of my works explore themes of “fluctuation” and “in-between spaces.” I feel that these ideas have naturally been shaped by my experiences in Professor Sato’s seminar. The seminar was a place where students from diverse cultural backgrounds gathered, exchanging different values and perspectives. Through spending time in this environment, I naturally developed a sense that differences are a given. It was a space where individual opinions and sensibilities intersected—sometimes not going as planned—yet within that, each person discovered and solidified their unwavering core. At the time, I took it for granted, but looking back, I realize it was an incredibly rich and intellectually stimulating environment.

The dyeing techniques I use in my work embrace the element of chance, born from the movement of water and dyes. It is precisely because things do not always go as intended that fluctuations and in-between spaces emerge. Reflecting now, I recognize how deeply my time with Professor Sato and my fellow seminar students has influenced my fundamental way of thinking.

《Waver》は、揺らぎや境界の曖昧さをテーマにした染色作品です。染色という技法では、染料が水に溶け、布の上に滲み広がることで形が生まれます。その偶然の痕跡を布に記憶させ、何層にも重ねながら制作しました。本作では、染料によって生まれた偶然の形の上に、さらに顔料を用いて描写を加えています。描く際には、具象と抽象の間、現象と物質の間といった曖昧な領域を意識し、手の動きに委ねるように筆を進めました。外部の自然に触発されることで、自己の内面が自ずと動き出すような感覚の中で生まれた作品です。

Waver is a dyed work based on the theme of fluctuation and the ambiguity of boundaries. In the dyeing technique, dye dissolves in water and spreads over the cloth, creating shapes. The artist allowed the cloth to memorize these accidental traces and layered them on top of each other to create this work. In this piece, pigments are used to further depict the accidental shapes created by the dye. When painting, he was conscious of the ambiguous area between figuration and abstraction, between phenomenon and matter, and let his brush move as if he were letting his hand do the work subconsciously. Inspired by nature, this work was born from a sense that my inner self is moving of its own accord.



美術家。1991年神奈川県生まれ、京都府在住。アジアを中心とした国内外で、自然環境と染織技術にまつわるフィールドリサーチと滞在制作を行い、土着性や記憶の在り処を主題とした作品を制作している。

Artist, born 1991 in Kanagawa Prefecture, currently resides in Kyoto Prefecture. He conducts field research and residency programs in Japan and abroad, mainly in Asia, on the natural environment and dyeing techniques, and creates works on the theme of indigeneity and the place of memory.

CNY ¥ 990

—
インスタレーション
金箔貼り
Installation
Gold leaf gilding



制作の過程で困難に直面し、後退しそうになるたびに、先生が何気なくおっしゃった「怖いということが何なのか分からない」という言葉を思い出す。先生は常に創作への情熱を持ち続け、挑戦を恐れない姿勢は、私に限界を設けず創作し続ける大切さを教えてくれた。この特別な展覧会で、初めて制作する非映像作品を発表し、自分の成長の瞬間を刻みたい。

Throughout the creation process, whenever I faced challenges and felt tempted to retreat, I recalled Professor Sato's offhand remark, "I don't know what fear is." His unwavering passion for creation and fearless approach to challenges taught me the importance of continuing to create without self-imposed limits. In this special exhibition, I wish to present my first non-video work and capture this moment of my growth.



この作品は「無用の物」を素材として用い、金箔を貼り付けることで「価値」について問いかける。稀な使用から特別な感情的価値が付与されたこの靴は、金箔によって本来の機能を失い、無価値と無用の間に存在する「宝物」と化した。金箔の質感は、人間の永遠への憧れと時間への無力感、さらに物に付与する生命的価値の滑稽さを示唆している。今この作品を見ているあなたは、「価値のある」人生を歩んでいるのでしょうか？それとも、自らの生活に「金箔を貼っている」のでしょうか？

This work uses a “useless object” as its medium and covers it with gold leaf to question the idea of “value.” This shoe, cherished and rarely worn and thus imbued with a unique emotional significance, loses its original function beneath the gold leaf, transforming it into a “treasure” that lies somewhere between worthless and priceless. The luxurious texture of the gold leaf suggests humanity’s longing for eternity and our powerlessness against time, while also hinting at the absurdity of endowing objects with a kind of life value. As you view this work, are you living a “valuable” life, or are you simply “gilding” your life with gold leaf?



アートスペース ARTiX³創設者、北京城市大学文化遺産学部教員。2013年に日本に留学し、2016年に武蔵野美術大学映像学科で修士号を取得、2020年に東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻で博士号を取得。現在は北京と東京を拠点に活動を行っている。

Founder of the art space ARTiX³ and faculty member at the Department of Cultural Heritage, Beijing City University. She studied in Japan starting in 2013, received a Master’s degree in Visual Arts from Musashino Art University in 2016, and obtained a Ph.D. in Advanced Artistic Expression from Tokyo University of the Arts in 2020. She is currently based in both Beijing and Tokyo, where she continues her work.

Saba Bagheri

The things I touch are made of stone

2019年から2020年まで交換留学生として在籍 From Iran

シングルチャンネルビデオ、22分18秒

Single-channel video, 22:18 min



2019年、私はバウハウス大学ワイマール校と東京藝術大学の交換留学プログラムの一環として、佐藤研究室に参加しました。滞在期間は短く、新型コロナウイルスの影響でさらに短縮されてしまいました。それでも私にとってかけがえのない経験となり、アーティストとしてのコミュニティや師弟関係の在り方について理解を深めることができました。

佐藤先生は、学術的な枠を超えて、多くのアーティストのキャリアを支える基盤を築き、技術的な指導だけでなく、その後も続く帰属意識を育んでくれました。

遠く離れた地からではありますが、佐藤先生の退任記念展に参加できることを光栄に思います。佐藤研究室に初めて参加した日から、私はその温かさと寛容さに深く感動しました。そして数年が経った今でも、そのつながりは変わらず、私たちは佐藤先生の業績を共に祝います。

この展覧会では、日本滞在中に着手しながらも、未完成だった作品を発表します。佐藤先生の「時間」に対するアプローチは、常に私に影響を与えてきました。先生の作品は、詩的な感性で儚い瞬間を捉え、記憶や歴史の断片的な性質を再考させてくれます。

4年ぶりにこの映像作品の素材に向き合うことで、かつて親しんでいたものの、今では遠くなった過去との対話へと変化していきます。それは、時間を進化し続ける存在として捉える佐藤先生の作品と共鳴するものです。私の作品が、時間が物語の形成に果たす役割についての研究室で続く対話に貢献し、本展覧会の展望や個人史・集団史の変容するあり方と響き合うことを願っています。

I joined Sato Lab in 2019 as part of my exchange year between Bauhaus University Weimar and Geidai. Though my time there was brief—shortened further by the onset of COVID—it was an invaluable experience that shaped my understanding of artistic community and mentorship. Beyond the academic setting, Professor Sato provided a foundation for many artists throughout their careers, offering not just technical guidance but a sense of belonging that extends far beyond the classroom.

I am honored to be part of his retirement exhibition, even from afar. From my first day at Sato Lab, I was deeply moved by its warmth and generosity, and years later, that same sense of connection remains as we celebrate Professor Sato's career.

For this exhibition, I am sharing a piece that began during my time in Japan but remained unfinished—until now. Professor Sato's approach to time has always influenced me. His work captures fleeting moments with poetic sensibility, inspiring me to rethink the fragmented nature of memory and history.

Revisiting the material for this video work after four years has transformed mere documentation into an ongoing conversation with an estranged past, mirroring the way Professor Sato's own work engages with time as an evolving presence. I hope my work contributes to the ongoing dialogue within the lab about time's role in shaping narratives, resonating with the exhibition's vision and the fluid nature of personal and collective histories.

日本で過ごした一年は、私の中で大きな節目となり、時間の感覚を「それ以前」と「それ以後」に分けるものとなりました。孤独と移行の中で作られた、この期間の重要性を実感しながら、2020年の夏、日本を離れる直前に、私は日々の生活の大部分を撮影し始めました。当時、何が生まれるかわからないまま「時間」そのものを記録しようと決め、何週間にもわたって静かな日常のリズムを捉えました。

振り返ると、私の動機は終わりゆく時間、つまり後に私の記憶を形作ることになる「出発の瞬間」にあったのだと気付きました。この映像の物語をどのように構築すべきか、私は長年試行

錯誤してきました。特に、この作品をパンデミックに限定したものにはしたくありませんでした。「Intersecting Time」というテーマが、この素材を新たな視点で捉え直す機会となり、時間がどのように認識を変化させ、記憶が現実を再構築するのかを考える枠組みが生まれました。

佐藤先生の作品では「自己」の存在が排除されていますが、私の作品ではその存在が避けられません。私は、まるで部屋に閉じ込められたように、今や遠くに感じられる過去の生活を彷徨いながら、もはや手の届かない時間と場所に固定されたものとして感じられます。

しかし、先生のピンホール写真を思い返すと、

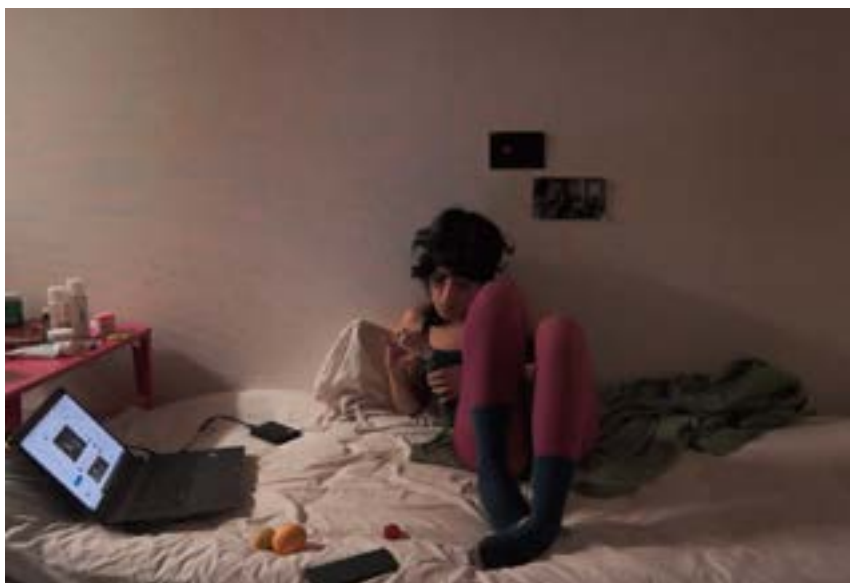
思いがけない共通点が見えてきます。時間とは、固定されたものではなく、進化し続ける層のような存在なのです。先生の長時間露光の作品が「光と不在」を通して空間を捉えるように、私の作品もまた「すでに過ぎ去ったはずの時間の痕跡」として、今や媒介された現実としてのみ存在する空間を捉えています。先生の作品は光を通して過去の痕跡を残し、私の作品は映像を通してそれを残します。どちらの作品も、同じ問いを投げかけているのです。「時間が過ぎ去ったあと、何が残るのか？」



The year I spent in Japan has become a defining marker of my personal history, dividing my sense of time into before and after. Realizing the significance of this period—shaped by both isolation and transition—I began filming large parts of my daily life in the summer of 2020, just before leaving Japan. Unsure of the outcome, I set out to document time, capturing the quiet rhythm of my days for weeks.

Looking back, I realize my motivation was the time that was coming to an end—the moment of departure that would later frame my memories. Over the past few years, I struggled to find a fitting narrative for this footage, especially since I didn't want it to be solely about the pandemic. *Intersecting Time* allowed me to revisit this material, reflecting on how time alters perception and how memory reshapes reality.

In contrast to Professor Sato's work, where the self is absent, my presence is inescapable. I am trapped in a room, moving through a past life that now feels distant, fixed in a time and place no longer within reach. Yet, reflecting on his pinhole photography, I find a parallel: time is not fixed but an evolving experience. Just as his long exposures capture space through light and absence, my work captures a geography that now exists only as mediated reality—an imprint of a time that has passed yet lingers. His work leaves traces of the past through light; mine, through moving images. Both ask: *what remains when time has passed?*



1990年、イラン・テヘラン生まれ。
2022年、バウハウス大学ワイマール校にて美術学士号を取得。
現在、ベルリンを拠点に活動する学際的アーティスト。

Born in 1990 in Tehran, Iran.
Graduated in Fine Arts from Bauhaus University Weimar in 2022.
Based in Berlin as an interdisciplinary artist.

王憶冰

Wang Yibing

2022年博士課程修了

橋 「胡蝶の夢」シリーズより
Bridges from “The Butterfly Dream” series

写真
UV プリント / 大理石

Photography
UV Print / Marble



2006年、私が大学2年生の頃、中国においてインターネットを通じて初めて佐藤先生の作品に触れた。《光・呼吸》が持つ静謐さと生命力に強く惹かれたが、この作品を本当に理解し始めたと感じたのは、それから10年後、佐藤先生の研究室に所属し、和歌山県の串本での夏合宿において撮影の過程を目の当たりにしたときであった。

岩礁の上では、波が次々と岩に打ち寄せていた。佐藤先生は片手で岩を掴み、バランスを保ちながら、もう一方の手に持つ鏡を用いて光を反射させていた。その手の中の光は、まるでひと塊の光を捧げるかのようであった。その光景は決して静寂ではなく、むしろ緊張感と躍動感に満ちたものであった。身体は波に揺さぶられながらも、手にした鏡はぶれることなく、光をカメラのレンズへと反射し続けていた。この長時間露光の作品において、佐藤先生の姿は画面に記録されていないが、撮影時のその姿勢はひとつの象徴となり、以降のすべての作品において、さらに私たち学生との関係性の中にも繰り返し現れることとなった。

佐藤先生の作品は、不可視のものを可視化し、時間、空間、身体、そして行為の痕跡や記憶を同時に表現するものである。研究室には、国籍や背景の異なる学生が集い、異なる価値観が交差し、融合し、ときに衝突しながら、大きなエネルギーを生み出す「同時的な視界」の環境が形成されている。そのような環境の中で、私は次第に、これまで見ていなかったものを認識するようになった。視点を常に変化させながら、佐藤先生がアーティストであり、教育者でもあるという姿勢から、光を掲げながら、自らの立場を貫くことの重要性を学んだ。そして、それは「不易流行」すなわち、普遍的なものを重んじながらも時代の流れに応じて新たなものを取り入れるという精神へとつながっている。

In 2006, when I was a second-year university student, I first encountered Professor Sato's works online in China. I was drawn to the calmness and vitality of *Photo-Respiration*, but it wasn't until ten years later—after joining Professor Sato's lab and witnessing his filming process during a working camp in Kushimoto—that I felt I truly began to understand the work.

On the rocky shore, waves crashed against the rocks one after another. Professor Sato gripped the rocks with one hand to maintain his balance while holding a mirror in the other to reflect light. The light in his hand seemed almost like a tangible mass being offered. This scene was far from quiet; it was filled with intensity and tension. His body swayed as he battled the waves, yet the mirror in his hand remained stable, continuously reflecting light onto the camera lens. In this long-exposure work, Professor Sato's figure was not recorded, but his posture during the shoot became a symbol—one that reappeared in all subsequent works and in our relationship with him as students.

Professor Sato's works visualize the invisible, simultaneously expressing time, space, the body, and the traces and memories of actions. In the lab, students from diverse nationalities and backgrounds gather, creating an environment of “simultaneous vision,” where different values intersect, merge, and sometimes clash, generating great energy. In this environment, I have gradually begun to see things I could not perceive before. By maintaining a constantly shifting perspective, I have learned from Professor Sato's approach—both as an artist and an educator—the importance of upholding my stance while holding up the light, embracing the principle of Fukei Ryuko (timeless tradition and modern trends).



「胡蝶の夢」シリーズ展示風景(2022)
Exhibition View of "The Butterfly Dream" Series (2022)

中国貴州省生まれ。2022年に東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻で博士号を取得。変容し続ける写真イメージと物質的メディアとの関係を探求し、身体的感覚に根ざした物質的な想像をテーマに、作品を制作している。東京藝術大学による「多様な人々が共生できる社会」を支える人材育成プロジェクト「Diversity on the Arts Project」第3期生。2022年より山形県酒田市に移住し、土門拳写真美術館で学芸員として勤務している。

Born in China, Wang Yibing holds a Ph.D. in Intermedia Art from the Tokyo University of the Arts (2022). She currently works as a curator at the Domon Ken Photography Museum. Her work explores the evolving relationship between photographic images and material media, with a particular focus on material imagination rooted in bodily sensations. She is also a third-term participant in the "Diversity on the Arts Project" at the Tokyo University of the Arts, an initiative designed to cultivate human resources to foster a society where diverse individuals can coexist.

この作品は「胡蝶の夢」シリーズ(2022)の一部である。中国の哲学者・莊子は、かつて自らが蝶に変わる夢を見た。目覚めた後、自分が夢の中で蝶になったのか、それとも今この瞬間、蝶が自分になる夢を見ているのか分からなくなったという。この物語を通じて、莊子は一つの哲学的パラドックスを示し、人は現実と幻想を明確に区別することはできないと説いた。

本シリーズでは、その混沌と融合の状態を描き出そうとするものである。エラーを含むデジタル写真イメージを、大理石、蠟、花びらといった物質的な素材に定着させている。自動画像処理によって生じたエラーは、現実認識に対する懐疑を表し、一方で、触れることのできる素材の使用は、それ自体が内包する未知の現実へと私たちを近づけ、身体感覚を通じた「物質的想像力」を喚起することを目指している。

不確定性や流動性、湿度を感じさせる感覚は、意図的ではなく自然に、私の作品の中に繰り返し現れる。イメージと物質が相互に浸透することで、作品はあえて決定的な状態を持たず、現代のリアリティに対する問いを投げかける。デジタル時代に突入した私たちは、果たして現実と幻想を明確に区別できているのだろうか。さらに、現実の自我と幻想の自我を識別することはできるのだろうか。急速な変化の中で立ち止まり、これらの問いを再考することは可能なのか。この作品は、そうした問いかけであり、ささやかな抵抗でもある。

This work belongs to *The Butterfly Dream series* (2022). The Chinese philosopher Zhuangzi once dreamed that he had transformed into a butterfly. Upon waking, he was unsure whether he had dreamed of becoming a butterfly or if the butterfly was now dreaming of becoming him. Through this story, Zhuangzi illustrates a philosophical paradox, arguing that one cannot definitively distinguish reality from illusion.

The Butterfly Dream series seeks to depict this ambiguous state where reality and fantasy are difficult to differentiate. The work consists of digital photographic images containing errors, which are affixed onto material substances such as marble, wax, and flower petals. The errors generated by automated image processing express skepticism toward the perception of reality, while the use of tangible materials seeks to bring us closer to the hidden realities within them by fostering a "material imagination" that engages our physical senses.

Themes such as indeterminacy, fluidity, and a sense of humidity appear repeatedly in my works—not by intention, but naturally. By allowing the image to remain in an indeterminate state through the mutual permeation of image and material, the work raises questions about contemporary realities. As we enter the digital age, are we truly capable of distinguishing between reality and the virtual? Can we differentiate between our real self and our virtual self? Amidst rapid change, can we pause and reexamine these questions? This work serves as both an inquiry and a modest form of resistance.

藤本涼

Ryo Fujimoto

2010年修士課程修了

sun (dive/rise)

写真

アーカイバルピグメントプリント

Photography

Archival Pigment Print



大判カメラ、ピンホールカメラ、カメラオプスクラ、長時間露光など……原初的なカメラ(=暗い部屋)の構造をあらわにしたような佐藤先生の作品や授業は、学部入学当初の私が抱いていた小さすぎた写真の概念を拡張してくれた。

とても大雑把な解釈をしてしまえば、何を撮るか？というよりは、どのように撮るか？(捉えるか？)という考え方であり、私はこれに共鳴し、基本的にはこの考え方でこれまで制作してきたつもりだ。

この展覧会のコンセプトとして提示されている「展示会場全体を風景(街)として捉える」ことからの想起も手伝って、その風景(街)の中に水辺/水たまりがあってもいいのではないかと、また佐藤先生の《光・呼吸》の手鏡の作品に微かにでも呼応できるのではないかと、との考えから、数年前から撮り続けていたこの作品を選んだ。

Professor Sato's works and classes, which seem to reveal the structure of primitive cameras (such as large format cameras, pinhole cameras, camera obscuras, long time exposures, and the usage of dark room, etc.), expanded my concept of photography, which was too small for me upon my entry into undergraduate school.

Broadly speaking, his lessons emphasized the various techniques and nuances of capturing a picture rather than focusing solely on the subject.

I resonated with this idea, and have basically been working with this concept in my work. I was inspired by the exhibition's concept of "capturing the entire exhibition site as a landscape (city)," and I wondered if it would be possible to have a waterfront/puddle in this landscape, and if it might serve as a faint echo of Professor Sato's *Photo-Respiration* hand mirror work. Thus, I chose this piece which I have been photographing for several years.



眼球でその対象を直接見るのではなく、写真にうつす、模写する、モニターにうつる、鏡にうつる、ヴェールがかかる、遮る、遠くから見る、など何らかの介在があることで欠落していく視覚的情報。(対象物そのものではない、代替としての)像を見るときに脳内で起きている、欠落していった視覚的情報を補完すること。

これらについて夏至前後の時期、正午前後という時間帯の、地上から見て最も高い位置に上がり、そして同時に水中に深く潜っていく、あらゆるものの光源である“太陽”と、それをうつしだす“水鏡”という最も原始的な二つの装置を用いて可視化したかった。

今回の展示では、佐藤先生の《光・呼吸》の手鏡の作品への呼応として、太陽光の水面の反射による小さな光の円が特徴的に現れているイメージを中心に選んだ。また、その無数の光の円に呼応させるように写真のフレーム自体も円形にトリミングし、大きさを強弱をつけて光の円が広がっていくように設置した。

Visual information that is missing due to some kind of intervention—such as a photograph, a reproduction, a monitor, a mirror, a veil, an obstruction, or viewing from a distance—rather than looking directly at the object with our eyes. This lack of direct visual information leads the brain to fill in the gaps when looking at the image (not the object itself, but rather an alternative).

I aimed to visualise them using two somewhat fundamental devices: the sun, which is the source of light for everything, and a water mirror, which reflects the sun's light. Both the sun and its reflection rise to their highest position from the ground and simultaneously dive deep into the water around noon, near the time of the summer solstice.

In this exhibition, as a response to Professor Sato's *Photo-Respiration* hand mirror work, I chose mainly images in which small round shaped lights from the reflection of sunlight on the surface of the water appear characteristically. The photo frames themselves were trimmed to round shapes in response to the countless round shaped light, arranged in such a way that allows the lights to spread out in various sizes and intensities.

1984年東京生まれ。
眼前に立ち現れる光景を“触れられなかったイメージ”にとらえ、それらのイメージへの触れ方、距離の測り方を写真を用いて展開する。
ryofujimoto.net

Born 1984, Tokyo.
Ryo considers the scenes that appear in front of him as “images that could not be touched,” and uses photography to develop ways of touching and measuring the distance to these images.
ryofujimoto.net

藪乃理子

Noriko Yabu

2007年修士課程修了

① 風葬

FUSOU

② 華葬

KASOU

③ 水葬

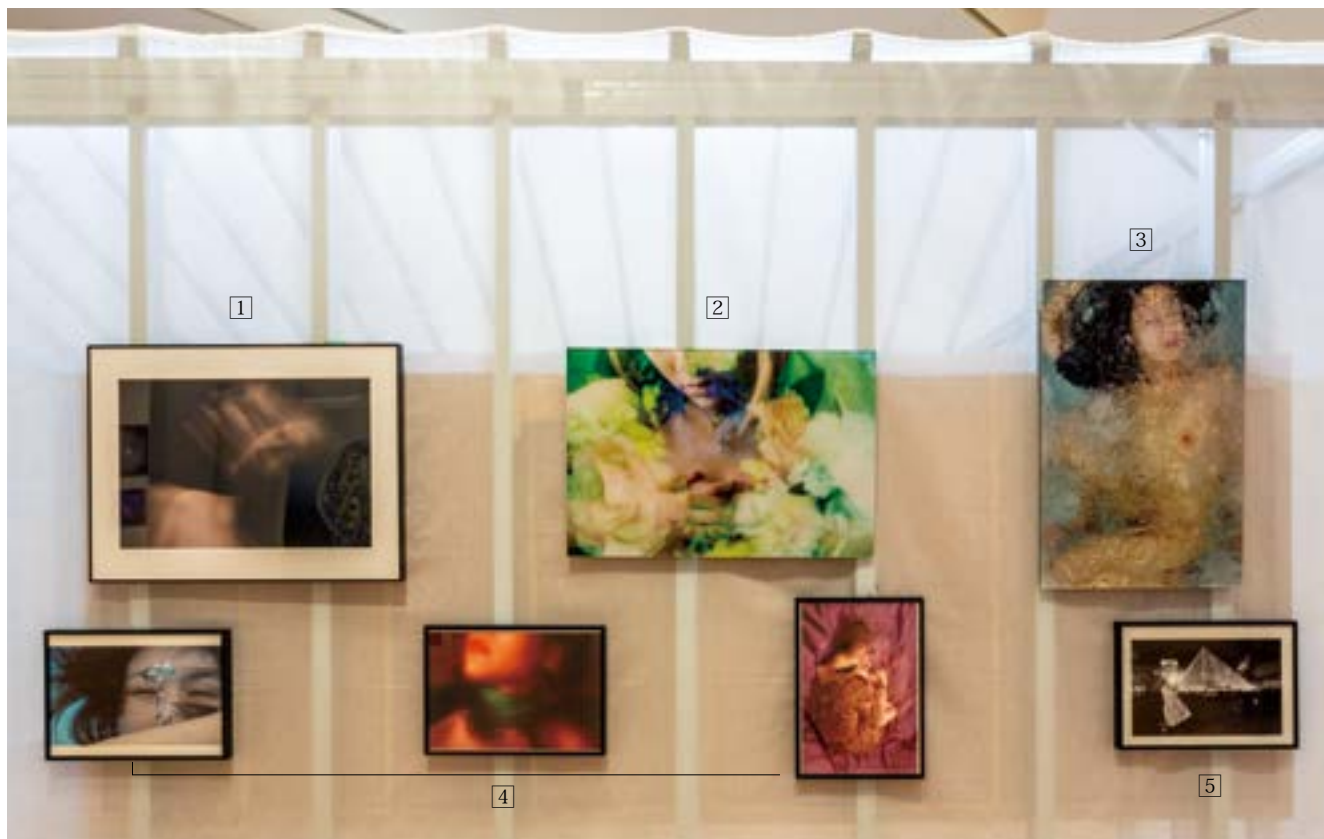
SUISOU

④ untitled

untitled

⑤ yabux

yabux



いつだって写真を撮るのは楽しく苦しい。

早稲田大学の学生だった時、私が写真にのめり込むには絶好の環境だった。

大学では、写真評論家の平木収氏が写真史や写真論の講義を行っていた。そしてアルバイトは富士フイルム。富士フイルムではどんどん写真を撮るのが私の仕事だった。朝起きてから夜寝るまで写真漬けの毎日。息をするように何も考えることなく撮影をしていた。楽しい、楽しい、楽しい。

そんな時、平木先生から佐藤先生のことを教えてもらった。東京藝大の先端芸術表現科という学部には佐藤先生という良き教育者がいるのだから進学を考えてみないか。

行きたい、ずっと写真を撮っていたい。そんな安易な考えで佐藤先生の研究室に入ることを夢見た。

無事入学をし、授業が始まってすぐ挫折を味わった。私には基礎がなかったのだ。早稲田大学では文学部に所属し、美術芸術の基礎を学んでこなかった。授業が全く理解できない。その上、佐藤先生はNYに行ってしまう。夢見てたのと違う！と。

また、何も考えもせず写真撮影を楽しんでいた生活から一転、表現とは何か、作品として他者に伝えるためにはどうしたらいいか。写真と向き合うことになった。写真と向き合うことは自分とも向き合うことになった。苦しい、苦しい、苦しい。

全く写真が撮れなくなってしまった。絶望している私を責めることもなく佐藤先生は道を示し続けてくださった。もう撮るしかない。たくさん撮影をして、なぜそれを撮影したのか向き合い続けた。そんな中、水の中に自分自身を沈み込ませたセルフポートレート《水葬》のアイデアと出会った。佐藤先生に早速見せた。「これはいけるぞ、やっと見つけたね」っておっしゃってくれた。嬉しかった。藪をも掴む思いでがむしゃらに撮影した。楽しい、楽しい、楽しい。

私は今でも作品制作をさせてもらっている。あの時の先生の温かさが今でも私の支えだ。私は今後も写真を続けるだろう。平木収氏と佐藤時啓氏という偉大な先輩方に支えられていることに感謝し、誇りにこれからも私の写真人生を生きる。

Taking photographs has always been both joyful and painful.

When I was a student at Waseda University, I was in the perfect environment to immerse myself in photography. At the university, photography critic Osamu Hiraki gave lectures on photographic history and theory. Meanwhile, my part-time job was at Fujifilm, where my task was simply to take as many photographs as possible. From the moment I woke up to the moment I went to sleep, my days were filled with photography. I took pictures as naturally as breathing, without thinking. It was fun, fun, fun.

During that time, Professor Hiraki told me about Professor Tokihiro Sato. He was a great educator at the Department of Intermedia Art at Tokyo University of the Arts, and Professor Hiraki suggested that I consider further studies there. I wanted to go. I wanted to keep taking photographs forever. With such a simple-minded desire, I dreamed of joining Professor

Sato's laboratory.

I was fortunate to be accepted, but soon after classes started, I faced immediate setbacks. I lacked the fundamental knowledge. At Waseda University, I had been in the Faculty of Literature and had never studied the foundations of art or fine arts. I couldn't understand the classes at all. On top of that, Professor Sato left for New York soon after. This wasn't what I had imagined!

Suddenly, my life, which had been filled with the pure joy of taking photos without a second thought, changed completely. Now, I had to confront the questions: *What is expression?* How can I communicate my work to others as an artwork? Facing photography meant facing myself. It was painful, painful, painful.

I became unable to take photos at all. But Professor Sato never blamed me for my despair; instead, he continued to show me the way. There was

水葬

SUISOU

—

写真

ライトジェットプリント
アクリル加工 480×720mm
Photo
02: Lightjet print, acrylic finish,
480×720mm



今回私が展示した作品は合計 7 枚だった。全体写真右上から《水葬》《華葬》《風葬》、右下から《yabux》《untitled》の 3 点だ。

上段の 3 点は「3 部作」となっている。《水葬》は生命の誕生を、《華葬》は生命の繋がりを、《風葬》は死をイメージしたものだ。

右下の《yabux》は2024年に発表したばかりの新作で世界中を駆け回って撮影したというコンセプトである。

《untitled》の 3 点はこれから作品に発展していくだろうという、いわば実験途中の作品である。

私の作品の特徴としては作品全て「セルフポートレート」であるということだ。

The exhibition consists of a total of seven works. From the top right in the overall view, the pieces are *SUISOU*, *KASOU*, and *FUSOU*. From the bottom right, the works include *yabux* and three pieces titled *untitled*.

The three works on the top row form a trilogy: *SUISOU* represents the birth of life, *KASOU* symbolizes the connection of life, and *FUSOU* embodies death.

The work *yabux*, located at the bottom right, is a newly released piece from 2024. Its concept is based on capturing scenes from around the world.

The three *untitled* pieces are still in the experimental stage, works in progress that may develop further into complete pieces in the future.

A defining characteristic of my work is that all of the pieces are *self-portraits*.



nothing left to do but take pictures. I took countless photographs and kept questioning why I was capturing them. In the midst of this struggle, I conceived the idea for *Suisou*, a self-portrait in which I submerged myself in water. I immediately showed it to Professor Sato. He said, "This is it. You've finally found it." I was overjoyed. Clinging to this fragile hope, I threw myself into photographing with everything I had. It was fun, fun, fun.

Even now, I continue creating works. The warmth of my teacher's guidance remains my support. I know I will continue with photography for the rest of my life. With gratitude and pride for being supported by such great mentors—Osamu Hiraki and Tokihiro Sato—I will keep living my life through photography.

yabux

yabux

—

写真

インクジェットプリント 額装 297×420mm
Photo
Inkjet print, framed, 297×420mm

1981年 香川県生まれ、香川県在住。早稲田大学在学中に平木収氏の薫陶を受け、写真を撮り始める。2004年 東川国際フォトフェスティバルにボランティアスタッフとして参加、アーティストとして作品を創り続けることを決意し、翌年に東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻に入学・佐藤時啓氏の研究室に入る。近年は拠点を生まれ故郷の香川県に移し、グループ展に参加したり個展を開催するなど積極的に活動している。

Born in 1981 in Kagawa Prefecture, Japan, and currently residing there. While studying at Waseda University, they were influenced by Osamu Hiraki and began taking photographs. In 2004, they participated as a volunteer staff member at the Higashikawa International Photo Festival, which led them to commit to pursuing a career as an artist. The following year, they enrolled in the Graduate School of Fine Arts at Tokyo University of the Arts, specializing in Intermedia Art, and joined the laboratory of Tokihiro Sato. In recent years, they have relocated their base to their hometown in Kagawa Prefecture and have been actively participating in group exhibitions and holding solo exhibitions.

朴ミナ PARK MINA

2018年修士課程修了

—

花園の海

Sea of Garden

—

中判デジタルカメラ

インクジェットプリント

Medium Format Digital Camera

Inkjet print



佐藤研にいたとき死に関する意識と無意識の流れを研究し続けていました。その時からずっと続けて作った写真です。作品のために霧がよくかかる夏の夜明けにだけ撮影をしました。濃い霧と静かな静寂はまるで私が立っているところのすべての時間的流れを停止させたような感じを与えました。

While I was in the Sato Lab, I continued to research the flow of consciousness and unconsciousness regarding death. This is a series of photographs I have been creating since that time. I only took these photos during summer dawns when the fog was particularly thick. The dense fog and quiet stillness gave me the feeling that all temporal flow in the place where I was standing had come to a halt.



霧、青い光、死、意識と無意識は、それぞれ象徴的かつ心理的な意味を持ち、人間存在の感情や深みを探求する重要な要素です。霧は現実と非現実、生と死の曖昧な境界を表現し、その中で時間や空間が停滞するような印象を与えます。青い光やフィルターは孤独や喪失、死の冷たく静かな感情を強調し、観る者に強い感情的インパクトを与えます。死は霧や青い光を通じて、抽象的かつ神秘的に描かれ、意識と無意識の間で葛藤や混乱を引き起こします。意識は現実的な自己認識を、無意識は深層的な感情や真実を反映します。これらの要素は互いに交差しながら、死を単なる終わりではなく、深い探求と理解の過程として表現します。視覚的要素と心理的テーマが融合し、独自の物語を生み出しています。

Fog, blue light, death, consciousness, and the unconscious each carry symbolic and psychological meanings, serving as important elements in exploring the emotions and depths of human existence. Fog represents the ambiguous boundary between reality and unreality, life and death, creating an impression where time and space seem to stagnate. Blue light or filters emphasize feelings of loneliness, loss, and the cold, quiet emotions of death, delivering a strong emotional impact to the viewer. Death, through the fog and blue light, is depicted in an abstract and mysterious manner, triggering conflict and confusion between consciousness and the unconscious. Consciousness reflects the realistic self-awareness, while the unconscious mirrors deep emotions and truths. These elements intersect with each other, portraying death not merely as an end, but as a process of deep exploration and understanding. The fusion of visual elements and psychological themes creates a unique narrative.

1989年韓国 大邱生まれ
2018年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了
佐藤研究室在籍期間 2016～2018

主な活動歴

- 2020.06 “芸術家隔離日誌”、麓湖A4美術館、四川省成都
(Chengdu, China “Artist Isolation Log”, Luhu A4 Art Museum)
- 2018.02 “写真都市”展 21_21design sight(Tokyo Japan, 21_21design sight)
2015.6.23 清里フォトアートミュージアム
(Japan, Kiyosato Museum of Photographic group exhibition)
- 2014.9.18 清里フォトアートミュージアム “In the dead” “White out” のシリーズ、8点所蔵
(Japan, Kiyosato Museum of Photographic arts work director of 8 points)
- 2014.4 COEX Seoul Photo Fair group exhibition (Seoul, Korea)
- 2014.3 A-one gallery group exhibition (Seoul, Korea)

Born in 1989, Daegu, South Korea
Graduated from the Graduate School of Fine Arts, Tokyo University of the Arts, Major in Advanced Artistic Expression in 2018

Main Exhibitions:

June 2020: “Artist Isolation Log,” Luhu A4 Art Museum, Chengdu, China
February 2018: “Photo City” Exhibition, 21_21 Design Sight, Tokyo, Japan
June 23, 2015: Group Exhibition at Kiyosato Museum of Photographic Arts, Japan
September 18, 2014: “In the Dead” and “White Out” series, 8 works in the collection at Kiyosato Museum of Photographic Arts, Japan
April 2014: Group Exhibition at COEX Seoul Photo Fair, Seoul, Korea
March 2014: Group Exhibition at A-one Gallery, Seoul, Korea

伯耆田卓助

Takusuke Hokida

2008年卒業

NOWERE

—
半立体
紙、その他
Mixed media
Paper.etc



写真を志した10代、いろいろな事を試した20代。佐藤研という場所からは多大なる影響を受けてきました。それは、美術、写真に留まるなんて生温いものではなく、人そのものを根本から変えてしまうようなパワーのある集まりでした。おかげで、何もわからず、何もできなかった自分が、多少は自分の人生を切り拓いていけてます。

もうだいぶ大人になりましたが、まだまだ過去をふり返って感傷する歳ではありません。今という忙しさがそうさせるのかもしれませんが。

ただ、冬の夕焼けの日や、長距離運転中の夜中の高速道路など、1人になった時に頭を過ぎるのは、あの眩しくも遠い遠い佐藤研の思い出の日々なのです。

In my teens, I aspired to be a photographer, and in my twenties I tried all sorts of things. Sato Lab has had a huge influence on me. It wasn't just about art and photography, it was a powerful gathering that could fundamentally change a person. Thanks to it, I, who once knew nothing and could do nothing, have been able to carve out a path for myself in life. I'm much more grown up now, but I'm not yet at an age where I can look back on the past and feel sentimental. Maybe it's because of how busy I am now.

However, when I'm alone, like on a winter sunset or on a long-distance drive on the highway at night, the memories of those dazzling but far-away days at Sato Lab come to mind.



とある場所のとある建物。どこかの歴史ある建物にこのひび割れは実在します。劣化による壁の剥落は、実に雄弁に、かつとても詩的に歴史を語ります。残るもの。失われていくもの。それぞれの時間が調和しているような美しさを何とか再現できないものか。

また自室の壁でそれを感じる事ができないか。これはそういった試みであります。

A certain building in a certain place. This crack actually exists in some historic building. The peeling off of walls due to deterioration tells the story of history in a truly eloquent and poetic way. What remains. Things that are being lost. Is it possible to somehow recreate the beauty of each time being in harmony?

Can't you feel it on the walls of your room? This is such an attempt.



1984年 千葉県生まれ
2008年 東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業

佐藤研在籍期間 2005～2008在籍

主な活動

グループ展

2011 「さよなら九段下ビル」(東京)

2015 「土祭2015」元平野スタンド(栃木)

主な職歴

2008～フリーカメラマン

2010～建材デザイナー

2018～トレーラーハウスビルダー

2023～大清建設興業株式会社にてレジャー開発担当

1984 Born in Chiba, Japan

2008 Graduated from Inter Media Art Course, Fine Arts Department, Tokyo National University of Fine Arts and Music(B.A.)

Main activities

Group exhibition

2011 "Goodbye Kudanshita Building" (Tokyo)

2015 "Tsuchi Matsuri 2015" Former Hirano Stand (Tochigi)

Main work history

2008-Freelance photographer

2010-materials designer

2018-Trailer house builder

2023-Leisure development manager at Daisei Construction Co., Ltd.



2019年9月から2020年8月まで、東京藝術大学の交換留学に参加し、佐藤先生の研究室の学生たちと出会う機会に恵まれました。この一年は特別なものであり、その途中で新型コロナウイルスのパンデミックが始まりました。研究発表やグループ展、定期的なミーティングを通じて、他の学生とともに作品を発表する機会を得ました。この経験によって、ヨーロッパで培ってきた既存の芸術的枠組みから解放されました。

この交換留学を通じて、自分の制作を異なる文脈で捉え、より素材に親密に向き合うことを学びました。作品発表やグループ展、そして「共有」や「食」をテーマにしたイベントを通じて、新しい表現方法に挑戦し、絵画などこれまで試したことなかったメディアを探索するきっかけになりました。芸術的な探求だけでなく、研究室の社会的な側面も大きな役割を果たしました。例えば、共同で料理をするワークショップは、単なる食事の場ではなく、共に考え、新しい調理・共有のあり方を模索する場でもありました。

佐藤先生の写真に対するアプローチは、私にとって大きな影響を与えました。彼の作品は、空間に余白を残しながらも、それを繊細かつ知的に満たす独特な方法を持っています。その表現は、パフォーマンスティブでありながら静けさも内包しており、私自身の写真との向き合い方を改めて考えさせられました。

振り返ると、佐藤研究室の一員として学ぶことができたことを心から感謝しています。この経験は私にとって非常に刺激的であり、成長の機会となりました。そして、この展覧会に参加できることを大変光栄に思います。

From September 2019 to August 2020, I participated in a school exchange at Tokyo Geidai, where I had the opportunity to meet all the students in Professor Sato's laboratory. It was a unique year, marked by the onset of the Covid-19 pandemic halfway through. Through meetings, work presentations, and collective exhibitions, we had the chance to showcase our work alongside that of other students. This experience freed me from the artistic frameworks I was familiar with in Europe.

During this exchange year, I learned to consider my production in a different context by developing a more intimate approach to the materials I worked with. Work presentations, group exhibitions, and events centered on sharing and food taught me to unlock other mediums, such as painting. Beyond artistic exploration, the social aspect of the laboratory played a crucial role. Collective cooking workshops, for instance, became spaces of both conviviality and reflection, where we explored new ways of preparing and sharing food.

Professor Sato's approach to photography had a profound impact on me. His way of allowing space to exist within an image while subtly inhabiting it is something that has stayed with me. His perspective—both performative and serene—made me rethink my own relationship with images.

Looking back, I feel truly grateful to have been part of this laboratory. It was a formative and inspiring time, and I am honored to be part of this exhibition.



私は「集団的記憶」という概念に強く惹かれます。作品は、多様な解釈の入り口となり、鑑賞者にとって個人的な記憶を振り返る機会となる一方で、作家の思考や視点を垣間見る手がかりにもなります。私たちは超接続社会の中で常に無数のイメージに囲まれ、時にはその洪水の中に埋もれてしまいます。しかし、そんな無数のイメージの中にも、特に意図せず撮影したものであっても、記憶に刻まれ、時を経て鮮明に蘇るものがあります。

このガラスのカプセルには、私が過去にスマートフォンで何気なく撮影し、後年になって思いがけず記憶に残っていたイメージを選び、収めました。これらは特定の目的も意図もなく撮った写真ですが、時間とともに「成長」し、まるで一つの生態系のように、記憶の中で独自のつながりを生み出していきます。それは、形、物体、光の記憶の集合体であり、過去の瞬間を呼び覚ますものです。

カプセル自体の形は電球に似ており、思考や衝動によって「点灯」する記憶の象徴ともいえます。内部の木は、記憶がどのように成長し、機能するかを表しており、枝や葉が繋がり合う様子は、まるで神経ネットワークのようです。植物とイメージが混ざり合うこの作品は、現代社会における無限に増え続けるイメージと、それらが時間とともにゆっくりと劣化・変容していく矛盾したプロセスを対比させています。

作品のタイトルは《1000 Lucioles/1000匹のホタル》であり、ホタルという光る小さな存在に由来しています。ホタルの光が点滅しながら消えたり現れたりするように、私たちの記憶の中のイメージもまた、突然浮かび上がり、消え、またふとした瞬間に蘇るものです。この現象は、私たちの個人的な記憶だけでなく、集団的な記憶の形成にもつながっていきます。

The concept of collective memory fascinates me, as an artwork can serve as a gateway to multiple interpretations—offering viewers the chance to reflect on something personal while also providing a glimpse into the artist's mind. In our hyper-connected societies, we are constantly surrounded by images, often to the point of being lost in them. Yet, some of these images—sometimes entirely random—become imprinted in our memory.

This glass capsule contains a selection of images of things I unexpectedly remembered years later when looking back at pictures I had

taken with my phone. These were photographs taken without a specific intention or purpose. However, over time, they have aged and now form a kind of ecosystem—an active memory of shapes, objects, and lights that evoke past moments.

The shape of the capsule itself resembles a light bulb—serving as both a catalyst and a symbol of memory, activated by thoughts or impulses. The tree inside represents the way memory grows and functions, branching out like a network, with its leaves interconnected just like a neuronal system. The combination

of vegetation and images creates a contrast, symbolizing the overwhelming flood of images we produce today versus their slow process of aging and transformation over time.

The title of the work *refers to fireflies*—tiny luminous beings that, much like these remembered images, flicker in and out of perception. They appear, disappear, and resurface unpredictably, mirroring the way certain memories suddenly emerge from the depths of our minds, shaping our personal and collective narratives.

2014-2016 : ENSAAMA 空間デザイン BTS 課程 修了(フランス)
2016-2021 : パリ美術学校 美術学士号 取得(フランス)
2019-2020 : 東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻 交換留学

2014-2016 : BTS Design d'Espace, ENSAAMA, France
2016-2021 : DNSAP Beaux-Arts de Paris, France
2019-2020 : M1 Intermedia Arts, Tokyo Geidai

元木みゆき

Miyuki Motoki

2009年修士課程修了

リアルの迂回路

Detour of the Real

写真

写真、アクリル

Photo

Photo, Acrylic



今回の作品は、佐藤先生の代表作《光・呼吸》シリーズに触発されたものです。

《光・呼吸》シリーズは、ペンライトや鏡の反射光の軌跡を長時間露光で撮影したものです。佐藤先生が本シリーズを始めた頃(70年代後半から80年代)はまだ、決定的瞬間や瞬間性を重視したスナップ写真が写真表現の主流でした。《光・呼吸》シリーズはそうした瞬間性の特権化に抗い、写真を歴史的に回顧することで、もう一度、写真の原理を問うものでした。

写真の歴史を振り返れば、初期写真は光を定着させるために一定の露光時間を必要とするものでした。ダゲールによるかの有名なテンプル通りの写真には、一人を除いてまったく人の姿はありません。つまりここには時間の経過(あるいは痕跡)を示す潜在的な像が消えていることになります。シャッターや感光剤の技術的進歩がこうした写真の歴史性を見えなくしてしまいました。

《光・呼吸》シリーズは、技術の進歩が消去してしまった、あるいは見えなくしてしまった写真の光学的原理(光の痕跡としての写真)をもう一度問うことで、写真の美学的可能性(新たな知覚経験)を切り拓いたものだと思います。

The current work is inspired by Professor Sato's representative series, "*Photo-Respiration*." The "*Photo-Respiration*" series captures the trajectories of light from penlights and mirror reflections through long exposure photography. When Professor Sato began this series in the late 1970s to 1980s, snapshot photography, which emphasized decisive moments and immediacy, was the mainstream form of photographic expression.

The "*Photo-Respiration*" series challenged the privileging of such immediacy by historically reflecting on photography and questioning the principles of photography once again.



今回の私の作品《リアルの迂回路》は、実際の花の像(実像)と鏡の像(虚像)を何枚も絡み合わせて撮影し、光の恣意的・偶然的な配列を構成したものです。ここでは、実像と虚像の区別はなく、等価な像、つまり「光画(光の痕跡)」として現れています。

佐藤先生の《光・呼吸》シリーズが光の時間性からのアプローチだとすれば、私は光の空間性から「光の痕跡」を前景化してみたいと思いました。デジタル写真の登場から現在の生成AI画像に至るまで、写真画像の変化には著しいものがあります。今、佐藤先生が試みてきたように、写真を歴史的に回顧することで、写真の光学的原理を問うことは、現在の写真画像を反省的に捉える意味でも、必要なことではないかと思われます。

This work is inspired by Professor Sato's *"Photo-Respiration"* series. Sato's work captures the trails of penlights and reflected light through long exposure, challenging the mainstream focus on the instantaneous in snapshot photography.

Looking back at the history of photography, early photographs required long exposure times to capture traces of light, yet technological advancements have since obscured this historical aspect.

"Photo-Respiration" series re-examines these now-lost optical principles, generating a new perceptual experience. My work, *Detour of the Real*, layers real and reflected images to spatially construct traces of light. While Professor Sato emphasizes the temporality of light, I aim to focus on its spatiality, emphasizing the need for a reflective examination of photography.



坂田栄一郎の助手を経て、フリーカメラマンとして独立。現在、武蔵野美術大学映像学科の非常勤講師を務める。ひとつば展グランプリ、ニコン三木淳奨励賞、さがみはら写真新人賞、キャノン写真新世紀優秀賞などを受賞。

After working as an assistant to Eiichiro Sakata, became a freelance photographer. Currently teaches part-time at the Musashino Art University Department of Film and Media. Awards received include the Hitotsubo Exhibition Grand Prix, Nikon's Jun Miki Encouragement Award, Sagami-hara Newcomer's Award, and Canon's New Century Photography Award.

呉在雄

O Jaewoong

2022年博士課程修了

昼と夜：東京

Day and Night : Tokyo

写真

印画紙

Photography

Inkjet Print



光と時間を用いた佐藤先生の作品は、これらの要素を超現実的で視覚的に魅惑的なシーンに変換し、日常の瞬間に隠された次元を明らかにしています。彼のアプローチは、私自身の写真媒体内の光、時間、空間の探求に大きなインスピレーションを与え、その表現の可能性を拡張しながらその独特の性質を尊重しました。

佐藤先生の研究室に参加したことで、光と時間が視覚的にどのように相互作用をするのか理解を深める機会が得られました。先生と一緒に制作することで、これらの要素間の微妙な関係を明らかにする画像を作成し、静的なフレーム内でより豊かな視覚体験と時間と光に関する新鮮な視点を観る者に提供するという目標が明確になりました。

さらに、多様なメディアを専門とする学生と共有した研究室の環境により、写真の可能性に対する私の視点が広がりました。彼らの取り組みにより、写真は単なる記録手段以上のものであると理解することができました。写真は、他の芸術形式とシームレスに統合できる強力なストーリーテリングの手段です。この理解により、光と時間の相互作用を通じて複雑な物語を展開できるアクティブなメディアとしての写真に対する私の展望が再定義されました。

全体として、佐藤先生の研究室での経験により、私のアプローチが再形成され、写真を使用して階層化されたストーリーを作成し、観る者の光と時間への関与を深めることができました。ここで得た洞察は、これらのテーマの継続的な探求の強固な基盤を形成しています。

Professor Sato's work with light and time transforms these elements into surreal, visually captivating scenes that reveal hidden dimensions in everyday moments. His approach has greatly inspired my own exploration of light, time, and space within the photographic medium, respecting its unique qualities while pushing its expressive potential.

Joining Professor Sato's lab gave me the chance to deepen my understanding of how light and time interact visually. Through working alongside him, I clarified my goal of creating images that reveal the nuanced relationships between these elements, aiming to offer viewers a richer visual experience and a fresh perspective on time and light within a static frame.

Additionally, the lab environment, shared with students specializing in various media, broadened my perspective on photography's possibilities. Their approaches helped me see photography as more than just a documentation tool; it's a powerful means for storytelling that can seamlessly integrate with other art forms. This understanding has redefined my vision of photography as an active medium capable of unfolding complex narratives through the interactions of light and time.

Overall, my experience in Professor Sato's lab has reshaped my approach, enabling me to use photography to craft layered stories and deepen the viewer's engagement with light and time. The insights I gained here form a strong foundation for my ongoing exploration of these themes.



2016年から2017年まで交換留学生として在籍 From Germany (Lena Skrabs)

張り子、ワイヤー、木、リモコンカー

Papier-mâché, wire, wood, remote-controlled cars

《Moving Stones》は、展示空間を自由に移動する二つのモバイル・スカルプチャーで構成され、来場者や周囲の作品と静かに対話を繰り返す。物理的かつ隠喩的な風景の基盤となるこれらの彫刻は、時間と空間の境界線に沿って移動し、偶然の出会いを呼び起こす。それは、まるで佐藤研究室とそのアーティスト、そして本展覧会の来場者と巡り合った偶然のように。本作は、展示空間に予期せぬ驚きと緊張感をもたらし、静的であるべき展覧会の風景にダイナミックなレイヤーを加えている。佐藤先生の光の軌跡のように、《Moving Stones》もまた、風景や人間の関わりが常に変化し続けることを体現しているのだ。彫刻に動きを取り入れることで、鑑賞者はリアルタイムで変化する空間と関わり、時間を伴う鑑賞体験へと誘われる。

本作は、佐藤先生の遊び心あふれる実験的なアプローチに着想を得ており、佐藤研究室が育んできた探求の精神へのオマージュでもある。創作過程においては、ユーモアや驚き、好奇心が重要な要素となり、型にはまらない思考を促した。私たちが「動く石の彫刻」を制作することを決めたのも、この精神に基づいている。日常的な物体に動きを与えることで、それらをインタラクティブな要素へと変容し、鑑賞者の知覚に問いを投げかけ、新たな驚きを生み出すことを目指した。

佐藤研究室は、単なる芸術実験の場にとどまらず、「遊び」と「発見」、そして「生涯にわたる友情」によって築かれたコミュニティでもあった。佐藤先生は、子どものような純粋な好奇心と尽きることのない探求心を持ち、「人生そのものが芸術である」という思想を体現していた。私たちの作品に宿る驚きや遊びの要素は、まさに彼の芸術哲学を映し出している。日常世界の見方を変える彼の力は、今も私たちの創作活動に大きな影響を与え続けている。本作を通じて、その伝統を受け継ぎ、既存概念に挑戦しながら、鑑賞者に「見慣れたものを新たな視点で見る」体験を提供したいと考えている。

Moving Stones consists of two mobile sculptures that navigate the exhibition space, engaging in a silent dialogue with visitors and surrounding artworks. As physical and metaphorical foundations of a landscape, they move along the lines of time and space, evoking chance encounters—much like our serendipitous connection with the Sato Laboratory, its artists, and now, the exhibition's visitors. The sculptures introduce a sense of anticipation and surprise, adding a dynamic layer to the exhibition's otherwise static landscape. Like Professor Sato's light trails, which evoke ethereal beauty and temporality, they embody the ever-changing nature of both landscapes and human interaction. By incorporating movement, the work creates a time-based experience, drawing viewers into a real-time engagement with the evolving space.

Inspired by Professor Sato's playful and experimental approach, this work pays homage to the spirit of exploration fostered at Sato Laboratory. Humour, surprise, and curiosity were integral to the creative process, encouraging unconventional thinking. Our decision to create moving stone sculptures reflects this ethos, transforming ordinary objects into interactive elements that challenge perception and spark wonder.

Sato Laboratory was more than a place for artistic experimentation, it was a community built on play, discovery, and lifelong friendships. Professor Sato inspired us with his childlike wonder and boundless curiosity, embodying the idea of life as art. The surprise and playfulness in our work aims to capture his artistic philosophy. His ability to shift how we perceive the everyday world continues to inspire our practice. With these sculptures, we aim to carry forward that tradition, challenging conventions and inviting viewers to see the familiar through fresh eyes.



g.a.d.o. は、「偉大なアーティストなのにまあまあなことをしている」デュオであり、パロマ・サンチェス＝パレンシアとレナ・スクラブスによって構成される。二人はドイツ・ワイマールのバウハウス大学にて「パブリックアート＆新しい芸術戦略」の修士課程を修了し、2016年より共同制作を行う。

彼女たちの関心は、日常生活の持つパフォーマンス的な側面、平凡なものを持つ祝祭的な可能性、そして「平凡さ」の実践的探求にある。仕事と非仕事の境界は、彼女たちのリサーチと制作における中心的なテーマである。作品には、小さなものから大きなものまで、多様なジェスチャーが含まれ、怠惰、退屈、喜び、祝祭、そしてしばしば何らかの「がっかり感」が織り交ぜられている。

2022年より、彼女たちは「Crespo Foundation」主催のアーティスト・イン・レジデンス・プログラム「The Flying Artist's Room」に参加しており、ドイツ・フランクフルト近郊の学校で「公式トラブルメーカー」として卓越した活躍を見せている。

g.a.d.o. is a duo of great artists doing okay: Paloma Sanchez-Palencia and Lena Skrabs. The two artists studied the Master program *Public Art and New Artistic Strategies* at Bauhaus University in Weimar, Germany, and have been collaborating since 2016. They are interested in the performative aspect of everyday life, in the celebratory possibilities of the ordinary and the practical exploration of mediocrity. Work and non-work are the main topics of their research and practice. Their work includes small and big gestures, idleness, boredom, joy, celebrations and often some kind of disappointment.

Since 2022 they have been part of the artist-in-residence program *The Flying Artist's Room* by Crespo Foundation, where they excel in their role as the official troublemakers of a school near Frankfurt, Germany.

下西進

Susumu Shimonishi

2015年博士課程修了

I'm on the Earth

映像作品(各60分)
デジタルビデオ

Movie
Video image



I'm on the Earth / Bangkok, 2015

私は武蔵野美術大学に入学した1995年、「Photography and Beyond in Japan」展(日本、北米各地を巡回)の英語版図録の表紙を見て初めて佐藤先生作品を知り、その後、新正卓先生のゼミに入り写真専攻の道に進んだ。この頃より私が始めた、都市の街中にカメラを据える、長時間同じ場に立ち続ける、撮影者がパフォーマンス的である、という手法は佐藤先生の作品の明らかな影響である。(※ムサビの新正先生は、佐藤先生の酒田東高校の21年先輩。)

2001年夏、東川写真祭で初めて佐藤先生にお会いし、寝袋一つで旅をしていた私は、佐藤研の一期生とひとときを過ごし、『Wandering Camera』の中に泊めて頂いた。

2009年に私は藝大の学生として佐藤研に入り、作品制作を根底から考える経験の数々をした。仲間と協働して小麦粉を捏ねて麺を作り、鮫を捌いて取手の郷土料理を作り、多くの工作機器に触れ、土木作業も経験した。家族を大切に、来客を歓迎する態度や、助成金獲得術も先生の後ろ姿を見て学んだ。私は14年間先生とアトリエをシェアし、2017年には先生や学生たちとイタリアで滞在制作も行った。これまで佐藤研の仲間と交わした盃の量はどれほどになったか計り知れない。

気付けば、私は佐藤先生の影響により確実に人生の骨格を作り、佐藤研は世界との対話術を研究する非常に重要な場になったと考えている。

When I entered Musashino Art University in 1995, I first became acquainted with Professor Sato's work when I saw the cover of the English-language catalog for the "Photography and Beyond in Japan" exhibition (which traveled throughout Japan and North America), and later when I joined Professor Taku Aramasa's seminar and began my career as a photography major. It was around this time that I began to use the technique of setting up my camera in the streets of cities, standing in the same place for some hours, and having the photographer be performative, all of which were clearly, albeit indirectly influenced by Professor Sato's work, as Professor Aramasa is 21 years senior of Professor Sato at Sakata Higashi High School.

In the summer of 2001, I met Professor Sato for the first time at the Higashikawa Photo Festival. Travelling with only a sleeping bag, I spent a moment with the first batch of students at the Sato Lab and was invited to stay in the *Wandering Camera*.

In 2009, I joined the Sato Lab as a student at Geidai, where I had many great experiences that made me think about artworks from the ground up. I collaborated with my fellow students kneading flour, processing catfish and cooking Toride's local cuisine, and more. I learned the importance of spending time with our family and guests, and how to obtain grants by shadowing him. I shared a studio with him for 14 years, and in 2017 I joined the A.I.R. program in Italy with him and his students. I can't even begin to count the amount of beer we drank with the members of the Sato Lab.

I realize that the influence of Professor Sato has definitely shaped the foundation of my life, and that the Sato Lab has become a very important place for me to study the way of communication with the world.



6mを超える自作の一脚に、4×5インチの大判カメラを取り付け、N.Y、ロンドン、イスタンブール、ホーチミンなど、世界のさまざまな都市で自分自身をモノクロ写真で俯瞰撮影した《I'm on the Earth》シリーズは、佐藤先生に初めてお会いした頃に開始している。《Wandering Camera》に実際に触れ、撮影機材そのものを制作するスタイルに自然と影響を与えられた。

今回発表のものは、同シリーズをビデオカメラを使用して撮影したものである。都市の中心に約1時間私が立ち、私の周辺を行き交う人々を撮影している。記録された映像を通じ、都市では様々な音や多様な言語が聞こえてくることに気が付く。また、公共空間である道は、単に人が通行する場というだけでなく、人々が物を売り買いする市場の役割を果たし、公私が混ざり合う空間として、コミュニティが生まれる場となっていることにも改めて気が付くだろう。

This is *I'm on the Earth* series, in which I mounted a 4x5-inch large-format camera on a top of self-made monopod measuring over 6 meters and took black-and-white overhead photographs of myself in various cities around the world, including New York, London, Istanbul, and Ho Chi Minh City.

I started this series around the time I first met Professor Sato. I was exposed to his *Wandering Camera Project* and was naturally influenced by the style of creating the photographic equipment itself.

The works I presented here were shot using the same series with video cameras. I was standing in the center of the city for about an hour, filming people passing by me. Through the recorded images, we notice that we can hear various sounds and diverse languages in the city. We also notice once again that the streets, which are public spaces, are not only places for people to pass through, but also serve as markets where people buy and sell goods, and where communities are born as spaces where public and private life mingle.

1977年広島出身

武蔵野美術大学大学院、東京藝術大学大学院博士課程修了。

吉野石膏美術振興財団等の助成でドイツに滞在。

台湾台南市、韓国光州市、イタリアモデナ市等のA.I.R.に参加。

都市を舞台に、写真、映像作品を制作。

I'm on the Earth / Ho Chi Minh City, 2015

I'm on the Earth / Paris, 2012

参考資料(*I'm on the Earth* 展示風景、上野駅構内、2015)

Reference (*I'm on the Earth* / exhibition view, Ueno Station, 2015)

Born in Hiroshima in 1977

Completed graduate studies at Musashino Art University, doctoral program at Tokyo University of the Arts

Stayed in Germany after working as an overseas training program of Yoshino Gypsum Art Foundation, etc.

Participated as A.I.R. in Tainan (Taiwan), Gwangju (Korea), Modena (Italy), etc.

Produced photographic and video works in various cities.

紀雪晗

Ji Xuehan

2024年博士課程在籍中

OVERTURE

—
写真・音声
インクジェットプリント
Photography・Sound
Inkjet print



茨城県取手市、利根川土手、虫の音

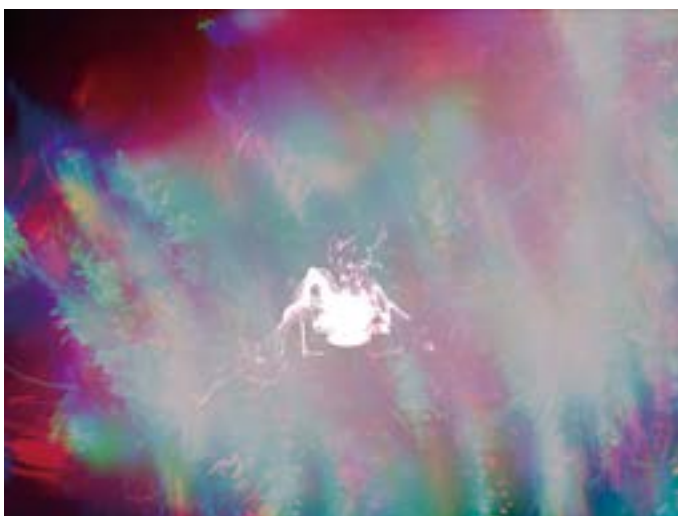
Toride City, Ibaraki; Tone River Embankment; Sound of Insects

写真を学び始めた際、佐藤先生の《光・呼吸》と出会い、深い印象を受けた。その後、写真の学びが進むにつれ、先生の作品が数時間にわたる長時間露光の中で、身体の動きによって画面上に光の痕跡を描き出すことを知った。この制作手法への理解は、私の写真表現に対する考え方に大きな影響を及ぼした。

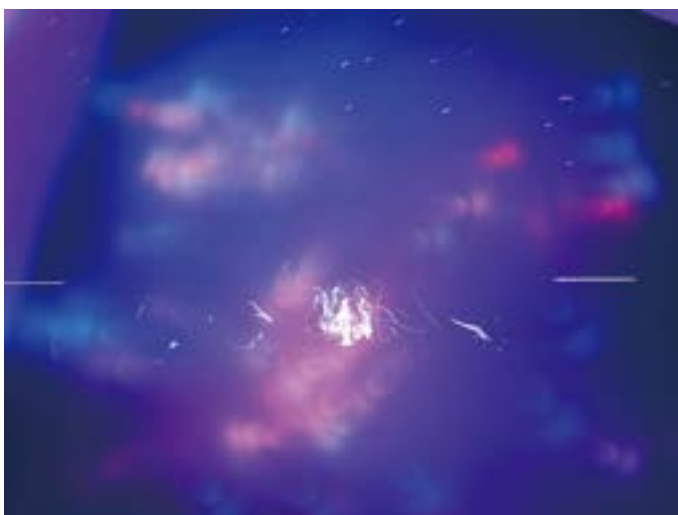
When I first started learning photography, I encountered Professor Sato's work *Photo-Respiration*, which left a deep impression on me. As my studies progressed, I learned that his pieces were created through long exposures lasting several hours, capturing the traces of light on the canvas through bodily movements. This understanding of his creative technique significantly influenced my perspective on photographic expression.



茨城県高萩市、森の中、溪の音
Takahagi City, Ibaraki; Inside a Forest; Sound of a Stream



栃木県那須郡、那須高原、泉の音
Nasu Highlands, Nasu, Tochigi; Sound of a Spring



千葉県夷隅郡、小波月海岸、海の音
Kohaduki Beach, Isumi, Chiba; Sound of the Sea

本作品は佐藤先生の影響を受け、行動を通じて制作したものである。具体的には、スネアドラムの表面にカラーフィルムを置き、発光するスティックで叩いて感光させ、音と力を可視化する。同時に、モノクロフィルムを使用したカメラで長時間露光を行い、演奏を記録する。また、録音を通して撮影場所の音も取り込み、写真の中に隠れた時間の流れを表現した。三つの要素は、それぞれ主観、客観、そして夢の次元を象徴しており、これらを重ね合わせることで一枚の作品が完成する。私はこの制作プロセスを通して、修行過程における即興の結果を写真で残したいと考えている。

This work was created under the influence of Professor Sato, using physical actions as the medium of expression. Specifically, I placed colour film on the surface of a snare drum and struck it with luminous sticks to expose the film, thus visualizing sound and force. Simultaneously, I used a camera loaded with black-and-white film to capture the performance through long exposure. Additionally, I recorded the ambient sounds of the shooting location to incorporate the flow of hidden time into the photograph. The three elements-colour film, black-and-white film, and recorded sound symbolize subjectivity, objectivity, and the dimension of dreams, respectively. Their overlapping creates a single unified piece. Through this creative process, I aim to capture the improvisational results of my ongoing journey in photographic form.

1995年、中国北京市に生まれる。2017年に中国北京工業大学人文社会科学学部広告学専攻を卒業後、渡日。2021年に東京工芸大学大学院芸術学研究科メディアアート専攻写真メディア領域修士課程を修了。その後、東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻博士課程に進学し、佐藤時啓研究室に在籍中。作品制作では主に写真メディアを用い、同世代の若者が直面する社会問題やメンタルヘルスに関心を寄せている。また、小学生時代から西洋打楽器を学び始め、現在は柏市交響楽団に所属している。

Born in Beijing, China, in 1995. After graduating in 2017 from the Department of Humanities and Social Sciences, majoring in Advertising, at Beijing University of Technology, moved to Japan. In 2021, completed a Master's program in the Photography Media field of the Media Art Department at Tokyo Polytechnic University's Graduate School of Arts. Subsequently, enrolled in the Doctoral Program of Advanced Art Expression at Tokyo University of the Arts and is currently a member of the Sato Tokihiro Laboratory. Their work primarily utilizes photographic media, focusing on social issues and mental health concerns faced by their generation. Additionally, they began learning Western percussion instruments in elementary school and are now a member of the Kashiwa Symphony Orchestra.

福島周平

Shuhei Fukushima

2023年修士課程修了

Wraps

彫刻

養生シート、フローレスレジン、ガラスマットなど

Sculpture

Protection sheet, flawless resin, glass mat, etc.



僕は佐藤先生と同じく「彫刻」という分野をバックグラウンドにもっています。佐藤先生の代表作である《光-呼吸》シリーズは世界に向かう作家のからだの動きそのものを光に還元した、先生の「彫刻」という分野に対する本人だけのリアリティをもった回答のように僕には思えてしまいます。

僕の作品はブルーシートや養生シートを樹脂で固定して内部が空洞でも自立するようにしたものなのですが、作家のからだの動きに注目するとただそれらを任意の物体に巻くというだれにでもできる作業のみで彫刻作品の肝となる造形部分自体は完結します。この制作過程も僕の「彫刻」というジャンルに対するある種の回答といえるような気がしますし、それが佐藤先生の作品と並ぶことをとても嬉しく思います。

Similar to Professor Sato, I have a background in the field of “sculpture.” His representative work, the *Photo-Respiration series*, seems to me to be a unique response to the field of sculpture, where the movements of the artist's body are transformed into light, reflecting his own reality in this discipline.

My work involves using blue tarps and protective sheets fixed with resin, allowing them to stand independently even when hollow inside. However, when focusing on the movements of the artist's body, the essence of the sculpture is completed simply by wrapping these materials around any arbitrary object, a task that anyone can perform. I feel that this production process can also be seen as a kind of response to my own understanding of the genre of “sculpture,” and I am very pleased that it can stand alongside Professor Sato's works.



路上やガレージ、建築現場などで見かける、ブルーやシルバーのシートに包まれた物体たち。あるときその中身が空っぽだったらと想像したことがあった。

生活にありふれた外見のこの彫刻作品は、外側のビニールシートが掛脂で固定され内部が空洞となっており、穴を覗くことでそれを確かめることができる。

日常を生きるためにあまりにも単純になった私たちがふと現実の混沌に立ち会うとき、ありきたりだった風景はどのように姿を変えるだろうか。

Objects wrapped in blue or silver sheets can be seen on streets, in garages, and at construction sites. One day, I imagined what it would be like if these objects were empty.

This sculpture, with its commonplace appearance, is hollow inside, with the outer plastic sheet secured with grease, observable by peering through the holes.

How will the ordinary landscape change its form when we, who have become too simple to live our daily lives, suddenly encounter the chaos of reality?



大阪府出身

2021年 京都市立芸術大学 彫刻専攻卒業

2023年 東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了

日常にありふれた物体や風景から広がっていく混沌とその先に見出せる他者との関係性をテーマに、彫刻を中心に作品制作を続けている。

2021 Graduated from Kyoto City University of Arts, majoring in sculpture

2023 MFA in Intermedia Art, Tokyo University of the Arts

I continue to create works, mainly sculptures, based on the theme of the chaos that spreads from ordinary objects and landscapes in daily life and the relationship with others that can be found beyond that chaos.

水除琉聖

Ryusei Mizuyoke

2024年修士課程修了

1月8日

January 8

絵画、写真

紙に鉛筆、インクジェットプリント

Drawing, Photograph

Pencil on paper, Ink-jet print



研究室に在籍した2年間で、年齢も国籍も異なる様々なアーティストの表現に触れることができました。非常に有意義な時間だったと感じていると同時に、全ての出会いに感謝しています。私は大学院に進学する前の学部生の頃は、4年間秋田県に在住していました。冬に雪が積もり、行動が制限されることで自宅での時間を最大限に活用できる制作を行ってきました。それが写真の細密模写であり、写真と絵画を組み合わせる表現なのですが、モチーフに関してはこの2年間でたくさん変化してきました。住む場所や人間関係、経済状況によって浮かぶアイデアも設定するモチーフも変わっていくと思うので、日々のアウトプットを大切に、これからも多くの作品を制作していきます。

During the two years I spent at the Laboratory, I had the opportunity to engage with the works of various artists from different ages and nationalities. I feel this was an extremely meaningful time, and I am grateful for every encounter. Before I entered graduate school, I lived in Akita Prefecture for four years as an undergraduate. In winter, when the snow would accumulate and limit mobility, I focused on making the most of my time at home by working on detailed photographic reproductions. This approach combined photography and painting. Over the course of these two years, the motifs I chose have evolved significantly. I believe that the ideas that arise and the motifs I select are continuously influenced by factors such as where I live, my relationships with others, and my economic situation. With this in mind, I will continue to cherish my daily output and strive to create many more works in the future.



この風景は2023年1月に青森県の八戸市美術館で開催された佐藤先生の個展《八戸マジックランタン》を訪れた際に、近くで撮影したものです。中央に見える飛行物体には私自身が乗っているという設定です。そして時間を遡り、写真を撮影している自分を上空から俯瞰して眺めています。飛行物体を鉛筆で細密に描く過程では、研究室に在籍していた当時の記憶を思い出しながら制作しました。

This landscape was taken nearby during a visit to Professor Sato's solo exhibition *Hachinohe Magic Lantern* at the Hachinohe Art Museum in Aomori Prefecture in January 2023. The setting is that I am aboard the flying object depicted in the middle. Then I travel back in time and look down at myself, taking the picture from high above. During the process of drawing the flying object in fine detail with a pencil, I recalled my memories of being a student in the laboratory.



神垣優香

Yuka Kamigaki

2023年修士課程修了

8×8カメラ

8×8 Camera

—

ミクストメディア

木材、写真、映像

Mixed

Wood, photo, video



人間の目やカメラなど装置的な目線から得られる新しいイメージの視覚体験にワクワクする好奇心が、おこがましくも佐藤先生と強く共感する部分です。

今回は取手校地にある、佐藤研究室の実験的展示スペース「8×8」をモチーフに制作しました。来場者の方が中にいるような見え方をすることで、作品展示をしているような、外から覗くような視覚体験が得られます。

奇しくも、展示場所の小屋に佐藤先生の作品があるように、内側に佐藤研究室の空間が入っている同じ構造となりました。学部から修士、休学中も含め約8年間過ごした時間や思い出を小さな箱にしようという気持ちで、鑑賞者の方と佐藤研究室の入り口をリンクさせたいと思います。

I have always been excited by the visual experiences that emerge from mechanical viewpoints, such as those of the human eye or a camera. This sense of curiosity is something I deeply relate to in Professor Sato's work.

For this piece, I took inspiration from "8×8," an experimental exhibition space in the Tokihiro Sato Laboratory at the Toride Campus. The work is designed to create the illusion that visitors are inside the space, allowing them to experience both the feeling of being exhibited and that of peering in from the outside.

By chance, just as Professor Sato's work is placed inside the exhibition hut, my piece also contains the inner space of the Sato Laboratory. Having spent around eight years at the laboratory—including my undergraduate and graduate studies as well as a period of leave—I wanted to encapsulate my time and memories in a small box, connecting the visitors to the entrance of the Sato Laboratory.



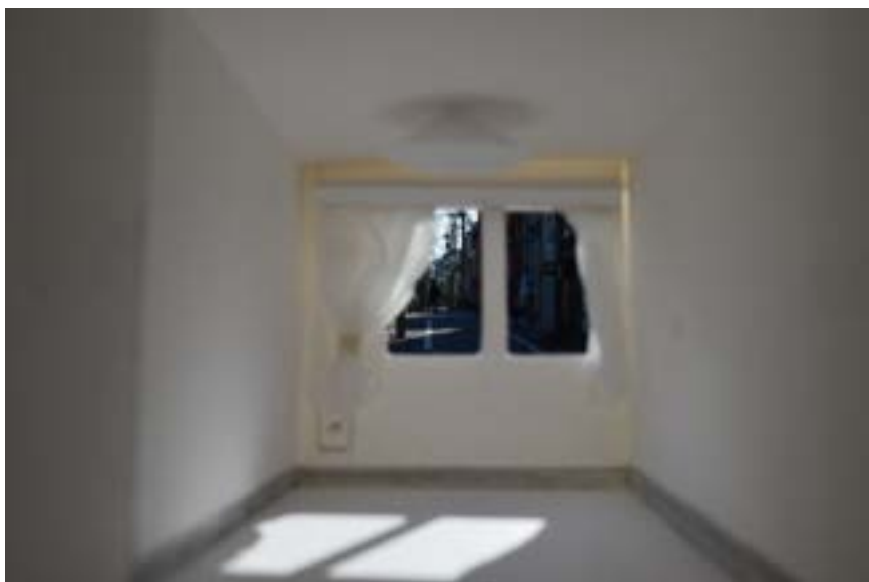
本作《8×8カメラ》は、2014年に制作した《窓カメラ》を基に発展させた作品です。

《窓カメラ》は、一眼レフカメラのレンズ部分に家の形をしたアタッチメントを取り付け、その状態で撮影を行う作品です。この装置を通して撮影された写真は、まるで家の中から外を覗いているかのような視点を生み出し、撮影者と空間との関係を再考するきっかけとなります。

また、スマートフォンにも装着できる小型版も制作しており、インカメラ（フロントカメラ）にも使用することができます。インカメラで撮影すると、自分があたかもデバイスの内部に存在するかのような位置関係が生まれますが、同時に窓の外にいる自分自身をも捉えることができます。これにより、本作は「内と外」の関係を可視化するとともに、視点の移動や自己と空間との境界について考察する契機を提供します。

8×8 Camera is an extension of my 2014 work, *Window Camera*. *Window Camera* is a photographic device that attaches a house-shaped structure to the lens of a DSLR camera, enabling images to be taken from a perspective that feels as if one is looking out from inside a physical space. This creates an altered way of perceiving the image, encouraging a re-examination of the relationship between the viewer and their surroundings.

I also developed a smaller version that can be attached to smartphones, including front-facing cameras. When used with a front camera, it creates the sensation of being inside the device, yet at the same time, allows one to observe oneself from the outside. This interplay of perspectives highlights the shifting boundaries between interior and exterior, offering a moment of reflection on the act of seeing and the relationship between self and space.



窓カメラ (2014)

Window Camera (2014)

1996年広島県生まれ。現在茨城県を拠点に活動。長野県小諸市でAIR「KoMoro-Mori-More」(2020-2024)を主宰し、地域とアートの関わりを探索している。

Born in 1996 in Hiroshima, Yuka Kamigaki is currently based in Ibaraki. She has directed the artist-in-residence program “*KoMoro-Mori-More*” (2020–2024) in Komoro, Nagano, exploring the relationship between art and the local community.

桐生眞輔

Shinsuke Kiryu

2014年博士課程修了

Diesel Vehicle

—
書

煤(ディーゼルエンジンからの採煙)、膠

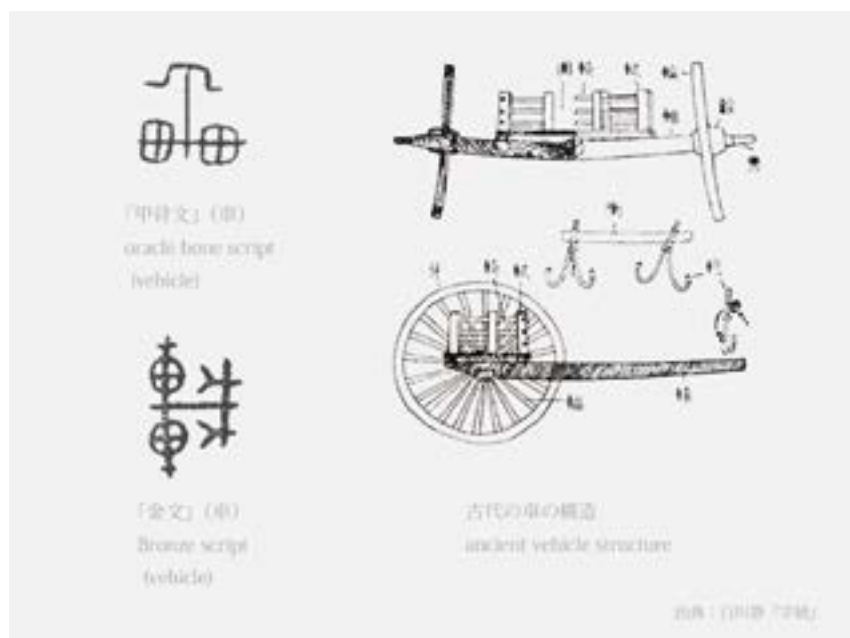
Calligraphy

Soot from diesel engine and glue



先端に入学して、ある先生が、悪気なくですが、私を「あ、お習字の人」と呼んだ際に、傍らにいた佐藤先生が「そんな言い方したら失礼だよ」と差し伸べてくれた言葉に、私はこの先生に指導してもらおうと決めたのでした。

When I entered university, a certain professor, without any malice, called me “*man of penmanship (a man who simply copies classical characters)*”. At that time, Professor Sato advised his colleague, “It would be rude to say that to him.” From that moment, I decided to seek Professor Sato’s guidance.



これはディーゼルエンジンに溜まった煤を採取し作成した墨を素材として、今から約3000年前の古代中国の象形文字で「車」と書いたものです。当時の「車」の文字は、馬車の姿を象ったものでした。

時は流れ、近代から現代にかけて産業や社会の構造は大きく変化し、エネルギー生産にも革命が生じることになります。車は火力を用いるものとなり、馬車から自動車へ替わるものとなりました。

エネルギーを生み出す力、そこでの副産物として生じた煤から、何が見えてくるでしょうか？

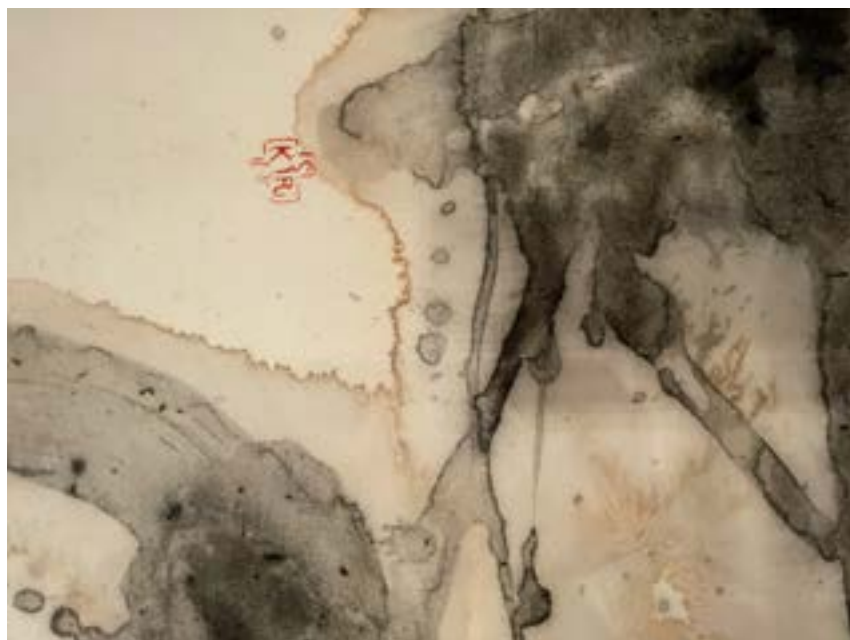
この作品を通して、今と昔、人間の歩んできた時間に目を向け、また、その恩恵や問題について考えるものになればと思います。

This is an ancient Chinese hieroglyph about 3,000 years ago that uses ink created by collecting soot accumulated in diesel engines to write the word "car".

At that time, the word "car" was in the shape of a horse-drawn carriage.

As time passes, the structure of industry and society has changed drastically from the modern era to the present day, and a revolution in energy production has also occurred. The vehicle became fire-powered. Horse-drawn carriages were transformed into automobiles.

From the power to produce energy, and the soot that is generated as a by-product of it, we can see the karmic cause of humanity.



採取した煤/collected soot

「書」と「美術」の領域横断的な表現について研究、実践している。人間が作り出す価値や意味を考え、聖穢、美醜の境界について問いかける「文身」のシリーズで博士修了。

I am practicing and researching the cross-disciplinary expression of calligraphy and art. My work makes people think about the values and meanings that society creates. It also appeals to the boundaries between holiness and impurity, beauty and ugliness. I completed my PhD in the "BunShin" (tattoo) series.

李承禧

Lee Seunghee

2015年修了

零れた言葉

Spilled words

—

セラミック

ブラックマウンテン、水金、金粉、漆

Ceramic

Black Mountain, Liquid Bright Gold,
Gold Powder, Urushi lacquer



零れた言葉_耳の痛い真実/Spilled words_Home truths

零れた言葉_社会的タブー/Spilled words_Social TABOO

零れた言葉_帰郷/Spilled words_Return home

佐藤先生とは、上野キャンパスで初めてお会いしました。不慣れな日本語でポートフォリオを説明することにとっても緊張していましたが、先生は温かく迎え入れ、親身に相談に応じてくださいました。

佐藤研究室では、セミナーに参加し、実験空間である「SPACE 8×8」で作品を展示しました。研究室のメンバーとともに展示作品について意見を交わし、講評を受けることで、自身の作品を多角的に捉え、新たな視点を得る貴重な経験となりました。

また、IAV Studio 101や佐藤研究室の合宿などを通じて、多くのサポートを受けながら、留学中の日本での生活に適應することができました。改めて、支えてくださった皆さまに心より感謝申し上げます。

I first met Professor Sato at the Ueno campus. Nervous about presenting my portfolio in imperfect Japanese, I struggled to articulate my thoughts. However, he welcomed me warmly and listened patiently.

At the Tokihiro Sato Laboratory, I participated in seminars and exhibited my work in the experimental space SPACE 8×8. Engaging in discussions and receiving critiques from laboratory members provided me with a valuable opportunity to see my work from multiple perspectives and gain new insights.

Additionally, through experiences such as IAV Studio 101 and laboratory retreats, I received tremendous support from my fellow members, which greatly helped me adjust to life in Japan during my studies. I am deeply grateful to everyone who supported me throughout this journey.



零れた言葉_社会的タブー/Social TABOO

零れた言葉_二つの記憶/Two memories

零れた言葉_サルバルサ/Syringe No. 606

注意深い識別:こぼれた言葉

私たちはもはや、現実そのものに関心を抱かなくなっている。記憶とは、「実在した」と信じる恣意的な要素と、その出来事が現実であったという確信によって成り立つ。しかし、それはすべての記憶が虚像に過ぎないことを意味するわけではない。むしろ、記憶に基づく虚像は、過去の真実と虚構の狭間に向き合うための試みである。

記憶に基づく虚像は、虚構と真実の双方を内包し、一つの出来事を新たな形へと再構築する。私たちが記憶を真実であると信じ、それを確信することは、個人の記憶が現実にとって代わることを意味している。記憶の再構築としての虚像は、現実との対立を超え、時に現実そのものを凌駕することさえある。

忘れ去られた出来事の証言は、個人の主観的な記憶によって形作られる。過去の出来事は、国家や社会の維持のために意図的に消された声をもとに再構築される。この試みは、現実の出来事と絡み合う多様な記憶の衝突、そしていかなる枠組みにも収まりきらない現象に向き合うものである。

最終的に、すべての記憶は再構築され、それが私たちの生きる現実を形作る。

Cautious Discernment: Spilled Words

We have lost interest in reality itself. Memory is shaped by arbitrary elements we believe to have “existed” and by the conviction that an event was real. Yet, this does not mean that all memories are mere illusions. Rather, the illusions constructed by memory serve as an attempt to navigate the space between past truth and fiction.

A memory-based illusion intertwines both fiction and truth, reshaping an event into an entirely new form. Our belief in a memory’s truth and our conviction of its authenticity merely signify that personal memory has replaced reality. As a reconstruction of memory, illusion goes beyond its competition with reality and, at times, even surpasses it.

The testimony of a forgotten event is shaped by personal, subjective memory. The past is reconstructed through voices that were deliberately erased to uphold national or societal structures. This process seeks to confront the collision of diverse memories entangled with real events and phenomena that defy any singular framework.

Ultimately, all memories are reconstructed, shaping the reality we live in.

2009年に佐藤時啓研究室に研究生として入学。その後、修士課程・博士課程を修了。2015年に韓国へ帰国し、大邱大学で講師および兼任教授として勤務。

現在は文化財団の芸術基金の支援を受けながら創作活動を続け、弘益大学および秋溪芸術大学で講師を務めている。

I joined the Tokihiro Sato Laboratory as a research student in 2009 and completed both my master’s and doctoral degrees. After graduating in 2015, I returned to Korea and worked as a lecturer and adjunct professor at Daegu University.

Currently, I am engaged in artistic activities with the support of an arts fund provided by a cultural foundation, while also teaching as a lecturer at Hongik University and Chugye University for the Arts.

浩琦

Hao Qi

2023年修士課程修了

肉体の告白

Confession of the Body

写真

写真プリント、ライトボックス

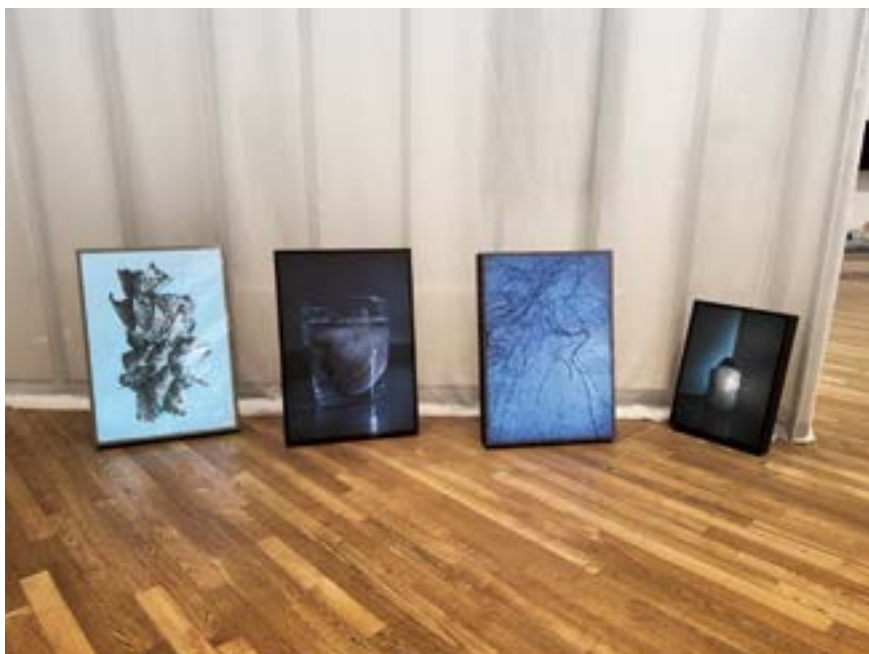
Photography

Prints, light box



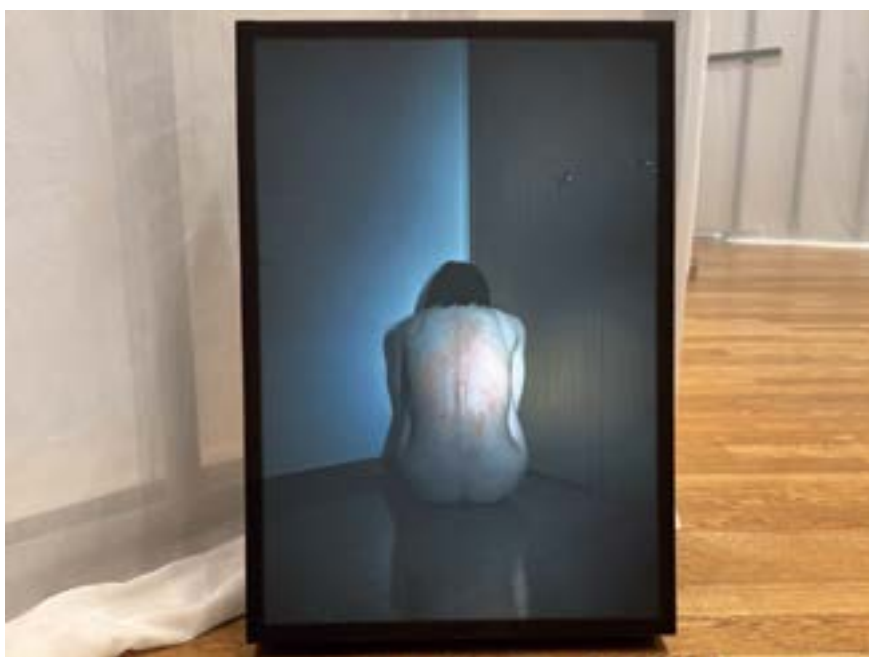
佐藤研究室に入る前に私は主に平面写真だけで制作したが、佐藤研に入っ
た後、周りの学生たちが様々なジャンルの作品を作っていることに気づいた。
佐藤先生と佐藤研の皆さんの影響を受け、異なる素材や表現形式に興味を
持つようになり、インスタレーションを中心に制作をしてきた。出展作品は、
写真インスタレーションで身体と情緒の関係を表現する。今回の展示を通
して、また佐藤先生と佐藤研の皆さんと一緒に展示ができることを楽しみに
している。

Before entering Tokyo University of the Arts, I mainly created works by
photography, but after joining the Sato Lab, I noticed that the students
around me were creating works in a variety of genres. Influenced by
Professor Sato and students in the Sato lab, I became interested in different
materials, and tried to make art installations. Through this exhibition, I am
happy to create and exhibit works together with everyone in Sato Lab.



普段は見られないような拡大された身体の細部を写真によって表す。骨格や肌の表情、炎症している皮膚といった特徴の部分と質感に共通点を持つ物体を被写体として、形のある肉体とその下に隠された形のない鋭い感情を捉えたいと考える。

By photographing the details of the human body that are not usually seen to capture the sharp and intangible emotions hidden under the human skin.



中国江蘇省生まれ。マドリード自治大学経済学部卒業。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。主に人の体を中心に撮影し、写真とインスタレーションを通して身体と情緒の関係を探索している。

Born in Jiangsu Province, China. Graduated from the Faculty of Economics from Autonomous University of Madrid. Completed the Master's program in Intermedia Art from Tokyo University of the Arts. Mainly photographs the human body and explores the relationship between body and emotions through photography and installations.

飯野哲心

IINO TESSHIN

2022年博士課程満期退学

ingotboy (power)

彫刻
樹脂、塗料
Sculpture
Resin, paint

私と佐藤先生との間を繋ぐ言葉は「enjoy」です。

先生の姿勢を近くで見ていると、たとえ困難な時でもそれを楽しんでしまうような状況をたくさん感じることができました。それは単に楽ちんにお気楽に過ごすということでは無く、状況を受容しポジティブに取り組み、可能な限りの努力を尽くすことだと考えます。

そしてそれはアーティストとしての活動としても重要ですが、人生を歩む上でも不可欠な要素として心に刻まれています。

私の制作では「男子の美意識」(男子イズム)にある「カッケー」=「パワーへの憧憬」、「オモロー」(ギャグやおふざけなど)、「未知への挑戦への」好奇心」を根幹にしているのですが、「enjoy」する少年らしさに溢れる先生の姿勢は私の観察対象でもあります。

The word that connects me with Professor Sato is “enjoy.”

Observing his attitude closely, I have often felt that he finds joy even in difficult situations. This does not simply mean living comfortably or carefreely; rather, it involves accepting circumstances, approaching them positively, and making every possible effort. This mindset is not only crucial for artistic endeavors but is also an essential element in navigating life itself.

In my own work, I draw from the concept of “boyish aesthetics,” which includes “cool!” (a longing for power) and “awesome!” (curiosity in challenging the unknown). Professor Sato’s youthful spirit, characterized by his ability to “enjoy,” serves as a significant source of inspiration for my observations. His approach embodies a sense of playfulness and curiosity that resonates deeply with my own creative process.



現在、私は学校で美術講師の仕事をしているのだが、私が触れ合う子どもたちを見ていると彼らは受験・部活・恋愛やスクールカーストなど様々な環境に身を置いている。我々大人から見たらちっぽけであったり笑ってしまうような戦いの中にはあるが、彼らにとってそれは真剣な問題であり、私達もかつては真剣に同じ葛藤の中に身を置いていたはずなのである。

そして、男子のしょうもないギャグやおふざけを見て、私には彼らの様々な行動から、おバカであるが真剣、カッコワルイけどカッコイイ、その現役で純粋な男子的な美意識・価値観がキラキラと美しく見え、その美しさを作品に出来ないかと試みている。

今回は小学3年生の男子へのインタビューからカッケーポーズを探し出し彫刻を制作した。

Currently, I am working as an art teacher at a school, and as I interact with the children, I see that they are immersed in various environments such as entrance exams, club activities, romance, and school hierarchies. Some of the struggles they face may seem trivial or even amusing from an adult's perspective, but for them, these are serious issues, and we too were once deeply involved in similar battles.

When I observe the boys' silly jokes and antics, I find that their various actions reflect a kind of beauty in their current, pure masculine aesthetic and values—foolish yet earnest, uncool yet cool—that shines brightly. I am attempting to capture this beauty in my artwork.

For this project, I interviewed third-grade boys to discover cool poses and created a sculpture based on that.

1981年 東京都八王子市生まれ

主な活動

2022年 「あそビーイング」はじまりの美術館

2023年 八王子芸術祭「場所に向き合い 気づき 感じる」

2024年 芸術祭「庄内 風と土の美術館」酒田市美術館

Born in 1981 in Hachioji City, Tokyo.

2022: "Asobi-ing" - HAJIMARI ART CENTER (Fukushima)

2023: Hachioji Art Festival - "Facing the Place, Becoming Aware, and Feeling" (Tokyo)

2024: Art Festival - "Shonai: Museum of Wind and Soil" - Sakata City Museum of Art (Yamagata)

李赫奕

Lee He-Yi

2023年修士課程修習

兔

Rabbit

紙、漆、木粉、麦粉

Paper, Lacquer, Wood Powder, Wheat flour





佐藤先生とともに学び、さまざまな分野のアーティストたちと触れ合う中で、異なる視点や技法に対する理解が深まりました。佐藤研究室のメンバーが扱う多様なメディアや独自の表現方法に触れることで、固定概念にとらわれず自由な発想で作品を生み出すことの重要性を実感しました。これにより、私自身の創作活動の幅が広がり、素材や表現手法に対して新たな可能性を見出すことができたと思っています。

また、研究室室内での交流を通じて、他者の視点や価値観に触れる貴重な機会を得ることができました。この経験は、私が作品を通じて何を表現したいのか、その根底にあるテーマを再考するきっかけとなり、内面の思考や感情を作品に反映させるうえで大きな支えとなりました。

作品に潜むメッセージや独自の美意識を追求する気持ちは強くなり、作品づくりが自己表現の場であると同時に、社会や他者と繋がる手段であるという意識を大きく持つようになりました。

Studying at Tokyo University of the Arts with Professor Sato and interacting with artists from various fields and backgrounds deepened my understanding of different perspectives and techniques. Through the diverse media and unique expressive methods of the Sato Lab members' works, I have learned the importance of creating without being bound by fixed ideas and thinking freely. This broadened my own creative activities, allowing me to discover new possibilities for materials and expressive techniques.

Moreover, the interactions within the lab extended beyond technical guidance, offering opportunities through daily conversations and discussions to encounter other perspectives and values. This experience provided a foundation for rethinking what I wish to express through my work, exploring the underlying themes and messages, and it became a great support in reflecting my inner thoughts and emotions in my creations.

It fuelled my passion for pursuing the messages within my art and my unique aesthetic sense, strengthening my awareness that creating art is not only a means of self-expression but also a way to connect with society and others.

秋本瑠理子

Ruriko Akimoto

2015年修士課程修了

Spheres of Lumière

—
ピンホール写真

ピンホール、フィルム、プリント

Pinhole phenomenon

Pinhole phenomenon, film, print on paper



私は2007年に藝大に入学し、学部3年の2009年から佐藤研究室に所属しました。佐藤先生の授業でピンホールに魅了されて以来、先生の作品やお話に深く影響を受け、2008年から今日までピンホール現象を用いた作品を作り続けています。面白いイメージを作りたくて、ひたすら針穴を開け続けたことは楽しい思い出のひとつです。

佐藤先生からは制作の姿勢や表現などの基礎だけではなく、ゼミでの温かな雰囲気や、その中で皆が自由闊達に議論できるような場をつくられていたことから大きな学びを得ました。その経験は、現在の私の教育や研究に活かされていると感じています。

沢山お世話になりましたが、特に佐藤研究室の自由な場こそが創造の原点であると感じております。大作家でありながらも、そうした教育の場を築かれた先生の偉大さに深く敬意を抱くとともに、改めて感謝申し上げます。

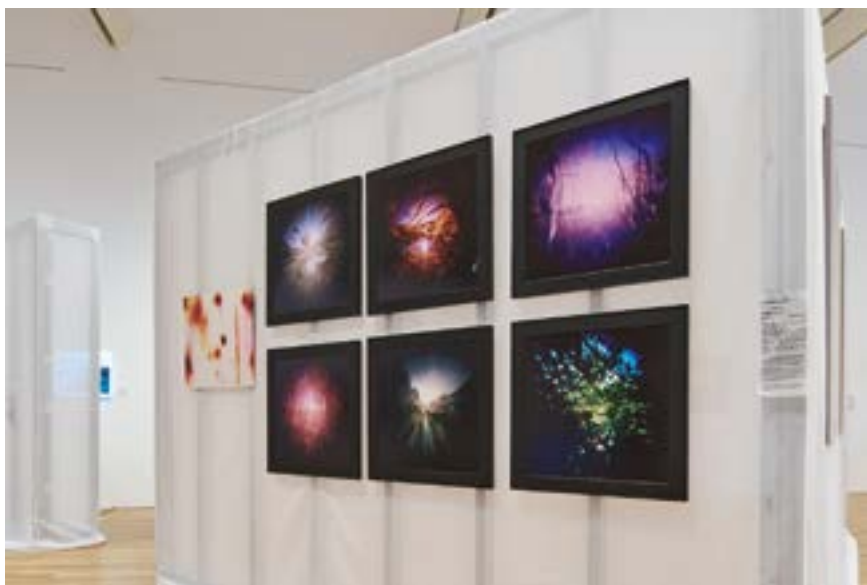
退官展では私がゼミに入って初めて制作した作品《Ephemeral Images of Lumière》と、現在も制作が続いている作品を並べることを通して佐藤先生への感謝の気持ちを表したいと思います。そしてこれからも制作を続けてまいります。

I entered Tokyo University of the Arts in 2007 and joined Professor Sato's laboratory in 2009 as a third-year undergraduate student. Ever since I was captivated by the pinhole phenomenon in Professor Sato's class, I have been deeply influenced by his works and teachings, and I have continued creating artworks using the pinhole phenomenon from 2008 to the present. I have fond memories of endlessly making pinholes in pursuit of creating round images.

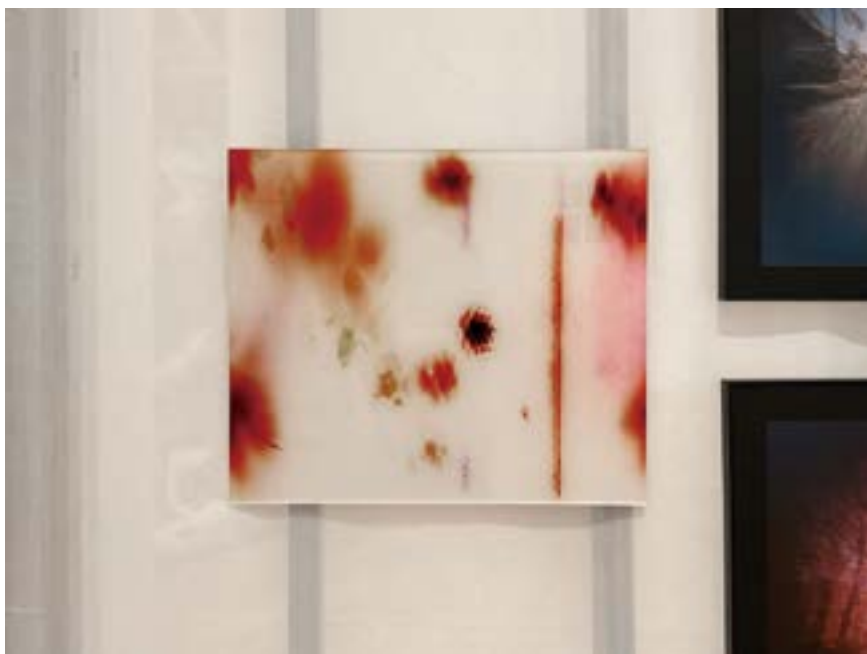
From Professor Sato, I learned not only the fundamental principles of artistic practice and expression but also the importance of fostering a warm and open environment for discussion. His seminars provided a space where everyone could engage in free and lively debate, which was a valuable learning experience for me. I believe that my experiences in his seminar have had a significant influence on my current research in Art Education.

Throughout the years, I have received invaluable guidance, and I strongly feel that the open and free atmosphere of Professor Sato's laboratory is the very foundation of creativity. Despite being a highly esteemed artist, he also dedicated himself to cultivating an educational environment, and I hold profound respect and gratitude for his contributions.

For Professor Sato's retirement exhibition, I wish to express my deep appreciation by presenting *Ephemeral Images of Lumière*, the first work I created in his seminar, alongside my ongoing works. And I will continue to create new works in the future.



Spheres of Lumière(6点のまとまり)



Ephemeral Images of Lumière(壁面左側の1点)

私にとってカメラオブスキュラは闇の中で光が像の形を結ぶ空間です。この作品は、暗箱に小さな孔をあけて、そこを通る光によってフィルムに像を結ばせたものです。ピンホール現象では像が焦点を結びますが、本作のように時間と空間が重なると輪郭がぼやけていき、まるで“光の球体”のように映しだされます。

時間の揺らぎの幻影は、次元をフラットに濃縮したものであり、過去と現在の痕跡が溶け合うものです。そのおぼろげな像のなかに、自身の記憶を投影させ、曖昧な時間の流れを感じていただければ幸いです。

These works capture images on film by allowing light to pass through a tiny hole in “a secret space where light takes shape”—for me, that is the camera obscura. While the pinhole effect typically creates a sharp focus, in this piece, the overlapping of time and space softens the contours, transforming the image into something resembling a luminous sphere.

This fleeting illusion of shifting time compresses dimensions into a single plane, where traces of the past and present dissolve into one another. I invite you to project your own memories onto these blurred images and immerse yourself in the fluid, ambiguous passage of time.

Ephemeral Images of Lumière

—
ピンホール写真

ピンホール、フィルム、プリント

Pinhole phenomenon

Pinhole phenomenon, film, print on paper

東京藝術大学先端芸術表現科卒業、同大学院美術研究科修了
現在、同大学院美術研究科芸術学領域博士後期課程在学中
写真・映像表現を主に制作。子どもたちと絵巻をつくる《現代の鳥獣戯画アートプロジェクト》を主宰。

Graduated from the Department of Intermedia Art, Tokyo University of the Arts, and completed a master's degree at the Graduate School of Fine Arts at the same university. Currently enrolled in the doctoral program at the same graduate school. Primarily works with photography and video expression. Also leads the “*Nowadays -Choju-Giga Art Project*” where middle and high school students, as well as children, create picture scrolls together!

魏子涵

Wei Zihan

2024年博士課程在学中

三谷
MITANI
—
写真
Photography



佐藤時啓先生の作品は、長年にわたり時間、光、日常的な事物との関係を深く探求している。静止した映像に時間の流動性を結び付け、観客に交差する時空間を提示してきた。この「時間」に対する鋭い感覚は、自分の創作にも大きな影響を与えている。

私は作品を制作する際、時間の表現に注目している。家族写真はしばしば時間を固定する道具と見なされるが、その背後にはシャッターを切った瞬間から記憶や感情の延長としての時間の流れが潜んでいる。さらに、佐藤先生の作品における「視点」の巧みな使い方も強い影響を受けている。《三谷》という作品では、カメラの特性を利用した視点の切り替え実験を試み、写真における一般的な単一の観察者視点を打破しようとした。写真が現実の単なる再現を超え、時間や感情との交流の媒体となる可能性を探っている。これらを通して、写真というメディアの可能性について改めて考え直すきっかけを得た。

Professor Tokihiro Sato's works have long explored the intricate relationships between time, light, and everyday objects. By connecting the fluidity of time with still images, he presents intersecting temporal and spatial experiences to the audience. His acute sensitivity to "time" has profoundly influenced my own creative process.

When producing my works, I pay particular attention to the expression of time. Family photographs are often regarded as tools that freeze moments in time, but beneath the surface lies a flow that extends from the moment the shutter is pressed, continuing as memories and emotions that perpetually evolve. Additionally, I am deeply influenced by Professor Sato's masterful manipulation of "perspective" within his works. In my project *Mitani*, I experimented with shifting perspectives by leveraging the unique characteristics of the camera, aiming to break away from the conventional, singular observer's viewpoint typically associated with photography. In doing so, I seek to explore photography's potential not merely as a reproduction of reality but as a medium for interacting with time and emotion. Through these explorations, I have been prompted to rethink the possibilities inherent in the photographic medium.



1994年中国生まれ。武蔵野美術大学大学院写真コースを修了後、現在は、東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻博士課程在学。

作品は、「五感(嗅覚・触覚など)」に基づく表現によって、イメージを解釈・拡張することを探究する。作品は現代人とそれを取り巻くものとの関係の現れ、メッセージの一部に過ぎない。単純な情報のアウトプットにとどまらず、写真と情報の関係を常に構築する。国内外のギャラリーで発表を続けている。

Born 1994 in Shandong, China. Now based in Tokyo. Graduated as master's degree from Musashino Art University, majoring in Imaging Arts and Sciences. Currently in postgraduate school at Tokyo University of the Arts major in Intermedia Art.

Her works are mainly based on ordinary in daily life, about the relationship between individuals and spaces, also the surroundings. To deliver the concept, she mainly focused on photographic installations to discover the balance within interdependence and mutual explanation. Her work has been exhibited at galleries and museums in Japan and abroad.

私の両親は1990年11月7日に結婚し、2020年に結婚30周年を迎えた。中国ではこれを「真珠婚」と呼ぶ。現代の社会において、30年間共に歩むことは、多くの人々にとって羨望の的といえる。

両親はある日、「私たちはまだ結婚写真を撮ったことがない。あなた、写真を学んでいるなら、撮ってくれない？」と言った。この言葉が、本作品制作のきっかけとなった。

本作品のインスピレーションは、コダック・ブラウンニー時代の家族アルバムやスナップ写真の美学から得た。そのため、作品名を《I did nothing other than to tell them to smile(ただ笑って、と伝えただけ)》とした。家族写真の多くと同様に、被写体はカメラの前で笑顔を作り、私に向かって「チーズ」と言う。しかし、時折シャッターがうまく切れず、作られた笑顔が次第に硬直したり、瞬きをしたりする場面もある。それでも、その一瞬に込められた喜びの感情は常に本物だ。

家族の話をするとき、「三谷」というシャム猫が欠かせない存在だ。私が不在の間、三谷は家族3人の一員として、その空白を埋めてくれる。このことから、猫の視点で私の家を見ると、どのように映るのかを想像した。そして、「キャットアイカメラ」と呼ばれる安価な玩具カメラ・Holgaを用い、自分の第三者視点と猫の主観視点を切り替える試みを始めた。

さらに、これまでと同じように、短いながらも日記のようなテキストを書き留めた。それは、かつて家族アルバムに添えられた記録を思わせるものだ。

My parents got married on November 7, 1990, and celebrated their 30th wedding anniversary in 2020. In China, this milestone is referred to as the "Pearl Wedding." In today's society, spending 30 years together is something many people deeply admire.

One day, my parents said, "We've never taken wedding photos before. Since you're studying photography, could you take some for us?" This simple request became the starting point for this project.

The inspiration for this work came from the aesthetics of family albums and snapshots from the Kodak Brownie camera era. As a result, I named the project I did nothing other than to tell them to smile. Like most family portraits, the subjects in my photos would create smiles in front of the camera and say "cheese" to me. However, there were moments when the shutter failed to capture the perfect timing, leaving their crafted smiles frozen or their eyes caught mid-blink. Yet, the joy embedded in those fleeting moments was always genuine.

When talking about my family, our Siamese cat, Mitani, is an essential member. In my absence, Mitani fills the void, becoming a vital part of our family of three. This idea led me to imagine what my home might look like from the perspective of a cat. Using a simple toy camera called Holga, nicknamed the "Cat's Eye Camera," I began experimenting with switching between my third-person viewpoint and the first-person perspective of the cat.

In addition, I continued the practice of writing brief diary-like texts, reminiscent of the annotations once found in family photo albums. These records add another layer of intimacy and narrative to the work.

朴ナヒョン

Nahyun Park

2017年博士課程修了

Greeting hand

—

立体
古着、他マルチメディア

Object
Own clothing, Multimedia

箱のなかに生き物が潜んでいる。
そいつの長い手が外へ外へ、人に手を差し伸べる。

佐藤先生のもとに研究生として入ったのは、日本に来て半年ほどたった時でした。

狭い世界で生きてきて人のかかわりを恐れて自分の内面にはかり目を向けて生きていた私が、佐藤研で色々な人に出会い、色々な人の作品や世界観をみながら仲間という言葉を感じ、支えてもらう嬉しさを知り、誰かと一緒に頑張ることに楽しさを覚えました。

そのように築いてきたことが今の自分を成していて、自分だけの「箱」から徐々に外の世界へ手を伸ばしていると、時々感じています。

今回の作品はそれを表しています。

There is a creature hiding inside the box.
Its long hands go out and reach out to others.

I joined Sato Lab as a research student about half a year after I came to Japan.

I had lived in a small world, afraid of interacting with others, and had always looked only at my own inner self, but at the Sato lab I met many different people and saw their works and worldviews, and I felt the meaning of the word “fellow” I learned the joy of being supported, and learned the joy of working hard together with others.

My experiences at the Sato lab have made me who I am today, and I sometimes feel that I am gradually reaching out from my own “box” to the outside world.

This work represents that.

I use old clothes and items I used to wear to express my inner face and emotions.

When I was in the Sato lab, we made *tenugui* each year featuring a pattern that captured that year's Sato lab experience. This time, I am using *tenugui* from my time at the Lab.

私は、自分が着ていた服や身の回りの物を使って、新たな「かぶりもの」を作り、それを通じて自分の内面の顔や感情を表現しています。佐藤研究室に在学していた頃は、これをかぶって異なるペルソナを演じるパフォーマンスが作品の完成形でしたが、現在ではさまざまなモチーフを作り、増殖させています。

今回の作品には、古い服だけでなく、佐藤研究室での思い出が詰まったアイテムも取り入れています。特に、私が研究室に在籍していた間に毎年作っていた手ぬぐいを用いています。この手ぬぐいは、その年の佐藤研究室を象徴する柄で、私の在籍期間中のものも使っています。

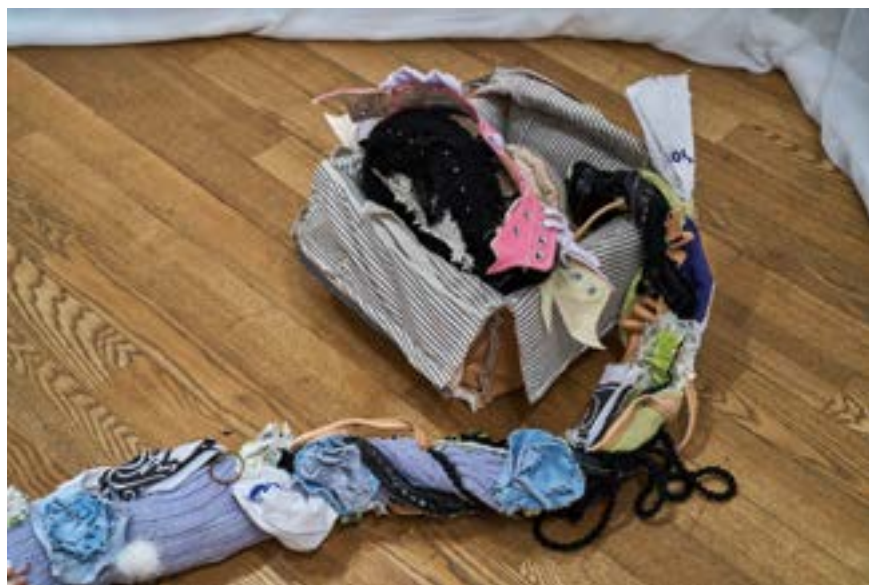
「箱」の中から差し伸べられた手は、手ぬぐいをまとい、勇気を出して他者に触れようとしている様子を表現しています。これは、佐藤研究室の皆さんに支えられながら変化し続けてきた私自身の姿を象徴しています。

My work involves creating a Mask as another face, using clothes and items that I have already worn. Through that mask, I express my inner face and emotions. When I was attending the University of the Arts, the complete form of my work was a performance where I wore a headgear that I had made to express a different persona, but now I am creating and multiplying various motifs.

For this work, in addition to using old clothes, I also knitted items that still hold memories from my time at the Sato laboratory.

When I was in the Sato lab, we made *tenugui* with a pattern that captured that year's Sato lab every year. This time, I used all the *tenugui* I received when I was in the laboratory.

The hand held out from inside the “box” represents the person who has changed through the support of everyone in the Sato laboratory, wearing the *tenugui* and trying to muster up the courage to touch others.



私は2010年に研究生として佐藤研に入り、その後修士・博士にわたって所属しておりました。
現在はアート活動からは離れて、働きながら社会人としての経験や理解を取得する成長プロジェクトに取り組んでいます。

I joined Professor Sato's laboratory as a research student in 2010, and then studied at the Sato lab for my master's degree and doctoral degree.

Currently, I am taking a little break from my art activities and working on a growth project that allows me to gain experience and understanding as a member of society.

佐藤翔心

Shogo Sato

2024年学部 3年在学中

Emulated Afterglow

—
立体

写真、ラミネートフィルム、レジン

Photograph, sculpture

Photo, laminating film, resin



私は佐藤先生の作品を生と死、虚構性という点で捉えている。

佐藤先生の長時間露光を使い撮影された写真には人が写り込まないものも多い。また、特別なものや道具を新たに取入れず、光という常にそこに存在するものを利用して現実介入する。

作品には人の痕跡が写り、それは生と死の境界のようである。また、光という身近なものによる表現には、現実が現実のまま変容し虚構と成る感覚を覚える。

今回私が展示するものは、ラミネートフィルムに転写した写真を溶かし引き伸ばしたものであり、被写体は亀裂がテープ等で隠されたものである。

溶かし引き伸ばすことと亀裂とそれを覆うものにより、欠けが持つマイナスなイメージを力の表現に転換し、そして引き伸ばされること、覆いを感じる虚構性を可視化することを試みた。

I interpreted Professor Sato's work as exploring the boundaries of life, death, and fictionality.

Some of the photographs taken by Professor Sato using long exposures cause the image of the people to disappear.

Without introducing special objects or tools, he intervenes in reality by using something that is omnipresent : light. Thus his works show traces of people or spirits evoking the boundary between life and death.

In this piece I created photographs that have been transferred onto laminated film and melted them. The subjects are those whose cracks are concealed by tape.

By melting, stretching, cracking, and covering, I attempted to transform the negative image of absence into a positive, visually tangible expression.



この作品はラミネートフィルムに転写した写真を溶かして引き伸ばし、結合させたものである。亀裂をテープで補修して展示されている偵察機と、地震でできた亀裂をガムテープで補修した自宅の写真を使用している。

偵察機は戦争、自宅は日常を象徴しており、どちらも亀裂という生と死の境界を持っている。亀裂が生じたものは不完全なものとして扱われることが多く、死や負の象徴である。一方で亀裂は生じたエネルギーを示し、生であり正の象徴でもある。ものが持つ意味に、生じた亀裂が意味を重ね、その上からさらに人の手で補修される。その上で写真として現実の模倣・虚構として取り繕われ、ラミネートフィルムに転写され、転写したフィルムを溶解させることで写真を結合し、元の被写体のテープの重なりを写真で再現し取り繕う。

そうした幾多もの取り繕い・虚構性による、亀裂が持つイメージの重層化をテーマとした。

This artwork is created by transferring photographs onto laminate film, then dissolving, stretching, and merging them.

It incorporates images of a reconnaissance aircraft, displayed with its cracks patched with tape, and a photograph of the artist's home, where cracks caused by an earthquake were patched with duct tape.

The aircraft symbolizes war, while the home represents everyday life. Cracks serve as a boundary between life and death. Objects with cracks are often seen as incomplete, symbolizing death or loss. However, I believe that cracks can also signify the energy of creation and life.

The original meaning and purpose of an object is altered when cracks appear, adding the duality of life and death. When patched, it gains yet another layer of meaning.

The process of creating this artwork, which both imitating reality and constructing fiction, plays a key role in this piece. The images are transferred onto laminate film, and by dissolving the film, the photographs merge, visually reconstructing the overlapping layers of tape on the original subjects.

This work explores the multilayered meanings of cracks, emphasizing their significance through the inherent nature of photography to reproduce, imitate, and fictionalize reality.

2001年生まれ 福島県出身
汚れや亀裂、光と影をテーマとした制作をしている。

Born 2001, Fukushima
Works themes of dirt and cracks, light and shadow.

黒川裕美

Hiromi Kurokawa

2024年学部 3年在学中

捨て去られた虫の巣

Abandoned insect web

もの

美術館、数検受験(準2級)、木材

A thing

Museum, Mathematics proficiency test, Assemble wood



私の作品の両隣の作品が、平面的な作品であることから、鑑賞者の視線の流れが一定になるよりも、上を向くことがあっても良いのではないかと思い、かなり上の方に作品を設置しました。(最初、作品に気づかなかった人もいたようです。)また、現実と空想の間を行き来するような作品なので、見えそうだけどはっきりとは見えない、手で届かない、そんな感じの距離感に設置しました。

私は佐藤研で一番新参者です。ですが、退任展への参加にOKをくれてありがとうございます。そして、一年間の活動すべてに感謝申し上げます。

Since both sides of my artwork are flat, I wanted viewers to sometimes look upward rather than keeping their gaze level. Therefore, I installed my piece quite high. (Some people didn't notice it at first.)

My work moves between reality and fantasy, so I positioned it at a distance that feels visible while not entirely clear, within reach but still unattainable.

As the newest member of the Sato Lab, I truly appreciate the opportunity to participate in this retirement exhibition. Thank you for letting me be a part of it, and I'm deeply grateful for this past year.

一匹の気まづいという名前の蜘蛛が、家の中に入ってきて、私の家の中にあつたものを念写しました。そして、美術館に網を張りました。

佐藤研に入る前の面談で、数学検定の為に勉強していることを佐藤先生に伝えました。数検には高校の時から興味がありました。

私にとってこの研究室に入ってからの日々は、ほぼ数検の勉強でした。

検定に合格してから、私の家に一枚の合格証明書が届きました。私は、私の半年くらいの時間で、生み出したものがこの紙一枚であることが不思議で、この紙に価値があるのかどうかもわからなくて、ただしまっておくことしかできませんでした。

One spider named “Awkward” came into my house and made a thoughtography of what was in my house. Then, the spider spun their web there.

At the interview before I joined the Sato Institute, I told Professor Sato that I was studying for the “sugaku kentei” exam. I had been interested in taking the math exam since high school.

For me, almost all of my days after joining this laboratory were spent studying for the Math Proficiency Test.

After I passed the exam, I received one certificate at my home. I could only put it away, wondering that this one piece of paper was what I had produced in about six months of my time, and not knowing if it was worth anything or not.



日常の中で、ふと見つけた「なんかよい空気」を、自分で作りたくて、作ってます。「なんかよい空気」には匂いに名前をつけることのような難しさがあります。また、匂いのように、持ち運ぶことが難しいです。

I wanted to create my own “good vibes” that I suddenly found in my daily life. There is a difficulty in creating “good vibes,” just like giving a name to a scent. Also, like scent, it is difficult to carry around.

...Hi, awkward くん

神沼美虹

Miya Kanuma

2024年修士課程在籍中

sense of wonder

—
写真
写真、灰
Photograph
Photo, Ash



佐藤先生のことを知ったのは芸大にまだ在籍していない学部生の頃でした。写真美術館のコレクション展で《光・呼吸》のいくつかの写真が展示されており、見たことの無い写真のイメージに魅了されました。

佐藤先生の《光・呼吸》は、写真を用いて自分と自然や世界への好奇心に突き動かされて制作しているような印象を受け、純粋な気持ちから作られた作品は、センスオブワンダー（自然の神秘さに触れ深く感動すること）の現われのようだと思います。

この作品は、わたしの「センス・オブ・ワンダー」です。世界に存在するすべての人やものを、誰も何も完璧に理解しきることはできないことであり、それはまさに宇宙と同じくらい謎に満ちているのです。わたしたちは大きな宇宙の一部として存在していながら、目の前にはそれぞれまた別の宇宙が瞬いていているのです。

I learned about Professor Sato when I was an undergraduate student not yet enrolled at Tokyo University of the Arts. Some of the photographs from *Photo-Respiration* were exhibited at the Museum of Photography's collection exhibition, and I was fascinated by the images of the photographs, which I had never seen before.

I got the impression that Professor Sato's *Photo-Respiration* was created using photography, driven by curiosity about himself, nature, and the world, and I thought that the works, created from pure feelings, were a manifestation of a sense of wonder (being deeply moved by the mystery of nature).

This work is my "sense of wonder." No one can fully understand all the people and things that exist in the world, and it is just as full of mystery as the universe itself. Although we exist as part of the larger universe, each of us has another universe twinkling before our eyes.



《sense of wonder》シリーズから2枚の作品を抜粋。私はずっと宇宙に魅了されていた。幼い頃に読み漁った宇宙の図鑑、父親に毎週連れて行ってもらったプラネタリウム、誕生日プレゼントで貰った望遠鏡。

謎に満ち、果てしなく広がる宇宙を知りたかった。そして、そんな宇宙に思いを馳せることは私を限りなく自由にもさせた。

でも、そもそも、未知なる宇宙ではなく、もっと近くにあるものなら、私はすべてを把握できるのだろうか？

存在するすべてのもの、そして私自身ですら、私がただ、想像し、解釈し、認識しているだけなのかもしれない。

私たちは大きな宇宙の一部でありながら、それぞれの心の中にも宇宙を宿している。

目の前に広がる無数の宇宙を、見つめ、愛し続けたい。

Two pieces are selected from the *sense of wonder* series.

I have always been fascinated by the universe.

The space encyclopedias I read as a child, the planetarium my father took me to every week, and the telescope I received as a birthday present.

I wanted to know more about the universe, full of mystery and endlessly expanding. And thinking about the infinite cosmos also gave me infinite freedom.

But in the first place, if it was not the unknown universe, but something closer to me, would I be able to grasp everything?

Perhaps everything that exists, and even myself, is merely something I imagine, interpret, and consequently perceive.

We are part of the vast universe, but each of us also has a universe within us.

I want to continue gazing at and loving the countless macro and microcosms that spread out before my eyes.



写真を用いて記憶や認識、それを通した存在との繋がりをテーマに制作している。制作には変質させたネガ、灰を用いたプリントなど物質的な手法を扱っている。

Using photography, he creates works that explore themes of memory, recognition, and the connection to existence, using material methods such as altered negatives and prints made from ash.

石山和広

Kazuhiro Ishiyama

2008年修士課程修了

像が像であるための強調 [Pond in Lens No.1&2]

Emphasis on the image to be an image [Pond in Lens No.1&2]

—

写真

アーカイバルインクジェットプリント、額

Photography

Archival Inkjet Print and Frame



佐藤先生に師事した2年間は現在の私にとっての礎となっている。最も重要なことは作家として続けていく姿勢である。先生は作品の内容について一切アドバイスをしなかったように記憶している。当時は何かアドバイスが欲しく物足りないと感じたことも正直なところあった。ただ次第に「自分のなかに潜んでいるものを信じてだしてみる」この行為の連続こそが作家の仕事である、となんとなく先生がその振る舞いを通して伝えたかったことではないかと理解するようになった。そして久々にお会いした先生はずっと変わらず「カメラ・オブスクラ」という考え方と道具とともに光と遊んでいた——私はまたここから学ぶことができる。

My two years in Professor Sato's lab, which began in 2006, have become the foundation of who I am today. The most important lesson was about maintaining one's stance as an artist. I recall that he never gave any advice about the content of my work. To be honest, at the time, I sometimes felt unsatisfied and wished for more specific guidance. However, I gradually came to understand that through his behavior, he was perhaps trying to convey that an artist's true work lies in the continuous act of "believing in and bringing out what lies within oneself." When I met him again after a long time, he remained unchanged, still playing with light through the concept and tool of camera obscura—and here, I find I can learn from him once again.



フランス北部のとある池の風景。穏やかな風が、浅い湖面を揺らしていた午後のことである。この光景から長いあいだ目を離すことができなかった。なぜこうも魅了されるのか。その問いが制作のきっかけとなった。

ぼんやりとうっすらとした雲がかかった晴れの屋下がり。6月のなかばで気温もちょうど良く、風も穏やかで心地よい。目の前の池に長い時間見とれてしまう。なぜこんなふうに見とれてしまうのか。眺めていると、水面が常に揺れ動くなかで、ふたつの対象がわたしの焦点を奪うため競いあっているようにみえてくる。ひとつは浅い湖底の泥の近景の様子。風に吹かれた水の体積が湖底に沈んだ泥を鈍く揺らす。ふたつめは、湖面に反射した遠くの景色。サラサラと揺れ動く遠景は輝くように存在を示す。この両者の風

景は終わることなく交互に私の焦点に飛び込んでくる。まるで自分の視覚がかねらの獲物であるかのように感じた。なんともいえない心地よさ。私は長いあいだ目を離すことができない理由はこのふたつの風景の競い合いのせいだと仮定した。

そこで気がつく。両方を同時に視界に留めたもののだけ、湖底に焦点を合わせれば遠景に焦点を合わせることができない。また逆も然り。そこで両方を同時に見ることで、フィクションとしての画像を制作しようと思い立った。撮影ではまず近景である湖底をおよそ100分割以上に分けし、全てにピント合わせ、PC上で一枚の近景に仕上げる。そして遠景も同じように撮影する。それからさらに両者を一枚に合成し、どちらにも焦点があった画像をつくる。結果として、人間の眼は距離の異なるふたつ同時

に焦点を合わせることはできないから、身体的な視覚能力を超えた写真平面ならではのイメージとなった。近景と遠景、ふたつの像はわたしの視線を奪いあう。それはまるで、像自身が像であることの強調を図っているかのようなだった。イメージそれ自体にも意思があるのだろうか。

そして湖面が映し出す遠くの景色には、どういう偶然だろうか、かつて通った小学校の校庭にあった柳の樹(右に配置)、そして実家が栽培しているさくらんぼの樹(左に配置)が映っている。遠くに来て不意に故郷を思い出す。この作品は、肉眼の限界を超えた新しい風景の表現の試みと、個人的な記憶が交差する瞬間を捉えたものである。

A Landscape at a Pond in Northern France. On that afternoon, a gentle breeze rippled across the shallow water's surface. I found myself unable to look away from this landscape for a long while. The question of why I was so captivated became the catalyst for this work.

It was a sunny afternoon with thin, hazy clouds. In mid-June, the temperature was perfect, and the breeze was pleasantly mild. I found myself transfixed by the pond before me for an extended period. Why was I so mesmerized? As I gazed, amid the constant undulation of the water's surface, it seemed as though two subjects were competing for my focus. The first was the immediate view of the mud at the shallow bottom of the pond. The volume of wind-blown water caused a dull undulation in the submerged mud. The second was the distant scenery reflected on the water's surface. The rippling distant view asserted its presence

with a luminous quality. These two landscapes repeatedly vied for my attention without cease. It felt as though my vision was their prey. An ineffable sense of contentment. I hypothesized that the reason I couldn't look away for so long was due to this ceaseless competition between the two landscapes.

Then I realized: while I wanted to keep both in my field of vision simultaneously, focusing on the pond bottom meant losing focus on the distant view, and vice versa. This led me to attempt creating a fictional image where both could be viewed simultaneously. For the photography process, I first divided the near view of the pond bottom into over 100 sections, focusing on each, and combined them into a single near-view image on the computer. I did the same with the distant view. Then I composited both into a single image where both were in focus. Since the human eye cannot

physically focus on two different distances simultaneously, this resulted in an image unique to the photographic plane that transcends our body's visual capabilities. The near and distant views compete for my gaze. It was as if the images themselves were attempting to emphasize their nature as images. Do the images themselves possess some form of will?

And by what coincidence, the distant scenery reflected in the water's surface included a willow tree from my elementary school playground (positioned on the right) and a cherry tree my family cultivates at home (positioned on the left). Far from home, I unexpectedly recalled my hometown. This work captures the intersection between an attempt to express a new landscape that transcends the limitations of the naked eye and a moment when personal memories converge.



写真術を平面技法のひとつと捉え、描写性の追求により肉眼を超えた視覚体験の創出を試みる。主な2019年-の東京ミッドタウンパーマネントコレクション・および常時公開中の「絵画からはなれて[磊]」。

Regarding photography as one of the two-dimensional techniques and by pursuing its descriptive capabilities, the artist attempts to create visual experiences that transcend the limitations of the naked eye. Major works include the permanent collection at Tokyo Midtown (2019-present), which features the ongoing display *Away from Painting [LAI]*.

秋山果凜

Karin Akiyama

2023年修士課程修了

縦に連なるお椀

stack the bowls

—
変わり塗り（乾漆塗り）
栃、漆、顔料

Kanshitsu nuri
Japanese horse-chestnut, urushi, pigment



佐藤先生の作品にある光の痕跡には、光をフィルムに刻み込むまでの身体性と、光が内包している記憶のような神秘性が共生していて、そのどちらもあるから、作品を前にした時に今ここで生きていることを再認識することができるのだろーなと思っています。この認識は、立体を制作する上で驚される「うわー！何だこれー！大きいなー！」というスケールに対しての身体を凌駕していく純粋な感動にも似ているような気がします。

私自身は立体を制作する中で、自分自身や他者の記憶や行為の痕跡をどのように物質や空間のスケールに落とし込んでいくかを常に考えています。様々な特色を持つ学生が集った佐藤時啓研究室での時間も、リアルな物語として大きな影響を私に与えてくれました。

今回の乾漆碗の制作では、これまでのように物語として広げてきた痕跡を何度も重ねていくことに重点を置いてみました。退任展で先生と学生たちの作品が交差していくのなら、痕跡も広がるだけでなく、重なり合い交わるはずだからです。そして、表層に現れ出た模様は、大脳皮質と同様な広がり方をしてくれたら面白いだろうなと想像してみました。

In the traces of light in Professor Sato's work, I sense a coexistence between the physicality of engraving light into film and the mysticism of

the memory embedded within light itself. It is because both aspects exist that, when I stand in front of the work, I am reminded of the fact that I am alive here and now. This recognition feels somewhat akin to the pure, overwhelming emotion one experiences when encountering the scale of a three-dimensional work—that visceral, awe-inspiring sensation of *Wow! What is this? It's so big!*

In my own practice of creating three-dimensional works, I constantly think about how to translate the traces of memories and actions, both my own and those of others, into the scale of material and space. The time I spent in Professor Sato's laboratory, where students with various skills and characteristics gathered and collaborated, also had a significant impact on me as a real-life story.

For the creation of this dry-lacquered bowl, I focused on layering the traces that had been expanded into a narrative, just as I had done in the past. If the works of both Professor Sato and the students intersect at the retirement exhibition, then the traces should not only expand, but also overlap and intersect with each other. I imagined that it would be interesting if the patterns that appeared on the surface spread in a way similar to the cortex of the brain.



喜多方の乾漆塗りは、硬化した漆が何層にも重なった鉢を職人が研いだところから始まったそうです。現在では、稲穂から作ったみご刷毛に色漆を付けて、お椀に叩きつける作業を何度も繰り返した後、塗りを重ね水研ぎをすることで模様を出しています。この手法は喜多方独自のものと言えます。また、みご刷毛で叩くことによって付く模様は、どれも意図的にコントロールすることができないため、表層には偶然性が蓄積された模様が漆の層になって現れ出てきます。この漆の層は行為の痕跡だけでなく、同時に時間の痕跡を表しているとも言えます。

The dry-lacquer technique of Kitakata is said to have originated when artisans polished bowls made from layers of hardened lacquer. Today, the process involves repeatedly applying colored lacquer to a brush made from rice straw, and then striking it onto the bowl. After several repetitions, the lacquer is layered and then polished with water to reveal the patterns. This technique is unique to Kitakata. Furthermore, the patterns created by striking with the rice straw brush cannot be intentionally controlled, so the surface reveals patterns formed by the accumulation of chance, appearing as layers of lacquer. These lacquer layers represent not only the traces of actions but also the passage of time itself, imprinted upon us.



稲穂から作ったみご刷毛に色漆を付けて、お椀に叩きつける作業風景

This work captures the process of applying colored lacquer to a rice-stalk brush and striking it onto a bowl, resulting in the creation of a unique pattern.

秋山果凜
1997年生まれ
2019 東京造形大学 造形学部 美術学科 絵画専攻 卒業
2023 東京藝術大学大学院 美術研究科 先端芸術表現専攻 修了
佐藤研在籍期間 2019～2023

Karin Akiyama
1997 Born in Japan
2019 Tokyo Zokei University (BFA in Painting)
2023 Tokyo University of Arts (MFA in Intermedia Art)
Studied in Sato Lab from 2019 to 2023

王露

WANG LU

2022年修士課程修了

Frozen are the Winds of Time: A journey back to the present

—
写真

マット紙、インクジェット出力

Photograph

Matte paper, Inkjet print



佐藤先生と初めてお会いしたのは、ニコンサロンでの作品レビューをしていただいた時でした。当時、未完成の80枚以上の作品素材を先生にご覧いただき、貴重なご意見をいただきました。その後、約2年かけて素材を整理し、卒業の年に写真集《Frozen are the Winds of Time》として出版することができました。佐藤先生は、素材が無秩序な状態から一冊の写真集として完成するまでの過程を見守ってくださいました。

I first met Professor Sato during a review at Nikon Salon, where I showed him over 80 unfinished works and received his invaluable feedback. After two years of organizing, I published my photo book *Frozen are the Winds of Time* in my graduation year. Professor Sato watched as these pieces transformed from unstructured fragments into a complete collection.

今回の展示作品《Frozen are the Winds of Time: A journey back to the present》は、前作をベースに、撮影時に残った期限切れのフィルムを使用して制作したものです。4年後に故郷に戻り制作した続編であり、新たに誕生した一方で未完成な部分も持ち合わせ、過去でありながら同時に現在でもある作品です。

The current exhibit, *Frozen are the Winds of Time: A journey back to the present*, was created using expired film from the previous work. It's a continuation made four years later upon returning to my hometown—a piece that embodies both the past and present.



Niels Cibois

1826

2018年から2019年まで交換留学生として在籍 From France

—
パラフィンで覆われたキャンバスにインクで印刷された写真
デジタルプリント、キャンバス、パラフィン

Ink-printed photograph on canvas embedded in paraffin
Digital print, canvas, Paraffin



佐藤先生の研究室で特に印象的だったのは、写真家や彫刻家がそれぞれの視点で表現やイメージの可能性に取り組んでいる多様な芸術的アプローチでした。毎週のミーティングやサイアノタイプを扱うワークショップでは豊かな意見交換ができ、私のアプローチがさらに強まりました。カメラを使わない創作活動を通じて、私は写真に触覚的で彫刻的なアプローチを取り入れています。初期の写真家が各作品を驚きと発見の連続として捉えたように、私もイメージに魔法のような感覚を取り戻したいと考えています。イメージにあふれる現代で、この失われた魔法を、手や体を使って直接作品に関わるプロセスを通じて取り戻すことを目指しています。佐藤先生や研究室のメンバーと共有し、さらに磨き上げたこの探究の精神は、私が既に進んでいた道をより明確にし、確かなものにつけてくれました。

What I particularly appreciated in Professor Sato's laboratory was the diversity of artistic approaches present, especially among photographers and sculptors with unique perspectives on imagery. Our weekly meetings and workshops, like the one focused on cyanotypes, allowed for the sharing of these different visions and reinforced my own approach. As a creator of images without a camera, my practice leans toward a sculptural, tangible approach to photography. I strive to bring forth a nearly magical dimension to the image, much like the early photography pioneers who saw each picture as an extraordinary discovery. In today's image-saturated world, I seek to recover this lost magic through methods that let me physically handle the image, involving both hands and body. This spirit of exploration, which I shared and refined with Professor Sato and some members of the lab, helped me to sharpen the path I was already following.



1995年 パリ生まれ、フランス
2021年 MFA美術 パリ美術学校 フランス
2018年 - 2019年 東京藝術大学美術学部先端芸術表現科 交換留学(佐藤時啓研究室)
2017年 BFA美術 パリ美術学校(フランス)

1995 Born in Paris, FR
2021 MFA Fine-arts, Beaux-Arts de Paris, FR
2018 - 2019 Intermedia Art Section (Tokihiro Sato's Lab), Tokyo University of the Arts, JP
2017 BFA Fine Arts, Beaux-Arts de Paris, FR

わたる（石川智弥＋古屋様子）

WATARU (Tomoya ISHIKAWA + Shoko FURUYA)

2005年修士課程修了（石川）

不在の感触

The touch of absence

手でふれて鑑賞する立体作品

樹脂(3Dプリンティング)、布、鉄、牛角、他

Tactile sculpture

Resin (3D printing), fabric, iron, horns of bull, and more



先端芸術表現科の黎明期は、前例を持たない変化と実験に溢れ、とてもエキサイティングなものでした。その活気のせいか時に攻撃的なコミュニケーションを伴うこともあり、「先端恐怖症」というジョークも耳にしたおぼえがあります。その中で、一貫して学生主体の姿勢を崩さずに接してくださったのが故渡辺好明さんと佐藤さんでした。

在学当時は旧来型の美大教育を相対化することが特に重視されており、私自身の制作姿勢に対しても、周囲から「ただ作りたいだけでしょ」と揶揄されることがありました。その中で私が佐藤研を選択した理由は、彫刻科という出自の共通性だけではなく「作ることが好き」という体質の共通性だったのだ、と今は思えます。

年を経て、学びを乞うていた当時の佐藤さんの年齢を超え、Facebookで目にする佐藤さんの問題意識の持ち方や興味対象に親近感や思いを重ねることが多々あります。振り返れば、「物質」「自身の肉体」「体験」を基軸としながら表現を模索するその後の私の生き方は、佐藤さんの姿に後押しされてもたらされていたのかも知れません。

The early days of the Department of Intermedia Art were marked by unprecedented change and experimentation, making it an exciting time. This dynamic atmosphere sometimes led to intense communication, and I recall hearing the joke about “fear of cutting-edge art.” Amidst this, the late Associate Professor Yoshiaki Watanabe and Professor Sato consistently upheld a student-centered approach.

At the time, there was a strong focus on critically reassessing traditional art education. My own creative approach was sometimes dismissed with remarks like, “You just want to make things, don’t you?” and “You’re only doing this for the sake of it.” Looking back, I realize I chose Sato Lab not just for our shared background in sculpture but for our mutual passion for creation.

Years later, I have now surpassed the age at which I once sought Professor Sato’s guidance. Seeing his thoughts on social media, I often relate to his perspectives. In hindsight, my lifelong pursuit of expression—centered on “material,” “the body,” and “experience”—was likely shaped and encouraged by his presence.



石川智弥 1973年千葉生まれ。2003年東京藝術大学彫刻科卒業、2005年先端芸術表現専攻修了。テクノロジー、身体をもとにした立体作品を制作。

古屋祥子 1976年山梨生まれ。2003年東京藝術大学彫刻科卒業、2008年美術教育専攻後期博士課程単位取得退学。触覚をテーマとした彫刻やアートメダル、絵本を制作。Tocca a te!2023にて最優秀アーティスト賞受賞。

wataru-art.jp

Tomoya Ishikawa; Born in 1973 in Chiba Japan. BFA in Sculpture, Tokyo University of the Arts (2003), MFA in Inter Media Art (2005). Creating three-dimensional works based on technology and physicality.

Shoko Furuya; Born in 1976 in Yamanashi Japan. BFA in Sculpture, Tokyo University of the Arts (2003), MFA in Art Education(2005). Creating sculptures, art medals, and picture books themed around the sense of touch. Winner of the Best Artist Award at Tocca a te! 2023.

wataru-art.jp

本作は手でさわる鑑賞を想定した美術作品です。

美術は視覚に依拠する芸術表現ですが、目が見えない、見えにくい人にとって無価値なものではありません。特に物質をメディアとし、触覚を介して表現を行うことで、そのコミュニケーションの実現性は大きく向上します。誰かを疎外することのない作品体験を探る試みとして、また視覚偏重型の現代のメディア表現に対するカウンターとして、私たちは触覚鑑賞の探求に可能性を感じています。

本作では、デジタルスカルプチャーという非物質的で目でしか捉えることができないものをもとに、さわって確かめられる実物大の雄牛を実体化しました。胴体の形状は普及期に入った家庭用3Dプリンタを活用し、データ上で分割処理を加えた部品を出力、アSEMBルして制作しています。その表面に樹脂や布を用いて、大型哺乳類の筋肉と肌を模した感触を与えました。

雄牛の持つ生々しい存在感を、薄く空虚な殻形状の表面で対比的に組み合わせる。それによって「虚ろさの中にもある確かな手応え」に近づけるのかもしれない。

感得しきれないものをより強く実感したいという衝動をもとにした、さわらないとわからない「触覚的イリュージョン表現」の試みです。

This artwork is designed to be appreciated through touch. While visual art is traditionally perceived through sight, it still holds meaning for those who are blind or have limited vision.

By using substance as a medium and expressing through touch, the possibility of communication is significantly enhanced. As an attempt to explore an art experience that does not alienate anyone, and as a counter to the visually biased media expression of contemporary times, we see potential in the exploration of tactile appreciation.

In this work, a life-sized bull that can be touched and felt is materialized based on a digital sculpture, which is immaterial and can only be perceived with the eyes. The shape of the torso was created by printing and assembling parts that were divided digitally using a home 3D printer, which is now in widespread use. Resin and cloth were used on the surface to give it a texture that mimics the muscles and skin of a large mammal.

The vivid presence of the bull is contrasted with the thin, hollow shell-shaped surface. This may bring us closer to a “definite response even in the emptiness.”

Based on the urge to feel more strongly what cannot be fully perceived, this is an attempt at a “tactile illusion expression” that can only be understood through touch.

曹原

Cao Yuan

2023年修士課程修了

娼夏

A11

小説

合成皮革、宣紙、イノシシの牙、縄

Novel

Boar's teeth, imitation boar fur,
Leather, xuan paper, bark rope

かつて私は映像を主な表現の媒介として創作していましたが、佐藤研究室に入ることで、新たな表現の可能性を追求する旅が始まりました。私は文字という奥深い領域に身を投じ、映像と文字が織りなす関係性を探し求めるようになりました。この挑戦的な試みは佐藤先生の温かい支持を得て、やがて全編日本語で書き上げた一冊の小説へと結実しました。その物語の中では、写真が挿絵として各章にそっと息づき、視覚的なイメージが言葉と交わりながら読者の想像を広げ、物語にさらなる深みを与えています。

In the past, I primarily used imagery as my medium of expression, but upon entering Professor Sato's lab, I began a journey to explore new possibilities in my work. Immersing myself in the profound realm of text, I sought to discover the intricate connections between imagery and words. This ambitious endeavor was warmly supported by Professor Sato, eventually culminating in a novel written entirely in Japanese. Within this story, photographs subtly breathe life into each chapter as illustrations, blending visual imagery with language to expand the reader's imagination and add a lingering depth to the narrative.



菊地拓児(+ 林哲／コールマイン研究室)

Takuji Kikuchi(+ Akira Hayashi / coal mine lab.)

2009年修士課程修了

炭山の光

Light of coal mine

—

インスタレーション

遮光シート、澱粉爪楊枝、蛍光灯

Installation art

Blackout sheet, starch toothpicks, fluorescent light



佐藤時啓先生と初めて会ったのも、影響を受けた作品も《Yubari》である。

夕張はかつて炭鉱町として栄えたが、人口減少が進み、財政破綻した街として知られている。炭鉱町の隆盛や炭鉱遺産に興味を持っていた私は、先生が夕張の廃坑を撮影した《Yubari》に出会ったのをきっかけに、このテーマを美術表現として昇華するようになった。

《Yubari》が、まちの歴史や失われていくものに“光”を灯したように、私は仲間と共に炭鉱町の“光”を甦らせるインスタレーションを数年かけて制作した。この作品は既に解体し存在しないが、先生との結節点として本展で展示する事にこだわった。近代を支えた産業の記憶が眠る地で、その磁場に“光”を見出す事と、不在であることによって存在を浮かび上がらせるという共通性があると考えている。

《Yubari》のような「美しく、強度のある作品」を作り続けるべく、これからも私は炭鉱町に通うつもりだ。

The first time I met Professor Tokihiro Sato and encountered the work that influenced me was through *Yubari*.

Yubari, once a thriving coal mining town, is now known for its population decline and financial collapse. I had long been fascinated by mining towns, and my encounter with Professor Sato's photograph of *Yubari*'s abandoned mines in *Yubari* inspired me to explore this theme through art.

Just as *Yubari* sheds light on the town's history and what is being lost, my colleagues and I, spent years creating an installation to revive in the hope of reviving the “light” of mining towns. Although this work was previously dismantled, I insisted on displaying it in this exhibition as a connection to Professor Sato's piece. Both works share a commonality in finding “light” in places where memories of industries that once supported society now fade away.

To continue creating works that are “beautiful and strong,” like *Yubari*, I will continue to visit coal mining towns. To me their intrinsic value is not yet lost.



全国的にも珍しい完全会員制のアートプロジェクトとして、かつての炭鉱町である北海道三笠市の廃校で長期制作した大型のインスタレーション。不夜城と呼ばれた最盛期の町の夜景をモチーフとし、同市出身で世界的に活動する美術家 川俣正氏や地元有志や大学生らと共に取り組んだもの。町が栄えていた頃の人口とほぼ同じ数の6000を超える点光でパノラマの夜景を表現した。

完成後、常設展示として事前申込制で公開していたが、建物の老朽化により2022年に解体。現在は公式ウェブサイト上にてオンラインビュー鑑賞する事が出来る。本展では作品のパノラマ写真と原理模型を展示。

This large-scale installation, part of an exclusive, members-only art project, was created over a long period in a former school building in Mikasa City, Hokkaido, a town that was once a coal mining center. Drawing from the cityscape of the coal mining towns in the Sorachi region at the height of their prosperity, when they were famously referred to as the “city of never-ending lights,” this project was undertaken with the participation of Tadashi Kawamata, a world-renowned artist from Mikasa, alongside local volunteers and university students. More than 6,000 point lights were used to create a panoramic night view, a number nearly equivalent to the town’s population at its peak.

After its completion, the installation was open to the public through a reservation-based system as a permanent exhibit. However, due to the deterioration of the building, it was dismantled in 2022. It is now available for online viewing on the official website. For this exhibition, panoramic photographs of the work and a model illustrating its underlying concept are on display.



1981年 北海道 札幌市生まれ
2003年 千葉大学工学部 都市環境システム学科 卒業
2009年 東京藝術大学 大学院美術研究科 先端芸術表現専攻 修了
2010年～現在 北海道教育大学 美術文化専攻 非常勤講師

1981 Born in Sapporo, Hokkaido, Japan
2001-2003 Chiba University, Department of Urban Environment Systems
2007-2009 Tokyo University of the Arts, Intermedia Art (Master of Fine Arts)
2010-Hokkaido University of Education, Art and Culture / Part-time Lecturer

樋口紗也香

Sayaka Higuchi

2023年修士課程修了

皺はその肉体を記憶する II

Wrinkles Remember the Body II

インスタレーション、パフォーマンス
石膏包帯、布

Installation, Performance
Plaster bandage, Clothes

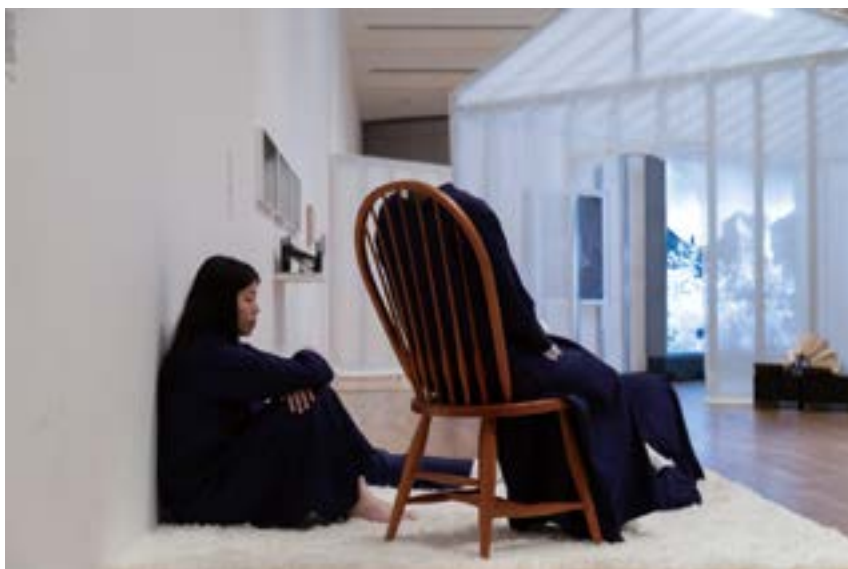


衣服の新作発表には大抵ショー形式が選ばれます。服を通して表現される姿勢や斬新さなど未知で形のない漠然とした要素と、生身のモデルという強烈なリアリティの相性が良く、抽象的なコンセプトと現在の具体的なリアリティのバランスを取ってくれるからです。

佐藤研に入る前ファッションを学んでいた私は、研究室の仲間が様々なメディアの本質に向き合っている姿を見て、モデルという現在性に頼らない中での衣服表現について考えるようになりました。衣服自体のメディア性をリサーチすることで突破口が見つかるのではと思い空洞の衣服彫刻を作り始めました。《皺はその肉体を記憶する II》は2022年度の修了制作で発表した作品のシリーズです。着る人の身体に合わせて皺が生まれたり生地が伸びていく様子を「衣服は身体の証拠」と捉え、同じ生地と型紙で作った衣服をパフォーマーの身体の形で固定し、服を着て動く人間の静止画の連続を演出しました。服を着たモデルから中身を消してみたら結果的にまた人間がパフォーマーという形で戻ってきたというのが私の佐藤研での二年間の成果です。佐藤先生を始め、メディアとそれが持つ時間の奥行きについて考えている佐藤研メンバーから受けた影響が現れている気がします。

New clothing collections are typically presented in the form of a fashion show. The combination of vague elements such as the unknown and formless ideas of attitude or novelty expressed through the clothing, and the intense reality of the live model, creates a balance between abstract concepts and the tangible reality of the present.

Before joining the Tokihiro Sato Laboratory, I studied fashion design, and while observing my lab colleagues engaging deeply with the essence of various media, I began to reflect on clothing expression without relying on the immediacy of the model. I thought that researching the medium of clothing itself might provide a breakthrough, which led me to start creating hollow clothing sculptures. "Wrinkles Remember the Body II" is a series I presented as my graduation project in 2022. I approached the creation of garments in a way that their wrinkles would form according to the body of the wearer and the fabric would stretch, seeing the clothes as "evidence of the body." I fixed the clothing, made from the same fabric and pattern, to the shape of a performer's body, and staged a continuous sequence of still images of a person wearing the clothes and moving. The process began with creating sculptures where the model was erased from the clothing, as if with an eraser. The result was the return of the human form through the addition of a performer in my graduation work, bridging the sculptural work and live performance. This series represents the culmination of my two years in the Tokihiro Sato Laboratory. I believe the influence I received from Professor Sato and my colleagues in the lab, who are concerned with media and its temporal depth, is reflected in my work.



過去と現在の緩やかな連続にシャッターを切るように、衣服を着た人体の静止画を作る。

作者の肉体と衣服を複製した立体が3体絨毯の上でくつろいでいる。そこに作者が近づき、複製たちの間に座ってじっとしたり、たまに姿勢を変えながら時を過ごす。しばらくしたのち作者は絨毯から起き上がり、その場を離れていく。空間には複製たちだけが残される。これは長い時の中の一部である人の生と、その過去と未来に横たわる死についてのシミュレーションである。

Like capturing a moment in the gradual flow between past and present, the artwork creates a still image of a clothed human body. Three life-sized replicas of the artist's body and clothing are at rest on a carpet.

The artist approaches and sits among the replicas, remaining still for some time, occasionally shifting positions as time passes. After a while, the artist rises from the carpet and leaves, leaving only the replicas behind in the space. This scene serves as a simulation of a fragment of human life within the long span of time, exploring the death that lies between the past and the future.



1997年生まれ。自分の死後に残るかもしれない人間不在の衣服に興味を持つ。身体の輪郭を物理的にも詩的にも覆う衣服の本質についてリサーチし、インスタレーションやパフォーマンス形式で作品を発表している。

Born in 1997. Higuchi has been interested in clothes without human presence that may remain after one's death. She researches the nature of clothing that physically and poetically covers the contours of the body, and presents her work in the form of installations and performances.

彭飛源

Feiyuan Peng

2024年修士課程在学中

ナイフ百本

Knives 100

—

フィルム写真、連続写真
投げナイフ、写真

Film Photography, Sequential Photography
Throwing knives, photos



佐藤先生は、私が芸術の世界に足を踏み入れて以来、最初の恩師である。彼は常に写真技術の研究や学びを、鋭い批評や温かな肯定をもって支えてくださった。私は佐藤先生の光の原理に対する情熱に常に共鳴し、共感を覚えてきた。そしてもちろん、この佐藤研究室こそが私の原点である。佐藤先生と佐藤研を決して忘れることなく生涯を送ることで、恩返しをしようと考えて久しい。これは決して単なる大言壮語ではない。

Professor Sato was my first mentor since I started working in the art industry. As always, he supported my research and study of photographic techniques, offering critiques and affirmations. I always resonated and sympathized with his passion for the principles of light, and of course this Lab is my starting point. It has been a long time since I decided to return the favor by spending the rest of my life without forgetting Professor Sato and the Sato Laboratory, and this is by no means a mere grand statement.

この秋の作品では、私の父の入った木箱に向かって100本のナイフを投げつけた。ナイフが箱に命中するたびにシャッターを切り、その100枚の写真を連続した映像としてループ再生させたものである。目の前にいる、これほどまでに憎んでいた父に対して、私はこの作品をまるで執刑のようなプロセスとして捉えていた。

しかし、実際にその写真を撮影したとき、私たちの間に満ちる明るさと喜びに驚かずにはいられなかった。太陽は輝き、馬は歩き、時折牛の鈴の音が鳴り響く中、父はいくつかの歌を挟んで漢詩を詠んでいた。

For this fall's work, I threw 100 knives at a wooden crate that contained my own father. At each moment the knives struck, I snapped a photograph, and together these 100 images were looped into a continuous sequence. With this man in front of me, whom I hated so much, I imagined this work as a process like an obsessive punishment.

Yet when I actually took the pictures, I couldn't believe the brightness and joy that flowed between us. The sun was shining, the horses were walking, and the occasional clang of a cow's bell rang out. In that moment, my father composed a Chinese poem interspersed with a few songs.



Arthur Geslin

2016年から2017年まで交換留学生として在籍 From France

記憶の影 - Security embodies

彫刻インスタレーション
石膏、銅

Installation of Sculptures
Plaster, bronze

佐藤先生のおかげで、私は東京藝術大学の鋳造工房でこの作品を作り始めた。留学生として佐藤先生の研究室で過ごした1年間で、私は遺産(ヘリテージ)の意味をじっくりと問うことができた。このテーマは、フランス文化においても、日本文化においても、とても重要なことだ。そこでは、忘却と復活が絶え間なく続いている。いわば社会的、文化的、地殻変動的な動きである。

I began creating this work in Tokyo, thanks to the trust of Professor Sato, at the Geidai foundry in Japan. During my year in Professor Sato's laboratory as an expatriate, I was able to take the time to question the very meaning of Heritage—deeply significant in both French and Japanese culture. Where forgetting and resurgence are in perpetual motion, much like social, cultural, and tectonic movements.

1993年・フランス、パリ生まれ

2016年・2017年・東京藝術大学先端芸術表現科 交換留学(佐藤時啓研究室)

2019年・パリ国立高等美術学校美術学部修士課程 修了

主な活動:

2019年・ECURIE NORD - グループ展 - サンキャトル - パリ、フランス

- S'JOIN SI PROCHE - Yoshii Gallery - パリ、フランス

2023年・DOM JUAN - ロシオ・ベレンゲルとの共作 - B.N.F Richelieu - パリ、フランス

2024年・CENDRILLON OU N'ÊTES-VOUS QU'IMAGE ET NE FAITES QUE PARAÎTRE -

シモン・エリー・ガリペールとの共同制作 - CDN ベテューヌ - ノール地域 - フランス

1993 - Born in Paris, FRANCE

2016 - 2017 - Intermedia Art Section (Tokihiko Sato's Lab) - Tokyo University of the Arts(GEIDAI)- JAPAN

2019 - M.F.A. Graduated from Beaux Arts de Paris - ENSBA - FRANCE

Activities :

2019

- ECURIE NORD - Group Show - Centquatre - Paris, FRANCE

- S'JOIN SI PROCHE - Yoshii Gallery - Paris, FRANCE

2023

- DOM JUAN - Co-creation with Rocio Berenguer - B.N.F Richelieu - Paris, FRANCE

2024

- CENDRILLON OU N'ÊTES-VOUS QU'IMAGE ET NE FAITES QUE PARAÎTRE - Co-creation with Simon Elie Galibert - CDN Béthune - Région Nord - FRANCE



-Security Embodies-

Plaster Details of the Sculpture - 1500mm × 1500mm × 1500mm - Bronze, Plaster 2024



-Security Embodies-

Bronze Details of the Sculpture - 1500mm × 1500mm × 1500mm - Bronze, Plaster 2024

ノルマンディーの畑で、農夫と遊歩者が石に対して全く異なる視点を持つ物語が展開する。穀物栽培に励む農夫にとって、毎年畑に現れる石は厄介な存在だ。農機具を傷め、作物の成長を妨げるため、彼は石を拾い集めて畑の隅に捨てる。

一方、遊歩者はこれらの石に興味を持つ。よく観察すると、一部の石が人工的に加工された形をしていることに気づいた。それらは旧石器時代の人類が作った両面石器(バイフェイス)だったのだ。両側から丁寧に加工されたこの道具は、人類が環境を制御し形作ろうとした最初の試みを象徴している。

この発見により、遊歩者はコレクターへと変貌する。彼にとって、農夫が邪魔者として捨てた石は、人類の歴史と創造性を物語る貴重な遺物となる。しかし、この価値は見る人の目によって大きく変わる。

アーティストのアーサー・ジェスリンは、この物語にインスピレーションを受け、コレクション

ンから選んだ5つの両面石器を青銅で複製している。本物と模造品の境界を探る試みである。

現代では、これらの石は様々な形に変形され、多様な用途に使われている。遊び道具、抗議の象徴、収集品、そして時には単なるがれきとして扱われる。それは同時に無であり全であり、私たちと物との複雑な関係を映し出す。

この両面石器の物語は、私たちに何を大切に、何を捨てるべきかを再考させる。そして、過去と現在を繋ぎ、遺産とアイデンティティの關係に疑問を投げかける。それは単なる石ではなく、人類の進化の証であり、価値観を問い直す鏡となる。

この物語は、物事の価値が見る人の視点によって大きく変わることを教えてくれる。それは同時に、私たちの周りにある日常的な物の中に、思いもよらない歴史や意味が隠れている可能性を示唆している。

The story of the farmer and the stroller unfolds in the fields of Normandy, where their contrasting views on stones reveal deeper themes of value, perception, and heritage. The farmer, dedicated to growing grains, sees the stones that emerge in his fields each year as nuisances. These stones damage his equipment and hinder crop growth, forcing him to tirelessly collect and discard them into a corner of his plot. For him, they are obstacles to be removed—nothing more.

The stroller, on the other hand, spends his free time wandering through the countryside near his country house surrounded by the farmer's fields. He sees these same stones differently. During his strolls, he notices some stones with ergonomic or sculptural shapes. Intrigued, he begins collecting them and eventually discovers that some are *bifaces*—ancient tools shaped by early humans during the Paleolithic era. These bifaces, worked on both sides to create sharp edges, were precursors to modern tools and represent humanity's first attempts to control and shape their environment.

The biface occupies a unique position at the intersection of nature and culture. It is both abstract and functional, embodying intention and action. To a discerning observer, it reveals the hand of its maker—a testament to human ingenuity. To others, it may appear as nothing more than a simple stone shaped by time and erosion. This duality underscores how objects can carry different meanings depending on the viewer's perspective.

As the stroller-turned-collector amasses these stones, he stores them in crates in a dark barn. To an outsider, this collection might seem nonsensical or even absurd—a pile of worthless rocks. Yet for the collector, these stones are treasures imbued with historical and cultural significance. The farmer's discarded nuisances become artifacts of technical evolution in the hands of the collector.

Part of this collection eventually finds its way into a Paleolithic museum in Normandy. Displayed under meticulous lighting, these once-overlooked stones take on an air of sacredness, highlighting their importance as relics of human history. This heritage is not only technical but also poetic, a legacy passed down through generations.

Arthur Geslin selects five bifaces from the collection of the stroller to mold into bronze replicas. Fifty bronzes are created in total, patinated to resemble real stones. Bronze serves as a material that bridges authenticity and reproduction—used for noble sculpture yet often associated with imitation.

Today, these stones take on new forms—in plaster clusters, as guardrails or projectiles. They serve for play or protest, collection or discard. They are simultaneously nothing and everything: a canvas for dreams or a path to forgetting. In this duality, they mirror our own complex relationship with the objects that surround us, challenging us to reconsider what we value and why.

This narrative invites reflection on how we assign meaning to objects and interact with our environment. The bifaces challenge us to rethink what we treasure or discard while bridging past and present to question our relationship with heritage and identity.

横山渚

Nagisa Yokoyama

2024年修士課程修了

能登、輪島

Noto, Wajima

写真に刺繍

ピグメントプリント、刺繍糸

Embroidery on Photograph

Pigment Print, Embroidery Thread



今回、佐藤先生の退任展に出展するにあたって、佐藤先生のシリーズ《光-呼吸》を参照して、写真の中に実在しないラインを引く作業をモチーフに制作を行なった。

私が制作を始めたきっかけは、東日本大震災だった。埋立地で被災した体験をベースに、ひとが形作ってきた土地や風景に興味を持って制作を続けてきた。佐藤先生も東北の出身であったことから、八戸や宮城県立美術館など、被災した地域へどのようにアプローチできるかを模索されてきたように思う。先生のその背中を見ながら、能登にできることは何か、考えていければと思っている。

In exhibiting at Professor Sato's retirement exhibition, I used his series *Photo-Respiration* as a motif for drawing non-existent lines in my photographs. The catalyst for my work was the Great East Japan Earthquake shaped by my experience of living in a reclaimed land. I have long been interested in both natural landscapes and those shaped by human activity. Since Mr. Sato is also from the Tohoku region, he has visited Hachinohe, the Miyagi Prefectural Museum of Art, and the surrounding areas. I believe he has been seeking ways to engage with the disaster-affected regions. I hope to follow his lead and think about what I can do for Noto while learning from his example.



2024年の10月に私は能登に向かった。私がボランティアに行った輪島市では、2024年1月1日の地震被害に加え、2024年9月21日の記録的豪雨によって多くの人的・家屋被害を受けている。しかし、能登全体でボランティア頼りでの作業が進められ、復興には3～5年かかるとされている。

今作では、現地で撮影した写真に、手作業で大地と、大地から生えるラインを縫い込む作業を行っている。ラインを縫い込む作業は、ひとが自然との攻防の中で形作ってきた土地を、建て直していくようなイメージで制作を行なった。

In October 2024, I headed to Noto. In Wajima City, where I volunteered, there was significant damage caused not only by the earthquake on January 1, 2024, but also by the record-breaking torrential rains on September 21, 2024, which resulted in considerable loss of life and property. However, the entire Noto area is relying on volunteers to carry out the recovery efforts, and it is estimated that it will take 3 to 5 years to fully recover.

In this work, the artist is manually stitching lines growing out of the earth and the earth itself into the photographs taken in the area. The process of stitching in the lines was inspired by the image of rebuilding the land that people have shaped through their struggle and coexistence with nature.



「猫の住処になった家屋」

“House that became a cat’s home”

「傾いたビル」

“Tilted Building”

「家」
“House”

1997年生まれ。埋立地で育ち、東日本大震災の際に発生した液状化現象の被害にあった経験から、場所をつくることや、場所に干渉していくこと、場所をとらえ直すことについて関心を持っている。

Born in 1997. Having grown up in reclaimed land and having experienced the liquefaction that occurred during the Great East Japan Earthquake, he is interested in creating places, interfering with spaces, and recapturing lost land.

林煜涵

Lin Yuhan

2022年修士課程修了

850nm

—

写真

インクジェットプリント

Photography

Inkjet print





佐藤先生が長時間露光を用いて光の軌跡を探求する中で、光と時間の流れを可視化する作品に深く影響を受けました。私はこの影響を受け、防犯カメラが発する目に見えない赤外線を使い、機械的な視点を強調した作品を制作しました。

カメラは特定の赤外線のみを捉えるように改造されており、人感センサーによって自動的にシャッターが切られる仕組みになっています。このプロセスの中で、私は撮影操作をせず、カメラ自体に「視覚」を委ねる形となっています。

機械の視点を通して人間の存在を捉え、視覚のループに挑戦する作品を生み出しました。

人間の視覚を超えた新たな視点を提示する試みは、佐藤研究室での技術的な探求や視覚に対する洞察から生まれたものです。

While exploring the trajectory of light using long exposure, Professor Sato was strongly influenced by works that visualize the flow of light and time, and used invisible infrared rays emitted by security cameras. Inspired by his technical skill, I created a piece that emphasizes a mechanical perspective.

The camera has been modified to capture only specific infrared rays, and the shutter is automatically released by a motion sensor. In this process, I don't control the shooting, but instead rely on the camera itself to control its vision. I created a piece that captures the existence of humans through the eyes of a machine and challenges the visual loop.

The attempt to present a new perspective that goes beyond human vision was born from technical exploration and insight into vision at Sato Lab.

髓 良彦

Yoshihiko Zui

2014年修士課程修了

「奪われたとき、ゆくとき、」

When it is stolen, when it is gone,

—

写真

鉄、骨、血、吹雪

Photograph

Steel, bones, blood, snowstorm



今回、私が展示するトリプティックの作品(中央:コンストラクテッドフォト、両サイド:風景写真)は、学部から大学院へかけて、佐藤先生と面談し様々なアドバイスを受けて作られたスタイルです。

学部時代に、なかなか展示のイメージが固まらない私に対して、佐藤先生がトリプティックでの写真構成を提案して下さいました。

また、両サイドに展示する風景写真(モノクロとカラーを混在させたモノ)を成立させられる様になったのも、モノクロ写真を撮っていた頃、焼き方や展示方法を佐藤先生に教えて頂いたのち、取手校舎の暗室にて試行錯誤を繰り返し暗室技術を身に着けました。

こういった、ステップを経て私の作品は形作られて行きました。

The triptych I am exhibiting at this time (center: constructed photo, both sides: landscape photographs) is a style developed through discussions with Professor Sato, during which I received various pieces of advice, spanning from my undergraduate years through graduate school.

During my undergraduate years, when I was struggling to solidify my exhibition concept, Professor Sato suggested composing my photographs as a triptych.

Furthermore, my ability to create the landscape photographs displayed on either side—blending both monochrome and color—was shaped by my experience with black-and-white photographs. After receiving guidance from Professor Sato on printing techniques and exhibition methods, I repeatedly experimented in the darkroom at the Toride campus, honing my film development skills and techniques.

Through these steps, my work gradually took shape.



私が作品の中で行っている事は人間探求です。
この膨大かつ曖昧模糊としたテーマに対して取り組むにあたり、自己の経験を元に社会的病巣に切り込んで行く事としました。人間の構造を読み解くにあたり、犠牲となるもの(Sacrifice)を鍵として用いることにしました。

普遍的な人間像(それは、存在し得ないと知りつつも)を浮き彫りにしようとしています。

制作段階ではメタ言語もしくは無意識の領域でイメージからイメージを派生させ思考して行きます。その最終段階に踏み込んだ瞬間、脳内で絶えず変化していた断片が一つの風景として固定されます。そのイメージは私の根底から汲み取られたものであり、自己の文脈のみならず外界(社会的、民族的)文脈を内包しています。その写真に対して記号を隠喩として埋め込んで行く事で解釈可能な自己の領域に留まらないもの、鑑賞者また外界にたいして開けた表現を志しています。

Ultimately, this work explores the nature of humanity.

In tackling this vast and ambiguous theme, I have chosen to delve into the social maladies that I have encountered through my lifetime.

In deciphering the structure of humanity, I have decided to use sacrifice as a key element.

I seek to reveal a universal image of humanity—the existence of which remains ineffable.

During the creation process, I develop my ideas by deriving images from images, thinking within a meta-linguistic or subconscious realm. The moment I step into the final stage, the ever-shifting fragments in my mind crystallize into a single landscape. This image is drawn from the depths of my being, containing not only my personal context but also external (social and ethnic) narratives. By embedding symbols as metaphors within the photograph, I aim to create an expression that extends beyond my own interpretable domain—one that remains open to the viewer and the world beyond.



私は、コンストラクテッドフォトと風景写真を同時に制作する事により、自己と外界を対比させつつも、それを同軸上に展開する表現をしています。

I create constructed photographs and landscape photographs at the same time, expressing the relationship between the self and the outside world.

鈴木のぞみ

Nozomi Suzuki

2022年博士課程修了

Trace of the Light (部分)

Trace of the Light (a Part of the Whole)



私は日常にある光の諸現象を通して、事物の持つ記憶を写真で可視化したいと考えています。以前は絵画を描いていましたが、キャンバスを支持体に油絵具で描くという伝統的なメディアではなく、自分にとってよりリアリティのある素材は何であるか探求するなかで、事物を支持体とし、その事物が持つ記憶を可視化したいと考える様になりました。そこから、私自身の絵筆を介して像を描く絵画ではなく、指標的にイメージを現出する写真へと関心が移り、写真を用いた制作を独学ではじめました。本格的に写真を学ぶため大学院に進学し、佐藤先生の研究室に所属しました。佐藤先生には写真の基礎から感光乳剤の定着方法など、多くのことを学びました。修士課程から博士課程までの在籍期間を通して、佐藤先生が飽くなき探究心からさまざまな写真原理を用いて像を現出される姿勢と、研究室の持つ寛容かつ多様でポジティブな精神から大いに刺激を受けました。

I aim to visualize the memories embedded in objects through various phenomena of light found in everyday life. I initially painted using oil paints on canvas, a traditional medium. However, as I sought materials that felt more natural to me, I began to view objects themselves as supports and sought to make their ingrained memories visible. This shift led me away from painting images with my brush toward photography, which allows images to emerge indexically. I started working with photography as a self-taught artist.

To pursue a deeper understanding of photography, I enrolled in graduate school and joined Professor Sato's laboratory. Under his guidance, I learned the fundamentals of photography, including techniques for fixing photosensitive emulsions. Throughout my time in the master's and doctoral programs, I was profoundly influenced by Professor Sato's relentless curiosity and his approach to manifesting images through various photographic principles. The laboratory's open, diverse, and positive atmosphere also greatly inspired me.



私は写真の原理を用いて事物に宿る潜像のようなイメージの顕在化を試みています。潜像とは、露光によって写真感光層に生じているけれど、現像するまでは目に見えない像を指す写真用語です。そのような潜像は、私達の身近な事物のそこかしこに見出すことができます。例えば、事物に穿たれた穴に生じている小穴投影現象による倒立像、光により投げ出される影、鏡が反射する光、窓ガラスが透過する光、レンズが屈折する光などの現象です。私はこれらの物理的現象により、私達の日常に見出すことが可能な事物に潜在する像を〈事物の記憶〉と捉え、事物の眼差しについて思索しています。

私は主に窓や鏡、レンズなどのガラスを支持体とし、感光剤を事物に塗布することでイメージを直接定着し、そこにかつて存在していた光景を可視化する手法を用いています。

《Trace of the Light》は、解体前の民家の庭に面した4組の窓ガラスに写真乳剤を直接塗布し、窓をピンホールカメラで覆うことで、1週間の長時間露光による庭のネガ像を窓ガラス自体に定着した作品のうちの1組です。太陽の光が昇っては沈んでいく時間の流れを、光の痕跡として焼き付けています。建物の記憶に刻まれたイメージは、現在において観る者と共有されます。

I attempt to reveal latent images inherent in objects by utilizing photographic principles. In photographic terminology, a “latent image” refers to an image formed on a photosensitive layer through exposure to light, which remains invisible until developed. Such latent images can be found in various aspects of our everyday surroundings. Examples include inverted images produced by the pinhole projection phenomenon, shadows cast by light, reflections in mirrors, light transmitted through window glass, and light refracted by lenses. Through these physical phenomena, I interpret the latent images present in familiar objects as “memories of things” and explore the gaze of objects.

I primarily use glass surfaces such as windows, mirrors, and lenses as substrates. By applying a photosensitive emulsion directly onto objects, I fix images onto their surfaces, visualizing the scenes that once existed there.

Trace of the Light is one of a series of works where I applied a photographic emulsion directly onto four sets of windowpanes facing the garden of a house slated for demolition. By covering the windows with a pinhole camera and exposing them for a week, I captured negative images of the garden directly on the glass. This work records the passage of time through the rising and setting of the sun, inscribing the traces of light onto the window surface. An image embedded in the building's memory, now shared with the viewer.

1983年埼玉県生まれ。2022年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。2016年VOCA奨励賞受賞。2018年度ポーラ美術振興財団在外研修員(イギリス)。作品は東京都写真美術館、アーツ前橋などに収蔵されている。

Born 1983, Saitama. In 2022, she completed a doctoral degree at the Graduate School of Fine Arts at Tokyo University of the Arts. Suzuki received an Encouragement Award in the VOCA 2016 exhibition. In 2018, she was awarded a Pola Art Foundation grant to study in England. Her works have been collected by the Tokyo Photographic Art Museum, Arts Maebashi, among others.

李佳璐

Li Jialu

2023年修士課程修了

顔メーカー

face generator

—
インスタレーション

レーザーカット、アクリル絵具

Installation art

Laser cutting in English, acrylic painting

佐藤先生の作品は、写真の原理に基づきながら、不思議な小道具を用いることで、現実には存在しないイメージを生み出している。佐藤先生と私は、表現手法は異なるが版画の制作過程における「ズレ」を活かした作品を制作して、現実には存在しないイメージを追い求めているところに共通している部分を感じる。また、佐藤時啓研究室では1つの共同体としての一体感があった。私たちは頻繁にワークショップを開催し、更にかき氷やピザを販売するショップを運営していた。

こうした研究室での経験を通じて、人と人とのつながりに焦点を当て、自身の作品においても参加型の要素をより強くしたいという思いが生まれた。作品では、来場者の顔に変化をもたらすことで、作品のインタラクティブ性を強調することを目指した。

Professor Sato's work creates images that do not exist in reality by utilizing slightly unconventional props based on the principles of photographic manipulation. Although my chosen medium differs, I also create works that make use of the characteristic of "discrepancy" in the printmaking process. Additionally, in Tokihiro Sato Laboratory, there was a shared sense of community. We often hosted workshops and ran stalls selling items like shaved ice and pizza.

From these experiences, came the desire to focus on the connections between people and enhance the sense of participation in my own work. For this project, I aimed to emphasize participation by creating a project that brings transformations to the faces of participants themselves.



この作品は、オンラインやビデオゲーム上で見られるアバター生成ツールから着想を得た。そのツールの多くは、自分の好みに応じてイメージやキャラクターを自由に作成できる。現実の外見とは異なり、この仮想の外見は自らが選択したもの、つまり意識的な選択の結果である。それは私たちの意識の特徴をより正確に反映しているとも言える。仮想世界が進化する現代において、リアルとバーチャルの境界はますます曖昧になりつつある。こうしたカスタマイズされた仮想の外見は、将来的には「本当の自分」としてのアイデンティティとなる可能性がある。作品では、パーツの展示と選択可能なパーツによって構成されている。目や口、鼻といったパーツを自由に組み合わせ、自由に独自の顔を作り出すことができる。

さらに、この顔は自分自身の一部であるかのように感じられ、現実と仮想世界の境界が曖昧になる体験ができる。

This work was inspired by a range of face generation and customization tools found online. On video games. These programs allow you to customize and generate images or characters to your liking. Unlike our real appearance, this virtual appearance is something we choose ourselves, a result of our conscious selection. It reflects more accurately the characteristics of our consciousness. In an era where the virtual world is evolving, the distinction between virtual and real is becoming increasingly difficult to discern, and this personalized virtual appearance may become a real identity in the future. This work is divided into a display section and selectable parts, allowing you to take features like eyes, mouth, and nose that you like and create your own unique face without limitations.

Moreover, this face can feel like a part of yourself, enabling an experience of the blurring of the boundaries between reality and the virtual world.



パーツを顔メーカーに装着し、顔が自分の好みに合わせて生成される。

Parts are attached to a face maker, and the face is generated according to one's preferences.

版画やミクストメディアを中心に制作をしている。2018年に中国美术学院版画専攻を卒業し、2023年に東京藝術大学先端芸術表現科佐藤時啓研究室を修了。身体の異常とメディアのズレをテーマに制作をしている。

I mainly create prints and mixed media works. I graduated from the Printmaking Department of China Academy of Art in 2018 and completed my studies in 2023 at the Intermedia-Art Department, Sato Tokiaki Laboratory, Tokyo University of the Arts. My work focuses on themes of bodily anomalies and media discrepancies.

David Meran

2016年交換留学生として在籍 From Austria

1,38 g/cm³ vs. 2,62 – 2,84 g/cm³

彫刻、オブジェアート
大理石、寿司箱(21.4 × 14 × 5 cm)2016年
Sculpture, Object Art
Marble, Japanese Sushi-Box (21.4 × 14 × 5 cm) 2016



2016年、私はオーストリアのウィーンから日本へ渡り、交換留学生として佐藤研究室に参加しました。日本とオーストリアは共に、芸術、科学、技術のいずれにおいても、精度・職人技・革新性を重視しています。この共通の文化的価値が、私の作品と佐藤研究室での研究との間で興味深いコラボレーションを生み出す助けとなりました。

東京藝術大学の革新的で最先端の取り組みを行っている環境は、私の制作に深いインスピレーションを与えてくれました。そこで私は、パッケージと日常的な空間性をテーマとする作品に取り組むようになりました。大理石を彫刻し、規格化された容積のパッケージを制作することで、物質性の逆転やデジタル化のプロセスにおけるオブジェクトの価値の再解釈を探究しました。私の作品と研究室での研究が融合することで、学際的なアプローチの利点が強調されました。

私たちの身の周りにある日常的なオブジェクトは、一見すると平凡に思えますが、実際にはその形や芸術的な質において非常に魅力的であることに気づきます。また、「触れる」という体験も非常に重要であり、触れたいような物や素材がある一方で、逆に触れることをためらわせるものもあります。このような直接的な体験の瞬間こそが、私の芸術実践において決定的な役割を果たします。

佐藤先生と佐藤研究室との共同作業は、互いにとって有益な経験でした。彼らの芸術的な研究や制作に関する微妙なニュアンスについて多くを学ぶことができましたし、同時に私の作品が彼らにとって、新たな視点や表現方法を考えるきっかけとなったことを願っています。

In 2016, I came from Vienna, Austria, to participate in an exchange program at the Sato's lab in Japan. Both Japan and Austria place great value on precision, craftsmanship, and innovation, whether in the arts, sciences, or technology. This shared cultural value fostered an interesting collaboration between my work and the research conducted at Professor Sato's lab.

The environment at Tokyo University of the Arts, with its innovative and cutting-edge approach, served as a profound source of inspiration for my production. As a result, I began working within the context of packaging and everyday spatiality. I created a package with a standardized volume carved out of marble, which marked the starting point for exploring the reversal of materiality and the re-codification of object valence in relation to digitization processes. This integration of my work with the lab's research emphasized the advantages of an interdisciplinary approach.

Everyday objects that surround us may seem banal at first glance, but they are truly fascinating in their form and artistic quality. The experience of contact is also of great importance—objects and materials that evoke the desire to be touched, and vice versa. The moment of immediate experience is decisive for my artistic practice.

Working with Professor Sato and the Sato Lab was a mutually enriching experience. I learned a great deal about the nuances of their artistic research and production, and in turn, I hope my work offered new perspectives on how to present and consider the impact of their work.



私にとって、芸術作品には二つの要素が必要だと考えています。ひとつは、作品に最初に触れたときに生じる感情的な側面、もうひとつは、その背後にある文脈や理論的背景です。また、「この両方は本当に必要なのか?」「これらの概念をどのように参加者に伝えることができるのか?」といった問いも、重要なテーマとなります。

そのため、私の作品は深く考え抜かれたものでありながら、同時に偶然性の要素も内包しています。

For me, an artwork should possess two qualities, on the one hand the emotional level alongside the initial blunt contact, and on the other hand, the context and theoretical background. Furthermore, there are questions such as *Do we need both?* and *How can you convey these ideas to the participants?*

Consequently, my work is very thought-out but also allows for a moment of chance.

デビッド・メランはビジュアルアーティストであり、編集者、アートメディエーターである。1991年、オーストリア生まれ。ウィーン在住。

David Meran is a visual artist, editor and art mediator.
Born 1991 in Austria. Currently lives and works in Vienna.

小野寛志

Kanji Ono

2021年修士課程修了

—

リベンジ!! 奥ヒマラヤ巡礼
Revenge!! Deep Himalaya Pilgrimage

ドキュメンタリー映像
プロジェクター

Documentary Video
Projector



この研究室を目指したきっかけは、佐藤先生作品にはどこことなく「旅」の雰囲気があり、山岳部の顧問もされているということで何となく親しみを持ったからである。佐藤先生の最も有名な作品は長時間露光と手鏡を利用したモノクロ写真であるが、その静的な画面とは裏腹に存分に身体性をを用いた動的な制作風景が印象に残っている。「旅」をしたいという欲求と作品の表現にはきっと有機的な繋がりがあるのだろうと感じている。

私の大学院修士課程の研究テーマは「芸術」と「探検」の融合であった。最終的に修了制作は《明日の津波》という作品になった。津波予測データを元に未来の津波の目線をドローンで空撮するという映像作品である。20000kmを超える車中泊旅をしながら、メディアを用いて新しい視点を社会に提案するという点で、探検的意味はあったと思っている。また、芸術としてはどうだったかというと、初めて作家として展示に招待してもらうことができたという点で、少なくとも芸術だと思ってくれる人がいたと言える。これも過酷ながら最後の青春の旅であった。

旅をしたいという渴望を原動力とし、芸術や探検を言い訳にメディアで表現するという点で、良くも悪くも私はあまり変わっていない。私のような人間を受け入れてくれて感謝している。

The reason why I decided to visit this laboratory was because his works have a somewhat “journey-like” atmosphere, and I was somewhat familiar with him as he is also the advisor of the mountaineering club. His most famous works are black-and-white photographs using long exposures and hand mirrors, but despite the static nature of his images, I was impressed by his dynamic production scenes that fully utilize his physicality. I feel that there must be an organic connection between the desire to “journey” and the expression of his works.

The theme of my master’s research was the fusion of “art” and “exploration”. My final project was a work titled *Tsunami of Tomorrow*. I think it was a meaningful exploration in that I used the media to propose a new perspective to society while traveling over 20,000 km in my car. As for the artistic aspect of the project, the fact that I was invited to participate in an exhibition as an artist for the first time, made me realize that there were people who recognized my work as art. This was also the last, albeit grueling, journey of my youth.

For better or worse, I have not changed much in that I am motivated by a thirst to travel and use art and exploration as an excuse to express myself in the media. I am grateful to the lab for accepting someone like me.



ヒマラヤの奥深く、ネパール連邦北西部にドルポと言う地域がある。5000m級の峠に囲まれ、アジア最後の秘境と言われるこの地には、今もチベット文化が色濃く残っている。水晶山の麓、シェイゴンパ(寺院)では、800年続くチベット仏教の巡礼祭が12年に1度開催されている。普段は放牧地となっている標高4350mの寺院を目指し、数千人のチベット仏教徒が5000m級の峠をいくつも越える巡礼の旅。巡礼祭は一週間に渡り開催され、宗教・娯楽・医療を兼ね備えた地域最大のイベントである。果たして、今もこの祭は彼らにとって以前と変わらぬ意味を持っているのだろうか？探検部を通じて「巡礼」を一つのテーマとしてきた私にとって、またとない機会である。今回は武蔵美時代の教授、関野吉晴氏の紹介によりグルン族の家族に取材・同行させてもらえることとなった。この地へは以前探検部で訪れたことがあるが、あらゆる点でひどい失敗をした苦い思い出がある。だから、私にとってはこの巡礼はリベンジとしての意味も含まれている。私の「旅をしたい」という欲求は未だ尽きること無く、再びカメラを手にして巡礼へと旅立った。

Deep in the Himalayas, in the northwestern part of Nepal, there is a region called Dolpo, surrounded by 5,000-meter-high mountain passes and said to be one of the last unexplored regions in Asia, where Tibetan culture still remains strong. At the foot of Crystal Mountain, Shey Gumpa (a temple) hosts an 800-year-old Tibetan Buddhist pilgrimage festival once every 12 years. Thousands of Tibetan Buddhists make the pilgrimage over a series of 5,000-meter-high mountain passes to reach the temple, which is usually used as grazing land at an altitude of 4,350 meters. The pilgrimage festival, which lasts a week, is the largest event of its kind in the region, combining religion, entertainment, and medicine. Does this festival still hold the same meaning for them today as it did in the past? This is a unique opportunity for me, as I have been focusing on "pilgrimage" as one of my themes through the Exploration Club. Through an introduction by my former professor at Musashino Art University, Yoshiharu Sekino, I was able to interview and accompany a Gurung family. I had visited this area before with the Exploration Club, but I have bitter memories of making terrible mistakes in every respect. Therefore, for me, this pilgrimage also represented a renewed challenge. My desire to travel has yet to fade, so I picked up my camera once again and set off on my pilgrimage.

私のアイデンティティは探検部にあった。香川から上京、油絵学科に進学したのは良いものの、椅子に長時間座れない上に、机に長時間向かえない上、美術の文脈にも興味が無かった。やがて探検部に出会い、私の絵筆はカメラとなりキャンバスは現実へと開かれた。

My identity was in the exploration club. Although I moved from Kagawa to Tokyo and entered the oil painting department, I could not sit at a desk for long periods of time and had no interest in the context of art. Eventually, I met the exploration club, and my paintbrush became a camera, and the canvas was opened to the world.

門馬さくら

Sakura Momma

2022年修士課程修了

Stitching into Skin

キルンキャスト
ガラス

Kiln Cast
Glass

佐藤研究室では毎学期ごとに自己紹介プレゼンがありました。

新しいメンバーが加わる度に研究室全員の自己紹介プレゼンが行われるため、繰り返していると自分が考えていることが明瞭になっていく感覚がありました。

自分が何に興味があり、何を表現しているのかをスライドにまとめて発表するのは、プレゼンのやり方を学ぶ機会であり、自分の制作における現在地を知る機会でもありました。

今まで刺繍の縫うという行為に着目して、布で作品制作を続けてきました。今回は布ではなくガラスという半永久的に残る素材にすることで、縫うという行為のみを抽出することを試みました。

実際にタトゥーをしている人の実寸大のデザインを刺繍し、その痕跡・痛みを体と共にガラスに残しました。

自分の表現活動を言語化し、見つめ直し、発展させる、というのは佐藤研にいた時に培われたものです。そうして得たものが、新たな素材で発表するきっかけとなりました。

At the Tokihiro Sato Laboratory, we had self-introduction presentations every semester.

Whenever new members joined, all laboratory members would introduce themselves through presentations. Repeating this process over time helped me refine my thinking.

Summarizing my interests and artistic expression into slides and presenting them was not only an opportunity to learn how to give a presentation but also a chance to assess my current position in my creative practice.

Until now, I have focused on the act of stitching in embroidery and have continued creating works using fabric. This time, I attempted to extract the act of stitching itself by using glass—a material that remains semi-permanent—instead of fabric.

I embroidered a life-size design based on an actual tattooed individual, preserving its traces and the sensation of pain together with the body in glass.

The process of verbalizing, re-examining, and developing my artistic expression was something I cultivated during my time at the Sato Laboratory. The insights I gained there led me to explore a new material for my work.



縫うということは手の痕跡を残すこと
何度縫い重ねても絶対にその手の跡は消えるこ
となく厚みとなって残る
糸をどこで変えたのか、どの順番で縫ったのか、
順々にほどこしていけば全て分かる
刺繍ほど明確に、その時間や行為の蓄積を残す
ことができるものはないと思う

佐藤時啓先生作「光一呼吸」に無数に存在する光
は、人がそこに存在し生きていた、「生」の痕跡

タトゥーは他の身体装飾行為と大きく異なる
肉体の消滅と共に跡形もなく消える

「生」の痕跡を、縫う行為を通してガラスに残した

To sew is to leave traces of the hand.

No matter how many times you sew over the
same spot, the marks of the hand never disappear,
instead they remain as layers of thickness.

If you unravel the stitches one by one, you can
see where the threads were changed and in what
order they were stitched.

I don't think there is anything that can preserve
the accumulation of time and action as clearly as
embroidery.

The countless lights in Professor Sato's *Photo-Respiration* are the traces of "life", of a person
who existed and lived in a specific time and
space.

Tattoos are very different from other forms of
body decoration. They disappear without a trace
with the disappearance of the body.

Similarly, in my work the trace of "life" was left
on the glass through the act of stitching.



Stitching into Skin

400mm×270mm×90mm

Kiln Cast

Glass

2024

1995年東京都生まれ。2017年に武蔵野美術大学工芸工業デザイン学科テキスタイル専攻を卒業後、パリのエコール・ルサージュにて刺繍を学ぶ。2022年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。

Sakura was born in Tokyo in 1995 and is currently residing there. After graduating in 2017 from the Department of Crafts and Industrial Design at Musashino Art University with a major in Textile Design, she studied embroidery at École Lesage in Paris. In 2022, she completed a master's degree at the Department of Inter Media Art, Graduate School of Fine Arts, Tokyo University of the Art.

宮寄ユニカ

Unica Miyazaki

2023年修士課程修了

会話の後ろ側

Behind the conversion

—
インスタレーション
プロジェクター、木材、網

Installation
Projector, wood, net



今回私は、自分の過去の作品とライフワークにしている漫画について考えた。自分でもよくわからないのだが在学中漫画家としても活動していたが、「インスタレーション作品」と「漫画」を一緒に考える事が出来なかった。しかし、卒業してからも佐藤先生から漫画についてご連絡をいただく機会などもあり、自分が思うより、自分にとって漫画という要素が大きかった事を知る事ができた。

この展示に参加するにあたり、過去作品で行ってきた記憶の表現（レイヤー状の構成・感覚）が漫画における吹き出しの表現と似ている事に気付いた。

佐藤先生が話してくれた漫画の話題、そして今回の展示への参加が、切り離していた作品同士が結びつくきっかけになった。

In this piece, I reflected on my past works and the manga which has become an essential part of my artistic journey. Although I was active as a manga artist during my studies, it was unclear to me how I could connect my “installation works” with manga artwork. After graduation, I continued corresponding with Professor Sato about manga, and through this, I realized that manga had a greater influence on me than I had initially realized.

While preparing for this exhibition, I noticed that the way I expressed memory—through layered structures and sensations—was similar to the use of speech bubbles in manga.

The conversations with Professor Sato and my participation in this exhibition helped bring together works I had previously kept separate.



この作品は記憶のレイヤーに関する作品である。

在学時の私の作品は、日常の様子を壁に投影しつつ、プロジェクターと壁の間に網を設置。そしてその網に、その日常の中にある見過ごせない動きをなぞる様にドローイングした。ドローイングに堰き止められるその動きは脳裏にこびりつく微かな記憶として、壁へとすり抜けていった残りの映像は忘れ去られていく記憶として表現した。

このように記憶の濃淡がレイヤーとして表現されていたが、それに似た構造が漫画にも見出された。漫画の世界にはセリフの吹き出しが欠かせない。その吹き出しを追っていく事で一つの物語が完成するからだ。しかしその吹き出しは背後の風景や群衆を隠してしまう。一つの会話への集中が他の会話を文字通り背景レイヤーにしてしまう。私たちはいくつもの会話の裏側で、または誰かを隠して会話をし合っているのである。

This work explores the layering of memories.

During my time as a student I projected everyday scenes onto a wall, while placing a net between the projector and the wall. I then drew on that net, tracing the movements within these daily moments that might otherwise get overlooked. The movements captured in the drawings remained as faint memories in my mind, while the remaining images that slipped through to the wall represent forgotten memories.

In this way, the intensity of memory was represented as layers, and a similar structure can also be found in comics. In the world of comics, speech bubbles are indispensable because following these bubbles completes a narrative. However, these speech bubbles conceal the background scenery or crowds. Focusing on one conversation inevitably turns other conversations into background noise.

Similarly, when we direct our attention to a particular layer of communication, we inevitably overlook or obscure others. In the same way, our own speech and presence can become mere background noise for those around us.

東京出身 インドと日本のハーフ

2020年 武蔵野美術大学彫刻科卒業

2023年 東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了

プロジェクターを用いて記憶、諸行無常をテーマにインスタレーション作品を制作。

漫画家としても活動。『マダムが教えてくれたこと』1〜2巻出版

India-Japanese mix

Born in Tokyo, Japan

2020 Musashino Art University (BA. in Sculpture)

2023 Tokyo University of the Arts (MA. in Fine Arts)

Studied in Sato Lab from 2021 to 2023

Created installations using projectors on the theme of memory and the impermanence of all things.

Also works as a manga artist. Published *What Madam Taught Me* Vol. 1 and 2.

山本千愛

Chiaki Yamamoto

2024年修士課程在学中

1 外国人としての私たち

1 Us as foreigners

2 Untitled;Direction

—

ビデオ

Video



私は研究室を選ぶときの面談で、佐藤先生が最も私の作品を楽しんでくれている先生だったので佐藤研に入りました。

八戸の佐藤先生の個展で制作の裏側を見る機会があり、無茶苦茶に体力を消耗しながら無尽蔵に駆け回ったり、長時間じっと撮影する先生の姿をみてあのときの面談に合点がきました。

今回出品している2つの作品は8×8でも展示しました。ひとつは指揮者に東京の数カ所で周りの環境に合わせて指揮をしてもらう作品、もうひとつは私が留学した際に制作した、ウィーンに住む外国人とベルリンに住む外国人の人たちと共に私も外国人として自分の母国語だけを使って会話を試みる作品です。コントロールの可否や危うさ、境界がぼやけること、いつでも自分自身に起こりうるという点で2点とも共通しています。

佐藤先生には良き理解者として並走いただきました。これからも作品を作り続ける延長線上でまた先生と語り合えることが楽しみです。

I chose Professor Sato's lab because, during my interview, he was the one who expressed the most avid interest in my work.

At his solo exhibition in Hachinohe, I saw the intense physical effort behind his process—running tirelessly and standing still for hours to shoot. At that moment, I saw a connection between his process and my own work.

The two pieces I'm exhibiting here were also shown at 8×8. One features a conductor adapting to different environments across Tokyo. The other, created while studying abroad, explores conversations where foreigners residing in Vienna and Berlin, myself included, spoke only in our native languages. Both pieces deal with control, instability, and blurred boundaries—things that can happen to anyone.

Professor Sato has been a great supporter, walking alongside me in this journey. I look forward to more conversations with him as I continue creating.

1. ウィーンとベルリンに外国籍として暮らす外国人同士で、お互いが母国語を使って会話を試みる。このビデオを見るオーディエンスのほとんどが、どちらかの発する言語の知識がない限り会話の内容を全ては理解できない。会話のプレイヤーとオーディエンスは、どちらも「分からない」という意味では対等なはずが、どちらの言語も分からない人々にとっては、まるで会話が成立しているようにも見える。

2. 指揮者を外に連れ出し、人やものの動き、あるいは環境音に対して指揮をしてもらう。我々の行動は本当に本人の自由意志で動いているのだろうか。コントロールしているのかされているのかの境界が曖昧になっていく。そして指揮者自身も本来の環境をひとたび離れると、その効力を失う。環境に動かされるようになる。指揮者の役割が反転されていくようにも見える。また、指揮者の視界の外側に指揮者はコントロールす

ることができない。指揮や統率にはある一定の方向にしか力が働かないようである。コントロールはある一定のルールや環境の中でしかその効力を保つことができないことを示唆している。ビデオに映る指揮者に対して鑑賞者が抱く感情は、他人事ではないのかもしれない。



1995年 群馬生まれ
パブリックコレクション 群馬県立近代美術館
2021年 群馬青年ビエンナーレ大賞受賞
2020年 TOKYO MIDTOWN AWARD2020 優秀賞受賞

1995 Born in Gunma
Public collection Gunma Museum of Modern Art
2021 Gunma Youth Biennale Grand Prize
2020 TOKYO MIDTOWN AWARD2020 Excellent Prize

Left:
Two foreigners, one in Vienna and the other in Berlin, converse in their native languages. For viewers unfamiliar with either language, the content remains largely incomprehensible. However, an interesting paradox emerges: for those who understand neither, the interaction may appear coherent, as though true communication is happening. This dynamic illustrates how the perception of understanding can emerge even amidst linguistic ambiguity, leaving participants and observers in a seemingly equal state of “not knowing.”

Right:
A conductor is taken outdoors to direct the movements of people, objects, or environmental sounds. This challenges the idea of free will, as the boundary between controlling and being controlled becomes unclear. Outside their usual context, the conductor's authority fades, giving way to the power exerted by the environment. Their inability to control what lies beyond their sight highlights the limits of influence, suggesting that control only works within certain rules or conditions. This shift in roles invites viewers to reflect on their own experiences with power and autonomy.

栗山 齊

Hitoshi Kuriyama

2011年博士後期課程修了

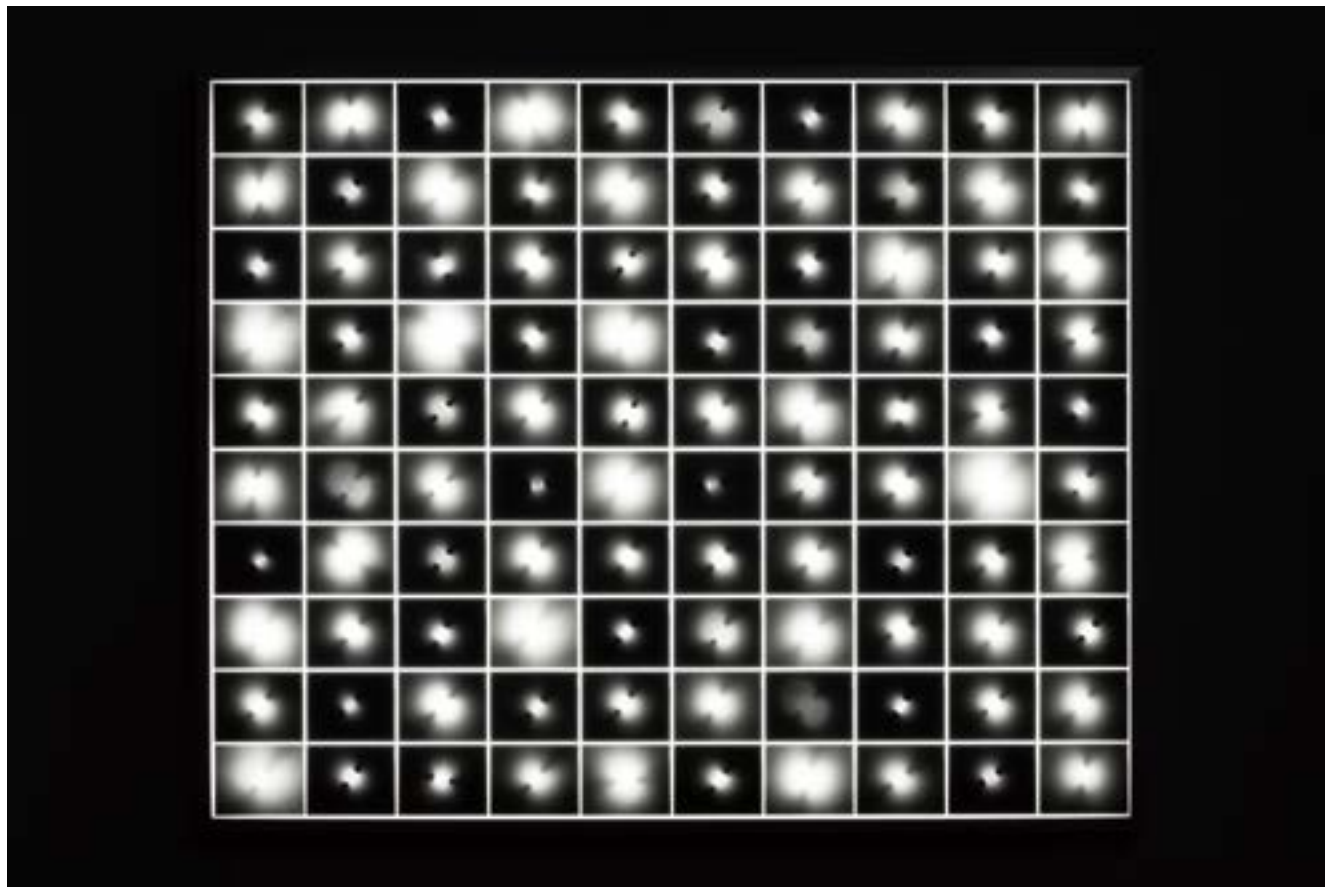
∴ 0=1 –trace of light

写真

モノクロネガフィルム(4×5サイズ)をポジティブ現像処理、アルミニウム、アクリル板、LED

Photograph

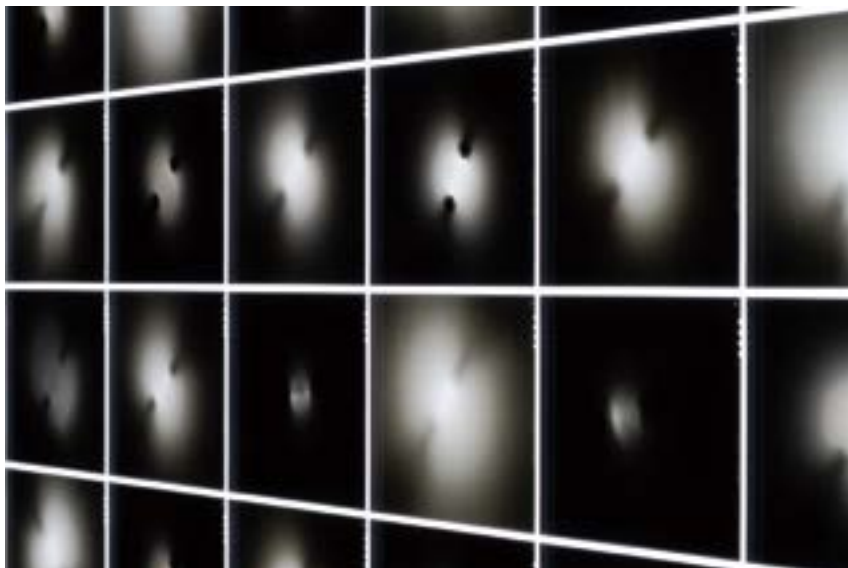
Reversely developed black and white negative film (4×5inch), aluminum, acrylic board, LED



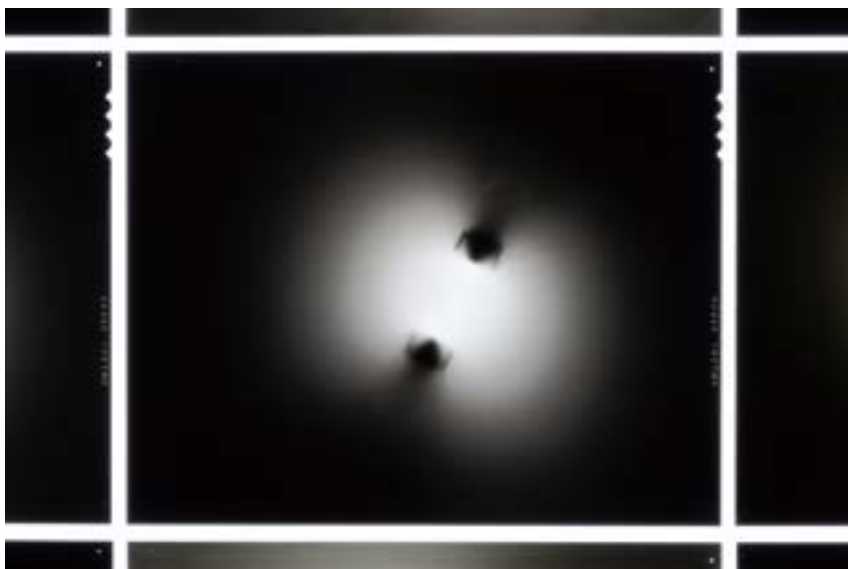
本作品は、消滅とも生成とも捉えられる両義的な事象の記録であり、ガラス管ヒューズが焼き切れる瞬間に放たれる光を4×5 inchのモノクロネガフィルムに当ててポジティブ現像した複数のフォトグラムから構成されている。私がまだ学生だった頃、佐藤先生が取手校地の暗室で現像した8×10 inchのコンタクトプリントに思わず見入ってしまったことがあった。思い返せば、大判フィルムの使用動機はそこにあったのかもしれない。また、肉眼では正確に捉えられない光の痕跡をフィルムに収める手法も先生の作品群とどこか共通点があると思われる。加えて、作品の支持体である自作のライトボックスは、写真作品のフレームなどを表現要素として自作する先生から受けた影響が関係していると考えられる。佐藤先生の彫刻的なアプローチによる写真表現は、今もなお、私にとっての「写真」という概念形成に多大な影響を及ぼし続けている。

This work is a record of an ambivalent event that can be seen as both extinction and generation, and consists of several photograms of light emitted at the moment the glass tube fuse burns out, which is shone on 4×5 inch black-and-white negative film and developed into a positive image. When I was still a student, I used to be involuntarily awed by the overwhelming expressiveness of the 8×10 inch contact prints developed by Professor Sato in the darkroom of the Toride Campus. Looking back, that may have been my motivation for using large-format film. The method of capturing traces of light on film, which cannot be accurately captured by the naked eye, also seems to have something in common with his works. Furthermore, my decision to make my own lightbox, which is the base for my work, was probably influenced by him who incorporated handmade frames and backlights as expressive elements in his photographic work. Professor Sato's sculptural approach to photographic expression continues to have a profound influence on the formation of my concept of “photography”.

ガラス管ヒューズに過電流を流すと、それが焼け切れる際に微かな光が生じる。暗室内で暗順応した状態でその発光現象を観察すると、しばらくの間、光の残像が目に焼き付けられる。銀塩写真のフィルムはその一瞬の光の痕跡をイメージとして記録し、表出させる。本作品ではモノクロネガフィルムを反転現像処理したポジ画像を提示している。それらはまるで宇宙の超新星が一堂に記録されたかのような様相を呈している。それらの一瞬一瞬は消滅であると同時に生成でもある両義的な事象として捉えられる。



When an overcurrent flows through a glass tube fuse, a faint light is generated as it burns out. If you observe this phenomenon of light emission in a dark-adapted state in a darkroom, the afterimage of the light remains in your eyes for a while. The film of silver halide photography records and displays the trace of that momentary light as an image. In this work, positive images were presented by inverting the monochrome negative films. To me, they resemble a collection of supernovas in space. Each of those momentary events can be perceived as both disappearance and creation, as a dualistic phenomenon.



栗山斉の関心は、「無」と「存在」という一見相反する概念、あるいはその間にある揺らぎに対する探究に注がれる。その探求は、多分野の知見を吸収しながら、様々な物質や現象を素材とする実験的な芸術表現である。

The main focus of Hitoshi Kuriyama is directed towards the exploration of seemingly contradictory concepts of “nothingness” and “existence”, or the fluctuations that exist between them. This pursuit involves a diverse range of knowledge from various fields. It takes an experimental approach, using substances and phenomena as materials, and elevates them into forms of artistic expression.

Roman Peter Prostejovsky

2023年交換留学生として在籍 From Austria

Ephemeral Resilience

写真／ミクストメディア
期限切れ印画紙、金、麦漆、ベンガラ

Photography / mixed media
Expired photographic paper, gold, mugi urushi, bengara

日本へ留学する以前から、私は佐藤時啓先生の作品に強く惹かれていた。長時間露光を用いた彼の写真は、光が踊り、呼吸するかのような幻想的な世界を生み出し、儚さと永遠性が共存する詩的な表現を持つ。精密さと即興性が均衡するその作風は、瞬間ではなく、時間の流れそのものを可視化しているように思われた。佐藤先生のもとで学ぶことは、まさに夢のような機会であった。

佐藤研究室での時間は、私の芸術的探究において大きな転機となった。特にアナログ写真への関心が再燃し、写真というメディアの素材そのものへの興味が芽生えた。印画紙の質感や化学的特性、それらがイメージに与える影響に魅了され、撮影という行為を超えて、写真を根本から捉え直そうと試行錯誤を重ねた。佐藤先生の指導のもと、写真とは何か、何になり得るのか、時間や空間とどう関わるのかを再考するに至った。

日本とオーストリアの写真表現の対比も、私に新たな視点をもたらした。日本の写真は無常観や繊細な美意識、実験的表現を重んじるのに対し、オーストリアの写真はヨーロッパ美術史や哲学的思考に根ざしている。この対照的なアプローチは、私の芸術的視野を広げ、写真表現への理解を深める契機となった。

Before I visited Japan for my exchange semester, I was already familiar with many artworks by Tokihiro Sato. I had fallen in love with his magical way of creating fairy tale-like long exposure photographs, where light seems to dance and breathe within the image. His work carried a sense of poetry that felt both fleeting and eternal, a delicate balance between precision and spontaneity. There was something deeply immersive about his images, as if they captured not just a moment, but the passage of time itself. I was fascinated by this approach, and the idea of working under his guidance felt like a dream.

Spending time in Sato Labo was a truly transformative experience. It was there that I rediscovered my passion for the analog photographic field—especially for the materials of the medium. I became fascinated with photographic papers, their textures, their chemical properties, and how they could influence the final image. I spent countless hours researching, experimenting, and testing, trying to understand photography beyond the act of taking a picture. The influence of Professor Sato pushed me to rethink photography at its core—what it is, what it could be, and how it interacts with time and space.

The photographic connection between Japan and Austria is particularly interesting because of the contrast between their artistic and cultural traditions. While Japanese photography often embraces impermanence, subtle beauty, and innovative experimentation, Austrian photography is deeply rooted in European art history and philosophical perspectives. This interplay challenged me, broadened my artistic vision, and shaped my approach to photography in ways I never expected.

The memories and experiences I made while being his student are unforgettable, shaping not only my artistic practice but also my understanding of what it means to see, capture, and create.



1991年 オーストリア生まれ。ウィーン在住。
2019年よりウィーン応用芸術大学で美術と写真を学び、2023年に東京藝術大学でインターメディアートを学ぶ。2024年、Beaux-Arts de Parisのレジデンスに滞在。
アナログとデジタルが交差する領域を探索し、写真による複製と変容を通じて記憶とノスタルジーを喚起する。

Born 1991, Austria. Lives and works in Vienna.

Studying fine arts and photography at the University of Applied Arts Vienna (since 2019) and Intermedia Art at Tokyo University of the Arts (2023). Residency at Beaux-Arts de Paris (2024). Explores the intersection of analog and digital, using photography to evoke memory and nostalgia through duplication and transformation.

《Ephemeral Resilience》は、記憶の儚さをテーマに、印画紙と日本の伝統技法である金継ぎを組み合わせた作品である。私は、記憶の移ろいやすさを象徴するように印画紙を引き裂き、それを金継ぎの技法で繋ぎ合わせる。陶器の修復技術として用いられるこの手法は、本作において、欠損を受け入れることで生まれる「再生」の視覚的メタファーとして機能する。

脆弱さと強靱さが融合するこの作品は、記憶の断片をつなぎ留め、過去を保持しようとする人間の本能を象徴する。変化を避けることはできないが、それでもなお、私たちは過去を形に留めようとする。その営みの中にこそ、喪失と変容を乗り越え、新たな美を見出す可能性がある。

また、本作は、日本とオーストリア、両文化に根付く職人技への敬意を表している。日本の「侘び寂び」は、不完全なものの中に美を見出す哲学であり、オーストリアには、細密な木工技術や版画制作など、精緻な手仕事の伝統が息づいている。両文化に共通するのは、精密さと忍耐、そして素材への深い敬意であり、これは作品制作の過程そのものを重視する価値観ともつながっている。

《Ephemeral Resilience》は、単なる芸術作品にとどまらず、文化間の架け橋となり、儚さと持続性の対話を生む。そして、時を超えて物や記憶を形作り続ける「手の技」への賛歌として存在し続けるのである。

Ephemeral Resilience explores the fragility of memories through the unconventional use of photographic paper and the ancient Japanese art of kintsugi. I delicately tear the paper, symbolic of the transient nature of memories, only to meticulously piece it back together using the kintsugi technique. The golden seams, once a method of repairing broken ceramics, now serve as a visual metaphor for resilience—an act of embracing imperfections rather than erasing them.

This fusion of vulnerability and strength reflects the human desire to preserve and reinforce the connections that bind our memories, echoing the timeless pursuit of keeping the past intact despite inevitable change. It is a meditation on loss, transformation, and the beauty that emerges from repair.

Beyond the conceptual depth, this work also pays homage to the craftsmanship deeply rooted in both Japanese and Austrian traditions. In Japan, the philosophy of *wabi-sabi* finds beauty in imperfection, while Austria has a long history of meticulous handcraft, from fine woodworking to printmaking. Both cultures share a reverence for precision, patience, and materiality—an appreciation for the process as much as the final outcome.

By combining these influences, *Ephemeral Resilience* becomes more than an artistic exploration; it becomes a bridge between cultures, a dialogue between fragility and endurance, and a tribute to the skilled hands that shape and reshape both objects and memories over time.

田中一平

Ippei Tanaka

2011年修士課程修了

un-calculated series

—
インスタレーション

鉄、モーター、電線、電球、ラジオ、バネ、等

Installation

Iron, motor, wire, light bulbs, radio, spring, etc.



Lucky chance - 出会うべき出会い -

先生との最初の思い出は、学部三年生の時の研究室選択のための面談でした。研究室所属の為に面談に行った際、ポートフォリオをお見せしました。当時、写真表現と金属の立体表現をしており、どちらに制作の主軸を置くか迷っていたところ「金属の表現をぜひやっていこう!」と、強くおしえていただきました。写真の研究室と思っていたところ、思いがけないエールをいただいたことが印象的で、迷っていた自分には進む方向を示してもらい、自分の居場所を見つけられました。先生が金属彫刻のルーツがあることをその時に知り、彫刻家としての先生にも出会ったときだったのかと思います。研究室では、制作へのスキルを学ぶということもあるのですが、それ以上に、この先の一生をかけて表現をどのように続けていくか? 続けていくにはどうするのか? という問いを研究室の活動や合宿の中で知ったことが大きいです。研究室から広がる、諸先輩や同窓、後輩の表現に触れ、一時的ながらも生活を共にし、共同制作もし、対話し、影響され、何気なく過ごす時間の中でも、そのようなことを吸収し、今の活動にもつながる原動力を授かったように思えます。

My first memory with Professor Sato was the interview for selecting a lab during my third year of undergraduate studies. When I went to the interview, I presented my portfolios to Professor Sato. At the time, I was working with both photography and metal sculpture, and I wasn't sure which would become the primary focus of my work. To my surprise, Professor Sato enthusiastically urged me, "You should pursue metal works!" and encouraged me to focus on this path. I had assumed that his interest and experience lay primarily in photography, so his unexpected support left a lasting impression on me. It was then that I learned about Professor Sato's background in metal sculpture. I could say that I first came to know my professor as a sculptor. That moment helped me find my place and direction. In the laboratory, it was important to learn the skills and techniques of producing artwork. However, even more significant were the deeper questions: "How can I continue to genuinely express myself throughout my life?" "How can I keep doing so?" The laboratory activities and retreats provided opportunities for me to reflect on these questions. I encountered the expressions of various seniors, alumni, and juniors in the lab, and even though our time together was temporary, living, creating collaboratively, and engaging in dialogue deeply influenced me. These experiences seem to have given me the driving force for my current activities.



Lost - 迷う時、 -



A tweet between two people - 君だから話せる -

「気配」をテーマに金属をはじめとしたミクストメディアの彫刻、あるいは動く装置を制作しています。作品とは、何かしら個人的な感受性に引っかかり心がざわめくような「気配」を、再度、他者である見る側の心の内に同じように発生させる、つまり内的再現ができる装置として捉えています。作品とは必ずしも可動はせずとも、見る人の心を揺り動かすもの、もしくは感動を呼び起こす装置的な役割であり、心を揺り動かされている状況を作り出している時にこそ表現が生まれていると思うのです。その意味で、自身の制作に関わらず、作品とは感動を作り出す装置的な役割をするものであると思います。

出品の3作品はシリーズですが、どれもモーターにより針金が回転をし、バネと錘の装置に触れ、2つのバネが互いに触れた瞬間に、通電がおこり、繋がれた装置たちが一時的に稼働をします。どのバネも錘とバネの張力で、行きつ戻りつ、不規則な生物のような有機的な動きをします。作品①は、電球を用いており、触れた一瞬に光が明滅します。作品③は、ラジオを用い、触れた瞬間にラジオが流れ出します。作品②は、バネのランダムな動き自体を見せています。

I create metal mixed media sculptures and moving devices centered on the theme of "sign". I believe that art is something that triggers a personal sensitivity—a "sign" that stirs the heart, and then again generates the same sign in the heart of the viewer. In other words, I see it as a device that can reproduce inside the heart. A work of art is something that should resonate with others and act as a device to evoke emotion. I believe that genuine expression is born when we create situations that touch people's hearts.

The three exhibits form a series of works. In each work, a motor turns a wire, which activates a spring and a weight device, and when the two springs touch each other, they are energized and the connected devices are activated. Each spring moves organically, like an irregular organism, back and forward, due to the tension between the weight and the spring. Work (No.1) uses a light bulb, and the light flickers at the moment of touch. Work (No.3) uses a radio, which starts playing by touch. Work (No.2) shows the random movement of the spring itself.

2011年より東京藝術大学 先端芸術表現科 教育研究助手

2015年より同科 助教

2018年より東京藝術大学 Diversity on the Arts Project 担当
「ケアとアート」をテーマとした社会人対象のプログラム運営を行う。

2023年より東京藝術大学 共創拠点推進機構 特任講師

2011 Assistant from Tokyo University of the Arts.

2015 Assistant professor.

2018 Project Assistant Professor from Diversity on the Arts Project (DOOR).
DOOR is a program for the general public on the theme of care and the arts.

2023 Project Lecturer from arts-based communication platform for co-creation to build a convivial society.

袁辰 YUAN CHEN

2024年修士課程在学中

山の映像

Image of the Mountain

写真

プリント、額縁、プロジェクション

Photograph

Print, frame, projection



研究室の遠足で、運転する佐藤先生の隣でボーっと車に乗っていた時に先生にいわれた一言がずっと忘れられない。「写真は強いとか弱いとかそうじゃなくて、もう既に存在としてあるから」と。正直、今でもあんまり理解出来ないのだが、心のどこかで安堵したような気がする。

光が溢れている世界を無機質な二次元的な写真にすることとは、きっと佐藤先生が言っていたことに近いのだろう。

写真は時間を止める術だと言われる説があるが、流れていく時間のなかで、反復されるような物事でも、写真でさえも、何ひとつ戻るのはない。

I will never forget what Professor Sato said to me while I was sitting absentmindedly in the passenger seat during our lab hiking trip: “A photograph is not about being strong or weak. It simply exists.” To be honest, even now, I still don’t fully understand what he meant. But somehow, his words pulled me deep into thought, and then I felt a sense of relief.

Perhaps what he was saying is closely related to the act of transforming a world overflowing with light into an inorganic, two-dimensional photograph.

People say photography is a way to stop time. But time can never be truly stopped. It is always flowing. And in its loops and repetitions, nothing—not even a photograph—can ever return to the way it was.



本作はカイラス山(カン・リンポチュエ)を巡礼する時に記録した映像から、1コマを引き出し、キャプチャしたものをプリントする。そして映像自体をその1コマに投影するというトートロジーの試みである。

チベットに旅した時、現地の人がマニ車やお寺の周りを繰り返しまわす(ループする)という風習に関心を持った。

この特定の存在に対して繰り返し行う行為の中で、最も象徴的なものは山を回ること(コルラ)であり、これは聖なる山を巡礼することである。

山はずっとそこにあって、人々がそこを訪ねに訪ね、山を周り繰り返し往復するというイメージが遥か昔から始まり、存在していた。

山を記録しながら、山という存在そのものを巡って、すべての物事は映像のように投影されているというビジョンが頭から離れなくなった。

映像の中の静止画(一コマ)に、映像自体そのものをあらためて投影(プロジェクション)するという、コルラ(巡礼)と類似するトートロジーの思考を写真映像といった平面装置に置き換える欲求が自ずとあった。

This work draws out a frame from the footage recorded during a pilgrimage to Mount Kailas (Kang Rinpoche), captures it and prints it. The film itself is then projected onto that single frame in an attempt at tautology.

When I travelled to Tibet, I became interested in the custom of local people to repeatedly turn (loop) around the mani wheels in the temples.

This act symbolic of repetition for a certain entity is to go around a mountain (korla), i.e. to make a pilgrimage to a holy mountain.

The image of the mountain unwavering through time and the people visiting it and circling repeatedly around it—a tradition dating back centuries.

While documenting the mountains, the vision that everything is projected like an image around the very existence of the mountains became stuck in my mind.

I naturally felt the desire to replace the thought of tautology, which is similar to korla (pilgrimage), with a flat device such as a photographic image, in which the image itself is projected onto a still image (a frame) within the image.

中国生まれ。レンズを通した視覚を写真映像に置き換える過程で捉えた「知覚」を制作テーマとしている。

Born in China. The theme of his work is 'perception,' which he captures in the process of replacing vision through a lens with photographic images.

NIE ZEWEN

2024年博士課程在学中

19:00-23:00

写真

バックライトフィルム、木、LEDライト

Photograph

Backlight film, wood, LED light



私が佐藤先生の作品を初めて見たのは、学部生の頃でした。当時、社会的なテーマを写真で記録したいと思っていた私にとって佐藤先生の作品は、記録写真という枠を超えた新たな創造的な表現の可能性を感じさせるものでした。

それから、中国における取り壊しという社会問題を撮影していた私は、《光・呼吸》の技法に触発され、中国の工場の廃墟で、ライトを用いたペインティングをしながら長時間露光の写真を撮りました。

本展で出品した発光建築の写真は、ライトと夜景を主体に構成されています。長時間露光によって、撮影者の姿は消え、代わりに現代建築の姿が浮かび上がります。このことは、発光都市が一部の建築家や労働者、そしてそれを支える納税者たちによって形作られた、中国の社会的風景であることを象徴しています。

私の作品と佐藤先生の作品は、写真という点では共通しており、それぞれ異なる国と時代を表現していますが、国境や時間を超えることが芸術の魅力であると私は感じています。

When I first encountered Professor Sato's work, I was in my undergraduate years. For someone like me, who wanted to capture social themes through photography, I felt a sense of new creative possibilities beyond those of documentary photography in Professor Sato's pieces.

At the same time, while I was photographing the social phenomenon of demolition in China, I attempted to emulate the technique used in *Photo-Respiration* by taking long-exposure photos of light painting at the ruins of construction sites in China.

The photos of luminous architecture exhibited this time are similarly composed of light and nighttime cityscapes, but without the presence of the light painting's creator; instead, they depict modern architecture that has been built. However, unlike light painting, which directly reveals the creator's presence, these images depict modern architecture as it stands today. Alternatively, one could argue that this social landscape of a luminous city in China has been created by the builders of the architecture and the taxpayers who fund the operations.

I believe that my work and Professor Sato's share similar photographic qualities, expressing different countries and times, and that the ability to transcend borders and temporal limitations is the allure of art.



近年、中国では数十棟のビルが連携して光を発し、数キロメートルにわたる巨大な光の都市を形成しています。これを実現するための技術は、ビル群全体のライトを一括で管理し、同時に光らせることができるシステムを用いています。このような光の都市の背景には、いわゆる「面子文化」があります。中国では、自分たちの発展や成功を外部に示すことが重要視されており、発光するビル群はその象徴として地方政府によって積極的に推進されています。

しかし、これに対する批判もあります。2020年5月28日、中国の前首相李克強は記者会見で、「中国では6億人の月収が千元(約1万5千元)前後だ」と述べ、この発言はSNSで大きな議論を呼びました。新型コロナウイルスの影響で経済が落ち込む中、繁栄を象徴するこれらの光のビルと、実際の社会のギャップが広がっていると感じる人も増えています。

作品のタイトル《19:00-23:00》は、これらのビルが最も光を放つ時間帯を指しています。私はこのプロジェクトを通じて、上海、青島、西安、武漢、長沙、南昌、広州、深圳、厦門などの大都市を訪れ、また私の故郷である吉安市やその他の小都市も取り上げました。

This work is a photography and video project themed around the social phenomenon of China's *luminous cities*. In recent years, advancements in unified control technology for clusters of luminous buildings have enabled the creation of massive light shows spanning several kilometres. This spectacular new nighttime scenery has become common in many major cities across China.

In the context of *face culture*, luminous buildings are encouraged and promoted by local governments nationwide as an image strategy to “present our best side to the outside world.” As a result, luminous cities symbolise China's economic success and technological progress externally. However, during a press conference on May 28, 2020, former Chinese Premier Li Keqiang remarked that “600 million people in China have a monthly income of around 1,000 yuan (approximately 15,000 yen or \$150),” sparking widespread discussion on social media. In the wake of the pandemic, coupled with the real estate crisis and economic downturn, the gap between the prosperity symbolised by these luminous buildings and the realities of society appears to be widening.

The title *19:00-23:00* refers to the hours between 7:00 PM and 11:00 PM, the primary lighting hours for these luminous buildings. Throughout this project, I visited major cities in China, such as Shanghai, Qingdao, Xi'an, Wuhan, Changsha, Nanchang, Guangzhou, Shenzhen, and Xiamen, as well as my hometown of Ji'an and other smaller cities.

1995年中国生まれ。2017年日本に留学、2021年東京造形大学を卒業。2021年東京藝術大学に入学。
個人と社会の関係性に関心があり、写真表現の社会性をベースとしながら社会問題の視覚化を試みている。

Born in China in 1995. Studied abroad in Japan in 2017 and graduated from Tokyo Zokei University in 2021. Entered Tokyo University of the Arts in 2021.

I am interested in the relationship between individuals and society, and my photographic expression is based on its social aspects, attempting to visualize social issues.

村上裕

Hiroshi Murakami

2023年博士課程満期退学

在学中と退学後

While enrolled in school and after leaving school

ミクストメディア

Mixed media



佐藤先生の作品をはじめてみたのは、白州の芸術祭の図録でした。そのときから追いかけています。

I saw Professor Sato's work for the first time in the Hakushu Art Festival catalog. I have been following him ever since, and I deeply admire his fervent spirit and his approach to photography.

在学中の作品と退学後の作品をあつめました。

My collection includes pieces from my school years and those I've produced since leaving university.



世界の違いを超えていくためにはどうしたら良いのだろうか。

Although my time at the Geidai was cut short, I am leaving with many valuable lessons. I will continue thinking about the important questions relating to both art, and society.
How can we bridge global differences and work towards a more equitable future?

砂田百合香

Yurika Sunada

2024年修士課程在籍中

Ambiguity

—
インスタレーション
鉄、モーター、ハーフミラー

Installation
Steel, motor, half mirror



佐藤時啓先生の作品《Gleaning Lights》に込められた、「この場所を持ち帰りたい。ただカメラが切り取る断片ではなく、空間そのものとして」という思いに深く共感した。写真は見えているものを固定する手段である一方で、場の空気や光、時間の流れといった視覚体験のすべてを捉えることは難しい。その場の光や時間、空間の全体性を捉えようとする佐藤先生の姿勢は、私の制作にも強く影響を与えた。

私は「知覚すること」の限界と可能性に向き合いながら、光と時間によって変化する表現を探索している。

The sentiment behind Professor Tokihiro Sato's work *Gleaning Lights* resonates deeply with me: "I want to take this place with me—not merely as fragments captured by a camera, but as a space itself." Photography serves as a means to fix in time what is visible, yet it is challenging to capture the entirety of a place—the atmosphere, the light, and the passage of time. Professor Sato's approach, which seeks to grasp the wholeness of light, time, and space, has had a profound influence on my own artistic practices.

In my work, I explore the possibilities and limitations of perception, pursuing expressions that shift with light and time.

本作品は、佐藤先生とのコラボレーション作品として制作した。

いくつもの四角い断片がゆっくりと傾き、わずかに変形し続けることで、観る者の視点を揺るがせる。異なる視点を持つことで、空間との関係性が変容していく。光、時間、空間の移ろいの中で、見ることの不確かさや記憶の曖昧さを探究する試みである。

作品中のハーフミラーには、佐藤先生の《From the Sea》の制作過程を記録した映像が映り込んでいる。光を手にとりたいという衝動から制作されたこの作品は、光と時間の蓄積を視覚化しており、私の作品《Ambiguity》も、見ることと記憶することの間に生じる揺らぎに焦点を当て、知覚と時間の関係を探求している点で共通している。

日常の風景や瞬間は、目に焼き付けようとしても、記憶の中で次第に滲み、不確かになっていく。見えているものと見えていないもの、記録されたものとされなかったものの狭間に漂う、その曖昧さ《Ambiguity》の存在を表現した。

This piece was created as a collaborative work with Professor Sato.

Multiple square fragments tilt gradually and subtly transform the image, unsettling the viewer's perspective. As the observer engages with different viewpoints, their perception of space continuously evolves. Through the transient nature of light, time, and space, this work explores the uncertainty of vision and the ambiguity of memory.

Within the half-mirrors in the piece, reflections of the creative process behind Professor Sato's *From the Sea* can be seen. Born from an impulse to grasp light, this work visualizes the accumulation of light and time. Similarly, my work *Ambiguity* focuses on the fluctuations that arise between seeing and remembering, investigating the relationship between perception and time.

Even when we try to imprint everyday scenes and fleeting moments in our memory, they inevitably blur and become uncertain. Floating between what is seen and unseen, what is captured and what is omitted, this work seeks to express the presence of *Ambiguity*.



1989年 東京生まれ
2012年 武蔵野美術大学空間演出デザイン学科セノグラフィ専攻 卒業
2019年 ポーラ美術振興財団在外研修員(ベルリン)
2023年 東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程 在籍

主な展示

2024年 「ポーラミュージアムアネックス展2024」POLA MUSEUM ANNEX(東京)
2021年 「Interspace」ART PROJECT TAKASAKI 2021(群馬)
2020年 「ambivalent」Künstlerhaus Bethanien(ベルリン)
2019年 TOKAS-emerging「engram」TOKAS 本郷(東京)

1989 Born in Tokyo, Japan
2012 B.F.A. in Scenography, Display and Fashion Design, Musashino Art University
2019 POLA Art Foundation Fellowship, Berlin, Germany
2023- Current M.F.A. in Intermedia Art, Tokyo University of the Arts

Selected Exhibitions

2024 POLA MUSEUM ANNEX EXHIBITION 2024, POLA MUSEUM ANNEX, Tokyo, Japan
2021 Interspace, ART PROJECT TAKASAKI 2021, Gunma, Japan
2020 ambivalent, Künstlerhaus Bethanien, Berlin, Germany
2019 TOKAS-emerging: engram, Tokyo, Japan

まきわだ(牧田沙弥香 + 大和田愛子)

MW (Maki+Wada)

2019年修士課程修了

Wheat Gazebo

—
インスタレーション
小麦藁、稲藁、竹、木

Installation
Wheat straw, rice straw, bamboo, wood

光の侵入を制御する行為で遊ぶ。カメラを創って残る像を楽しむ先生の活動に親和性を感じています。また、他人と交流して初めて観られる明るい景色があることも研究室で学びました。死ぬまでの間をどう充実させようか、試しきれないもどかしさまで喜んで、気がついたら生きてます。(牧田)

野外制作が好きだ。自然に触れながら活動ができるし、何より大きな作品が実現できるから。佐藤先生はそんな私の(迷惑な)欲望を理解し、サポートして下さった。今回の野外展示作品も、私が研究室で過ごした経験の産物として考えるならば、相応しいように思う。そこに作品が在ることで場所が拓かれ、人と人とが時間と場を共有できる空間を、一瞬でいい、つくりたい。それは佐藤先生が、そして佐藤研が教えてくれた景色だ。(大和田)

The act of playing with controlling the entry of light resonates with me. I feel a deep connection to Professor Sato's work, where he creates cameras and enjoys the resulting images. Additionally, I have learned in the laboratory that there are bright landscapes that can only be seen through interaction with others. It's a joy, even in the frustration of never being able to fully test how to enrich the time before death. Before I realize it, I'm alive. (Maki)

I have always enjoyed working outdoors, as it allows me to connect with nature and realize larger works. Professor Sato of the Tokihiro Sato Laboratory understood my (perhaps troublesome) desire and provided me with support. When I consider this outdoor exhibition piece as a product of my time in the lab, I believe it is a fitting manifestation of those experiences. The presence of the work transforms the space, offering an opportunity for people to share time and place, even if only for a fleeting moment. This is the landscape that Professor Sato and the Tokihiro Sato Laboratory have taught me to appreciate. (Wada)

居場所をつくる必要があった。光、水、土、草、人…。それらと遊ぶ中で手に入れたもの(知恵?)を見返して、精一杯の基地をつくった。限りなく広がる自然でも、複雑でカオスな都会でも、拠り所を失うときがある。私たちには、居場所をつくり続けることが必要なのかもしれない。

It was necessary to create a place to belong. Light, water, soil, grass, humanity...while engaging with these elements, we reflected on what we had gained—perhaps wisdom—and built the best secret hideout we could. Whether in the vast expanse of nature or the complex, chaotic city, there are times when we lose our sense of grounding. Perhaps it is essential for us to continue crafting a place to belong, no matter its transience.



2020年～
茨城県の山の麓で茅を葺きながら制作中(牧田)
2020年～
茨城県の山の麓で畑を耕しながら制作中(大和田)

2020～
Working on thatching roofs at the foot of a mountain in Ibaraki Prefecture (Maki)
2020～
Working on doing a farm at the foot of a mountain in Ibaraki Prefecture (Wada)

『交差する時間』 振り返り会議録

Minutes of the Intersecting Time Review Meeting

日時: 2025年1月9日(木) (109分)

Date & Time: Thursday, January 9, 2025 (109 minutes)

佐藤時啓、神垣優香、飯野哲心、田中一平、石川智弥、鈴木のぞみ、菊地拓児、砂田百合香、堤有希

Participants: Tokihiro Sato, Yuka Kamigaki, IINO TESSIN, Ippei Tanaka, Tomoya Ishikawa, Nozomi Suzuki, Takuji Kikuchi, Yurika Sunada, Yuki Tsutsumi

概要

2025年1月9日、本展覧会の振り返りを目的としたミーティングが開催され、佐藤時啓と展覧会の実行委員会のコアメンバー8名(飯野、神垣、田中、石川、鈴木、菊地、砂田、堤)が参加した。

本展覧会は、佐藤時啓の退任に際し、彼の指導を受けた卒業生たちが多様な作品を持ち寄り、約5000人以上の来場者を迎えた大規模な企画であった。展示では、LGSで組まれた小屋と既存の展示空間を活用し、プロポーザルをもとに会場班が作品の配置を調整するなど、限られたスペースの中で工夫が凝らされた。

ミーティングでは、展覧会の意義や運営面の成果と課題について議論が交わされた。特に、同窓会的な機能と教育的価値、オンライン環境を活用した準備の利点と限界、広報のあり方、在校生との関わり方などが重要なテーマとして挙げられた。また、シンポジウムでは、研究室の多様性や藝大における写真教育の歴史が共有され、展覧会のコンセプトとも連動した内容となった。

今後の課題として、展覧会の成果を広く発信するための図録制作やアーカイブの活用方法についても議論がなされ、展覧会の記録をより多くの人々に届けるための方策が模索された。

January 9, 2025, a meeting was held to review the exhibition Intersecting Time. The discussion was attended by Professor Tokihiro Sato and eight core members of the organizing committee: Iino, Kamigaki, Tanaka, Ishikawa, Suzuki, Kikuchi, Sunada, and Tsutsumi.

Organized to commemorate the retirement of Professor Sato and brought together a diverse collection of works from his former students. With over 5,000 visitors, it became a large-scale and significant event. The exhibition layout was carefully planned, utilizing both an LGS-structured pavilion and the existing gallery space. The placement of works was adjusted by the exhibition team based on proposals submitted by the participating artists, ensuring a harmonious balance within the given space.

During the review meeting, participants reflected on the exhibition's significance, its successes, and challenges in its organization. Key topics included the dual role of the exhibition as both a reunion for alumni and an educational platform, the advantages and limitations of utilizing online tools for preparation, the effectiveness of promotional efforts, and the involvement of current students. Additionally, a symposium was held, where discussions covered the diversity of the laboratory and the history of photography education at Tokyo University of the Arts, aligning closely with the overarching concept of the exhibition.

Future challenges identified in the discussion included how to effectively document and disseminate the outcomes of the exhibition. The importance of an archival strategy, including the publication of a comprehensive exhibition catalog, was emphasized as a means to extend the impact of the event to a wider audience, and provide a lasting reference for future generations of students.



はじめに

神垣 本日は皆さんから展覧会を振り返っての感想や気づいた点をお聞きしたいと思います。まずは今回の実行委員長長の飯野さんから何か振り返りで気になったことはありますか？

飯野 展覧会が終わってから2ヶ月近く経ちますね。5000人以上と、とにかく多くの人が来場されて、キャプションをじっくり読んでいた方が多かったという印象です。キャプションが良かったという感想もよく聞きました。作品の収まり具合もギリギリちょうど良かったですね。菊地さんの配置の妙だったのではないかと思います。

佐藤 基本的には皆さんの意見を聞きたいのですが、全体的に卒業生の皆さんがそれぞれ違う分野でプロフェッショナルとして活躍されていて、その力が合わさって初めて実現できた展覧会だったと思います。皆さんの力を借りてできた展覧会という感じがしますね。

神垣 そうですね。普通の退任展ではあり得ないようなバランスになったのは面白かったと思います。

佐藤 通常、美術館が主体となる場合は、キュレーターがいて、プロフェッショナルを雇い、作家とプロフェッショナルという関係で進めていくわけですが、今回はプロフェッショナルな人たちが自らのスキルを分かち合うという、非常に貴重な機会だったと感じました。

展示構成と作品の配置について

神垣 菊地さん、会場のレイアウトで意識されていたこと、気をつけたことはありましたか？

菊地 展示室にLGSで組んだ小屋を配置し、そこに布がかけられるという大きな枠組みが先に決まっていました。小屋だけ

でなく、元々ある展示室の壁にも作品を展示できます。これを前提とした上で出展者の皆さんにプロポーザルを出していただき、その内容を手がかりにどこにどう配置するのが良いかを会場班で話し合っていました。

プロポーザルはどれも面白いものでしたが、実際に配置する側からすると、作品の形態やどの程度のもが出てくるのかが読みきれない部分がありました。また、僕自身は佐藤研に在籍していた時期が短く、長い歴史の中で今回参加された卒業生の多くは全く知らない方々でした。プロポーザル1枚だけでは、その人がどういう表現をしたい作家で、どんな作品を作ってきたのか分からない中で配置を考えなければならないという難しさがありました。

また、人数制限なく募集をかけていたため、そもそも全作品が展示スペースに入るのかという問題からクリアしていく必要がありました。まずは読み解ける範囲で機械的にボリューム検証をし、徐々にメディアの近さや立体と平面のバランスなどを考慮しながら、パズルのように配置を調整していきました。

佐藤 一番最初のミーティングで堤さんと湯浅さん(建築家)と話した際、プロポーザルを見てからという方法は無理だろうという結論になり、まずは空間を決めることにしました。空間を決めてから図面で配置していったのは正解でしたね。配置をするときにVectorworksを使える達人がいたのはありがたかったですね。

菊地 僕は最近、展覧会の会場設計の仕事が多く、そこで培った経験が今回生かせたと思います。ただ、今回のように多様な作品が混在する展覧会の配置は初めての経験でした。通常なら単一作家の展示や特定のジャンルの展示であれば、ある程度パターン化できますが、今回は手探りの部分も多かったです。

神垣 佐藤研のマルチメディア性、何でもありな特性を一つの空間に組み込むのは難しさがあったのです。空間自体は違和感なく仕上がっていたと思います。準備段階の大変さを聞いて、より感謝の気持ちが深まりました。



同窓会的機能と教育的価値

田中 全体としては、同窓会的な機能も同時にあったという印象が強いです。退任展という大きなイベントだからこそ実現できたことだと思います。大学は人と会うことの価値が非常に高い場所だと改めて感じました。

また、先端らしさとして様々な表現が共存している中で、写真や画像作品が多かったという印象も受けました。キャプションのコメントの良さは自分も感じましたし、外部からの反応でも好評でした。知らないうちに先生や研究室の影響を受けていたことを実感しましたし、卒業後もその影響を受けながら各自が創作活動をしていることがわかりました。

大学とは即座にハウツーを学ぶだけではなく、卒業後も解決できない問いとして残続けるものを見つける場所でもあると改めて感じました。

準備段階についてはコロナ後のオンライン環境の発達があったからこそ可能だったと思います。また、連絡系統の重要性も実感しました。Discordを使っていましたが、後半になってようやくその特性や効果的な使い方が分かってきたように思います。

その他の印象として、外国籍の参加者が多かった点も良かったと思います。アートならではの繋がりを感じました。

神垣 卒業後も研究室や大学の影響を受けている部分について、具体的にどのようなときに感じましたか？

田中 具体的に言うのは難しいのですが、キャプションを見ると、先生の作品からこういう影響を受けましたという説明をしている人が多く、それが初めて知る内容だったりしました。今に

なって振り返ると、そういう影響関係を見出しているのかもしれないという印象を受けました。

佐藤 展示について最初に懸念していたのは、同窓会的な機能が内輪に閉じたものに見えないようにしたいという点でした。来場者にとって普遍的な意味で研究室という存在を発表できたと思うんです。閉じた個人的な関係ではなく、研究室の関係を普遍化して捉えてもらうことができたと思いますね。そうでなければ展覧会を行う意味がなかったでしょう。

佐藤研究室の特徴と準備過程

石川 展覧会全体を振り返ると、まずは会場のサイズ感が奇跡的なほど必要十分だったことが思い起こされます。会場に負けることなく、かといって混雑しすぎることなく、シミュレーションが見事に奏功していました。作業量の多さを考えると、何よりも佐藤先生のリアライズ能力に驚かされます。これまで大胆な構想を最終的に形にできたのは、確固たる信念があったからこそだと実感しました。佐藤研の集大成としてふさわしい形だった気がします。

参加者に先端の手作り卒展の経験があったことも大きかったと思います。作業量の偏りに対する不満なども、その経験から「そういうもの」として受け入れる文化があったことが、全体として破綻なく進行できた要因ではないでしょうか。

田中くんも言っていましたが、コロナ以降のオンラインコミュニケーション環境が整っていたこともあって、退任展という機会が地方に散らばった人々を結びつける機能を果たしたと思います。そして、努力でもお金でも手に入らない「時間を越えた繋がり」を作ってくれたのだと気付かされました。大学には長くて10

年程度しか在籍しないわけで、自分より前や後の世代とはなかなか知り合えないものです。そういう点で、退任展とは教育の一環として重要な機能を持っていると感じました。

担当した広報については、今になるともう少し頑張れたかもしれないと反省しています。

神垣 広報をもっと頑張るとしたら、どのような方法を考えましたか？

石川 もっと多くの人に知らせるための工夫をすべきでした。私の年代では周囲がFacebook 一辺倒なのですが、世代によって使用するSNSが異なるという課題にきちんと向き合いませんでした。Instagramだけで良かったのか、ホームページをどう活用するかなど、積極的に他の世代の方々の助けを求めるべきだったのかもしれない。

神垣 時間的・距離的な制約もある中で、5000人以上の来場者があったことは非常にポジティブだと思います。

飯野 Zoomがなかったら想像するだけで恐ろしいですね。もしオンラインでのミーティングがなければ、対面でのミーティングが増え、動く必要性が高まり、より負担が大きくなっていただろうね。それでも作業の比重はコアメンバーに偏っていたと思います。

佐藤 最終的にはさまざまな反省点があります。結果的に田中さんや永井さんにはかなり負担をかけてしまいました。

田中 自分は学内にいたタイミングだったので役割を引き受けられました。直接の仕事ではない学内の仕事に関わることを上司が理解してくれたのは、藝大らしくていいなと感じました。

多様な作品と研究室の歴史

砂田 展示全体として、タイトル「交差する時間」の通り、幅広い年代の学生が集まり、さまざまな媒体を使った作品があり、見応えのあるものになっていたという印象を持ちました。外部の友人から「写真を教えている先生のゼミなのに、こんなに多様な作品があるんだね」という感想もありました。また、SNSでは、“こんなに多彩な媒体の作家たちがいる佐藤研で学んでみたかった”、“作品の魅力に加え、緻密に考えられた動線と展示構成も堪能できた”、などの投稿があり嬉しく思いました。佐藤先生が、約25年前に先端芸術表現科を立ち上げられて、学生をどのように育て、彼らがどのような活動してきたのか、という流れが伝わってくる展示になったのだと感じました。

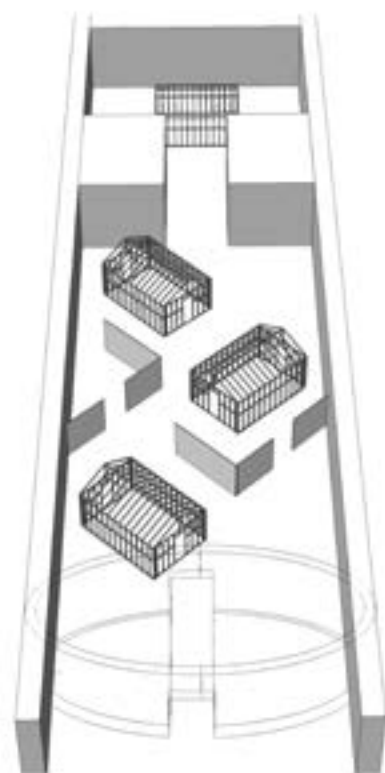
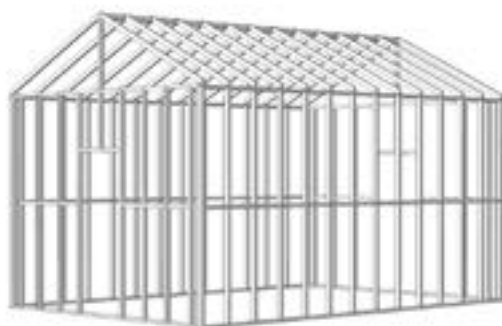
準備段階では、随所に、真のプロフェッショナルな方が集まっていたことが良かった点であると思います。会場班では、菊地さんが図面を素早く仕上げる姿に感動しました。デザインを担当してくれた神垣さんなど、様々な分野に精通した方々がいて助かりました。これこそが、佐藤研から多様な人材が巣立っていることの証だと思っています。

この展示を通じて学んだことは、皆さんの前向きな姿勢と実行力です。問題が起きても素早く対応し、決断も速く、自分一人だと悩んでしまうところを、皆さんのポジティブな仕事の進め方に支えられました。

神垣 確かに現場であまり衝突することもなく、大きな問題もなく、臨機応変に対応できていましたね。

佐藤 砂田さんは解体まで担当してくれたんですね。

砂田 はい、鉄屑屋さんに渡すところまで担当しました。基本





的に全部ばらして、4tトラックに隙間なく積み込みました。
 佐藤 最終的に屑鉄代が3万7千円ほどになったので、相当の重量だったと思います。
 映画の『荒野の7人』や『七人の侍』のような、それぞれの専門家が集まってプロジェクトを成し遂げるような楽しさがありましたね。

図録制作とアーカイブについて

堤 会場についてご好評の声を多くいただきました。図録は、展覧会の鑑賞体験が反映できたら嬉しいと思います。
 佐藤 鑑賞体験をどこまで図録で再現できるかが課題ですね。ぜひ図面も入れたいね。
 神垣 現在の計画では、学生の作品とイベントアーカイブ、そして先生の作品を別冊にして、カバーに入れて1冊にする予定です。レイアウトのアイデアがあれば教えていただきたいです。
 石川 図録について、視覚障害をお持ちの方にも届けられるよう、ウェブに全文を公開することを提案したいです。専門家に相談したところ、PDFの全文公開が最も負担の少ない方法ではないかとのことでした。また、ウェブ上であれば紙面に載せられない情報も掲載でき、障害のない方にもメリットがあります。
 その場合、図録のページにQRコードを載せる方法も考えられますが、リンク先をどこにするかが課題です。大学美術館のページに掲載してもらえれば、URLが変わらず長期的なアーカイブが可能になると思います。
 佐藤 図録のバージョンアップについて、同じ価格で内容が充実したことを宣伝する機会が欲しいですね。期限を決めて

近々告知のお知らせを作りませんか?僕も何十冊か予約する予定です。

神垣 いいですね!表紙をカバーで覆うイメージのビジュアルで宣伝できると良さそうです。

佐藤 話は少し変わりますが、展覧会の全体の流れについて反省点があります。LGSを使った「風景小屋」というキーワードが出てきた時点で僕の中ではイメージが固まっていた。しかし、そのビジョンを皆さんと共有するのが難しく、しばらくの間、皆さんを置いてしまった感があります。空間の魅力を十分に伝えきれず、実際に形になるまでわからなかった部分があったのは反省点です。

堤 私自身も、佐藤先生と湯浅さんとの初回ミーティングの時点でイメージは湧いていました。それを言葉にして皆さんに伝えるのが難しかったです。コンセプトを組み立てる過程も、参加作家と考察できる場があれば良かったかもしれません。

砂田 最初に参加した打ち合わせでは、「会場にLGS(軽量鉄骨)の小屋を浮かせたい」という壮大な計画を聞きました。それに加えて「70人ほどの参加者と先生の作品を、会場内に交差させたい」というお話を聞いたときは、率直に「これは大仕事だ」と思いました。

佐藤 正直、自分の作品のことは直前まで考えていませんでした。LGSのイメージは湧いたものの、具体的な方法は何もなく、自分のスタジオ制作を通じてLGSを研究し、ギリギリになって具体的な方法論が出てきました。本当にギリギリのプランでした。

砂田 プロポーザルが集まった時も、詳しく具体的に書いてくれているものもあれば、中には抽象的なものもあり、展覧会の意図や空気感を、出品者や来場者にどう伝えるかは難題でした。

佐藤 みんな見たことのない空間を作ろうとしていたので、難しさがありません。

飯野 小屋が建った時はテンションが上がりましたね。

佐藤 屋根がついた時は本当にテンションが上がったね。そこで初めて現物を皆んなが見たわけですから。

石川 宙に浮かそうとしなくて良かったですね(笑)。

佐藤 途中で根拠を示せと言われても難しかったです、それしかないという自信はありました。M1プロジェクトの時も同じだったんですね。

アーカイブ展示とトークイベントの振り返り

菊地 研究室のアーカイブ展示を担当させてもらったのですが、展示をプランするにあたり、今回の退任展におけるアーカイブ展示の位置づけについて僕なりに考えていました。メイン展示では卒業生の作品や先生の影響が個々に表現されている一方で、アーカイブ展示では25年弱の佐藤研究室としての活動は一体何だったのかを客観的に伝えることを意識しました。普遍化というキーワードが出ていましたが、各プロジェクトの内容については第三者にも興味を持ってもらえるように紹介したつもりです。

特にM1プロジェクトは佐藤研究室の本質が最も表れている活動だと思います。今回、久しぶりに再会した同級生や先輩後輩とM1の思い出話になり、「よく死人が出なかったね」という笑い話になりました。今の大学では絶対にできない活動だと思いますが、退任展でこのような活動を紹介できたのは良かったと思います。

神垣 シンポジウムについても振り返りたいと思います。最初

の佐藤研究室のシンポジウムに参加された方から感想をお聞かせください。

田中 出品者から10~11人ほどに登壇していただき、リレー形式で各自の制作と研究室での経験について話してもらいました。また、佐藤先生から展覧会の概要や準備過程の写真も紹介されました。広報が十分でなかったこともあり、参加者は関係者を含めて30人程度と少なめでした。

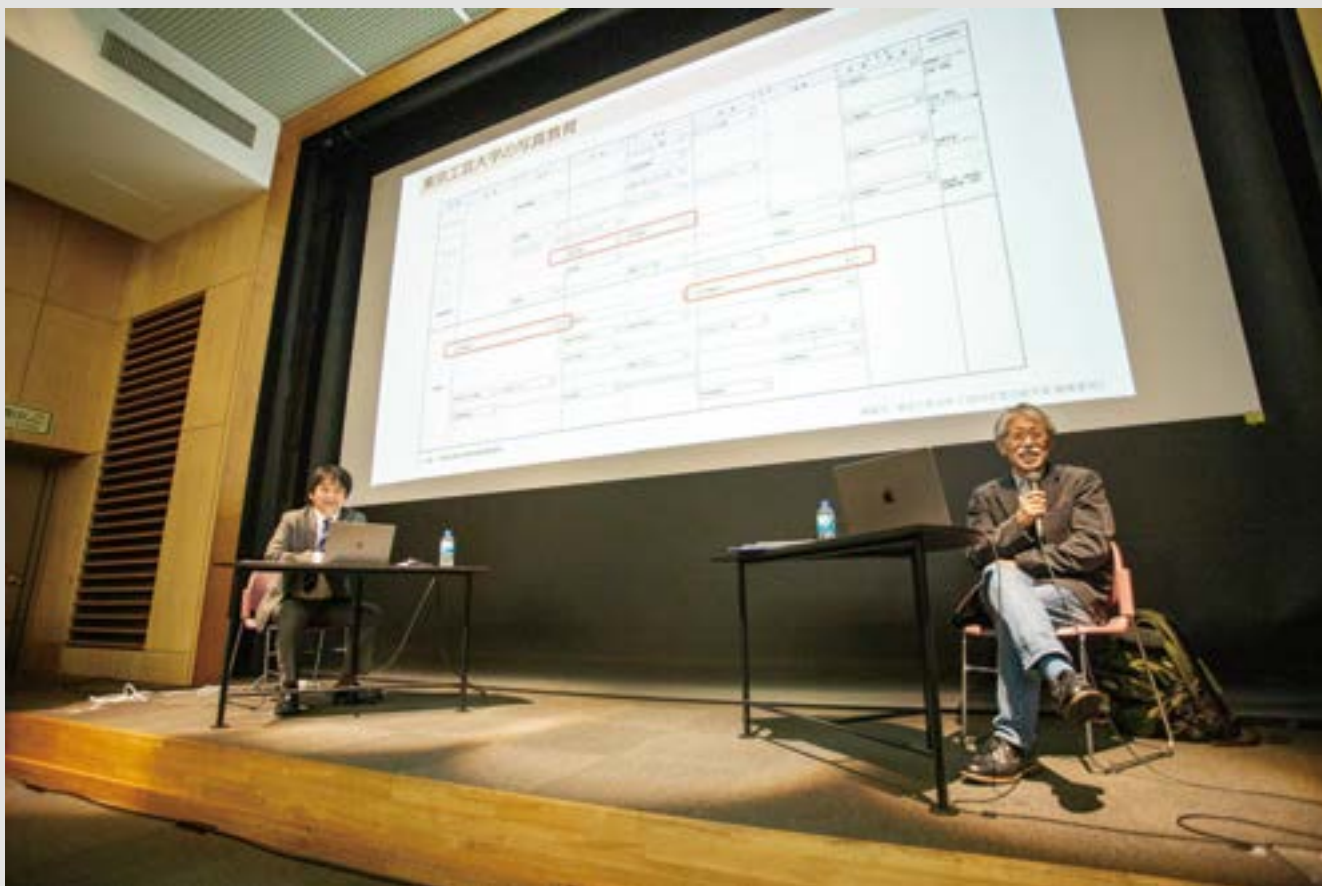
1人5分という短い時間設定でしたが、それでも時間が押してしまいました。テーマとしては美術大学の教育に関することもあり、個人的には興味深かったのですが、来場者にとっては断片的な内容になってしまったかもしれません。講演会形式なら2~3人の登壇者で話をまとめた方が見やすかったかもしれませんが、今回の展覧会コンセプトである「多くの卒業生が参加する」という点を考えると、一人一人の経験を聞くことにも意義がありました。

石川 時間管理が難しく、一人一人が予定より話が長くなってしまい、総括ができなかったのは残念でした。登壇者同士の意見交換もできませんでした。また、「人生や表現とは何か」というテーマについて十分に触れられていなかったとの指摘もありました。

自作を語ると誰しも長くなりがちですが、他の人がどう制作しているかを知りたかったという思いもありました。アーティストトークとして話す機会を得られたのは嬉しかったです。

鈴木 研究室時代の自己紹介プレゼンを思い出しました。一平さんが時間管理をしてくれているにもかかわらず、皆が話したいことを話し続けてしまう様子も懐かしく感じました。当初は展示に参加していない卒業生も含め、先端の卒業生の多様なあり方を紹介する予定でしたが、結果的に展示参加者のみの話になり、アーティストトーク寄りになりました。作品に





フォーカスした良いトークでしたが、佐藤研究室や先端の卒業生の多様性を考えると、展示に参加していない人の話も聞く機会があればまた違った面白さがあったのかなと思います。

佐藤 研究室のミーティングの雰囲気そのものでしたね。それが来場者にも伝わったという感想もありました。多様なメンバーにもっと参加してもらいたかったのですが、話せる人数に限りがあるのでしょうがないですね。最初は関係者だけかと思いましたが、一般の来場者もきちんと来てくれたので結果的には良かったと思います。

シンポジウム「藝大の写真教育」について

神垣 圓井さんをゲストにお呼びした「藝大の写真教育」のシンポジウムについても振り返りたいと思います。

佐藤 このイベントは永井さんが中心になって頑張ってくれました。参加者がとても多かったです。東京美術学校からの写真教育の歴史が明らかにされ、非常に重要な内容でした。藝大で写真展が行われるようになったのは最近の話だということも知らしめることができました。

神垣 工芸大との対比や展覧会「写真で語る」のアーカイブを見ることができたのも良かったです。質問の時間もそれなりにありましたね。

鈴木 広報としての反省点ですが、事前の告知では佐藤先生と圓井さんの対談という形で広報していましたが、実際には永井さんにお話しいただく部分もかなり多かったため、3人の鼎談として広報するべきだったと悔やまれました。

飯野 客席には先端の古い卒業生も多かったように思います。土曜日だったので家族で来やすかったからでしょうか？

佐藤 卒業生は結構いましたね。

鈴木 会期中に2回イベントがあったから、大体の人が写真教育の方に参加された印象でした。特に写真関係の人が多かったです。

飯野 熱心な人は両方のイベントに参加していましたね。

神垣 佐藤研の中でも写真にフォーカスした内容だったという印象を受けました。そうした側面を求めている人には良かったのではないかと思います。

神垣 それでは、今日の振り返り会はこれで締めさせていただきます。長時間ありがとうございました。

佐藤 皆さん今日はありがとうございました。図録発行までよろしくお願いします。

一同 お疲れ様でした。







退任展を終えて

佐藤時啓

東京藝術大学美術学部先端芸術表現科教授

幸いな事に長かったパンデミックの時代が過ぎて退任展を迎え、5000人を超える来場者を迎えることが出来た。多くの卒業生にも再会することが叶い、その家族を連れての来訪に25年という先端芸術表現科の短くはない歴史を振り返る日々でもあった。すでに終了して2ヶ月以上が過ぎたが、搬入時に最初の小屋を皆で組み上げた時の感動が未だに脳裏から離れない。

近年教員退任展はその費用や準備の大変さゆえか、辞退する例もあり選択肢の一つだったが、私は2023年春には大学美術館で行う決定と申し込みを行った。従って私にとって2024年はその大きな目標に向かうための一年となった。

当初は私自身の最新シリーズを制作する新作個展を考える事からスタートした。しかし思考する中で、藝大で過ごした写真センターでの13年+先端芸術表現科の25年、合計38年という教員生活の時間を考えると、作家としての在り方と教員としての日常が表裏一体であったことに思いが至るようになった。研究室で過ごした学生達の歴代のメンバーの顔を思い浮かべながら私が大学で過ごした時間を考えた。すると、そういった学生との日常の関係性にこそ教育としての意味合いがあり、それを表現しなければならないと考えた。先端芸術表現科が開設されてから25周年ということもあったし、学生との相互性がテーマになった。そしてすぐに歴代の卒業生達に声をかけてコアメンバーになってもらうように依頼した。コミュニケーションツールの充実によってどこに住んでいても会議に参加することが可能で、楽しみを皆で共有しながら展覧会そのものを作り上げようと考えた。

そして退任展への参加希望者を現役の研究室生卒業生修了生に名簿から全員に均等に声をかけた。私が選抜してキュレーションするのではなく、あくまでも現役研究室生+卒修生達個人の意思に従うことにした。現役生は特に卒業制作や修

了制作が重要なので決して無理して参加する事のないように伝え、結果3年生と博士の一部の学生が参加した。さらに歴代の交換留学生達にも声をかけた。ヨーロッパやアジアの懐かしい面々の多くが参加を表明し、さらには自費で東京に駆けつけてくれた者も多くいた。

4月に助成金の応募を開始し、5月にはコアメンバー個々と話し始め、6月にはコア全体でのミーティングを開始すると同時に研究室卒業生全員に声をかけ始めた。多くの参加希望があり、夏休み前のミーティングで展示をまとめるためには、まずは会場の空間作りのプランから始めることになった。美術館会場下見では、天井まで仕切る重々しい可動壁がしまい込まれたガラーンと広い空間を見た瞬間にその虜になった。空間に何も無い状態はとても魅力的だった。その空間を仕切る何かを自ら創る工夫をしようと考えた。そしてメンバーの堤有希さんの紹介でアドバイザーになっていたいただいた建築家の湯浅良介氏と最初のミーティングを行った。そこで湯浅氏より私の作品のランドスケープから、会場に何軒かの小屋を建て風景に見立てることを提案を受けた。そのアイデアに私のインスピレーションが感応した。美術館展示室を街のような空間にするというアイデアに皆で盛り上がった。そして私が自身のスタジオ制作で気になっていた素材である軽量鉄骨のLGS(Light Gauge Steel)を使うプランにまとまっていく。そこに堤有希さん自身の制作プランである白く薄い布を被せることになった。

ここ数年の木材の高騰にすさまじく辟易としていたところである。そこで眼をつけたのが壁下地材のLGSだった。この素材は値段も安定していて、むしろ2×4等の木材よりも安く、曲がりや歪みも無い。そしてきちんと直線が出せることが魅力である。自身のスタジオの壁作りでLGSを使用しスタディを重ね接合方法などを検討していった。小屋の空間配置を模型で制作するとともに3D図面化し、基本的な空間構成が決まった。最

初の小屋や壁の配置を考え、その後2D図面化した。そして「過去のそれぞれとの出会いと経験を縦軸とすれば、美術館の展示の場で新たに共存する空間は横軸となります。新たに生まれる場を、ひとつの風景として作り上げたい」と研究室生＋卒修生に全員に訴えた。結果集まった59名のプランに基づき2D図面に配置していった。

9月後半になり実際の小屋や壁の制作に取りかかった。私の埼玉県行田市に制作中のスタジオで週末の合宿を3度行った。小屋や壁の立体構造を単一の壁面で分解構成し、その壁面をひたすらスタッフで制作した。1枚の高さはトラックのアルミボックスの最大高である2500mm、そして長さは大学美術館のエレベーター室対角の5000mmを超えないように分解接合式にした。最初の作り始めで端部の接合法などの処理を、木材を中に入れてつなぐことにした。都合のつくスタッフが集まり皆で壁面を作りあげた。

そして大型トラックに積み込み、会場への搬入である。その壁達を美術館の中に運びこむと、今まではスタジオでは大きく感じていたものが小さく感じる経験があったが、今回はそれがなく十分な存在感を示していた。当初の予定より1日早く搬入ができるようになったため初日は場所決めのライン引きを行い、一個の小屋を自分たちで組み上げた。スタジオでは実際には組み立てることが出来ず、ぶっつけ本番となった。しかし予定していた壁と壁の接合方法がうまく行き、水平垂直、直角うまく決めることができた。懸案の屋根を載せる方法もプラン通りにうまくいった。二日目以降は展示業者に依頼し、我々は作品の展示にとりかかった。最終的には11月2日のオープン前日までタプブリ時間をかけて展示がなされた。企画当初から私と研究室生＋卒修生がなぜ同じ場に展示しているのか、が来場者に納得してもらえるように考えキャプションの工夫をした。

結果的には、皆で同じ目標に向かう私の最後のプロジェクト

と言える展覧会となった。当初から全員がボランティアで動いた。それぞれの場所にプロフェッショナルがいて、問題が生じるとその解決が何らかの方法でなされた。私自身の得意ではない分野に得意な人間がいた。そのことは、先端芸術表現科の様々な方向性に人材を生み出した成果ともいえる。本当に最後まで心強かった。個々に名前をだして感謝したいのだが、あまりに多くのメンバーの力によって成し遂げられた展覧会だけに、最後にコアメンバーの名前を奥付にまとめるにとどめる。みんな本当にありがとう！

On the Holding of The Retirement Exhibition

Tokihiro Sato

Professor, department of inter media art, Tokyo University of the Arts

Fortunately, at long last the pandemic had passed, and we were able to hold my retirement exhibition and welcome over 5000 visitors. I was able to meet many former students, some of whom even brought their families, and I was able to reflect on the not-so-brief history of the Intermedia Art Department. Though it has now been over two months since the exhibition finished, the excitement that I had from the moment of assembling the first hut has remained fresh in my mind. In recent years, due to costs and other difficulties, choosing not to have a retirement exhibition has become an option, but in spring of 2023 I made the decision to apply for one at the University Art Museum, and thus 2024 became a year where I worked towards this large goal.

At first, I started thinking about this as a solo exhibition where I would introduce a new series of works. However, when I considered the 38 years I had spent teaching at the Tokyo University of the Arts, which included 13 years at the Photography Center and 25 years at the Department of Intermedia Arts, I realized that my life as an artist and my daily life as a teacher were two sides of the same coin.

I thought about the faces of the students who had passed through my lab during my time here at the University. Then, I thought about the meaning of the education occurring via these daily relationships with those students, and how it was necessary to express a sense of that. Also, as this was the 25th anniversary of the establishment of the Department of Intermedia Art, the theme became about reciprocity with the students, and so I immediately reached out to past graduates and asked them to become core members of the exhibition. With all the improvements in communications, no matter where they were living, it was possible for them to participate, and I thought that we could all enjoy creating the exhibition together.

With that in mind, I correspondingly invited all current and former students who had been listed in my laboratory through the years to participate in this retirement exhibition. I decided not to select or curate the exhibition, but rather allow the current and former students to follow their own wishes. I told current students that they were not forced to participate, as their graduation work and final research was important, but many third year and doctoral students participated. I also invited former exchange students to participate, and many familiar faces from Europe and Asia expressed their interest, and some even came to Tokyo at their own expense.

We started applying for grants in April, discussions with individual core members began in May, and from June we started meetings with the entire core and began reaching out to all of the other lab members. Many people wanted to participate, so before summer vacation we had a meeting to begin planning on how to use the space for the exhibition. When we previewed the museum venue, we were entranced by the walls that could retract into the ceiling and create a wonderful wide open space. This empty space was very mesmerizing. We thought about how we could create something of our own that would serve to partition the space in a new way. Then, through member Yuki Tsutsumi we were introduced to architect Ryosuke Yuasa, who became our advisor, and we had a first meeting with him. At the meeting, Mr. Yuasa proposed, based on my work with landscapes, that we build several huts in the venue so that it would resemble a landscape. I was very inspired by this idea. Everyone was excited by the thought of turning the museum venue into a city-like space. We then struck upon the plan of using lightweight steel frame LGS (Light Gauge Steel), a material that I had been interested in for my own studio work. Yuki Tsutsumi then came up with a production plan to use

thin white cloth as a cover for the frames.

Since I had become fed up with the rising cost of wood in recent years, I set my sights on LGS as the material for the framework of the walls. It's stable in price, and in fact cheaper than 2×4s or other wood materials, and it does not bend or warp. It has an appeal because it produces very straight lines. To study it, I had used LGS to build the walls for my own studio, and explored methods of creating overlapping joints. A spatial layout of a hut was modeled and drawn up in 3D, and the basic composition was decided. Then we considered the layout of the first huts and walls and drew them up in 2D. Then, I appealed to all the lab students and graduate students, saying, "If each of our encounters and experiences in the past are on the vertical axis, this new coexisting space here at the exhibition is on the horizontal axis. In this newly birthed space, I want us to create a single landscape." As a result, the 2D drawings were arranged based on the plans of the 60 people who participated.

In the second half of September, we began making the actual huts and walls. We held training sessions at my studio in Gyoda, Saitama Prefecture, over the course of three weekends. The three-dimensional structures of the huts and walls were broken down into single wall surfaces, and the participants worked on making the walls. The height of each wall was 2500mm, the maximum height of the box of the truck to be used for transportation, and the length was 5000mm, so it wouldn't exceed the diagonal distance of the elevator of the Tokyo University of the Arts Museum, and made so they could disassembled and reassembled. When we first began the process of making them, we connected the ends by inserting wood inside. We then gathered members who were available and built the walls together.

We then loaded the walls onto a large truck and took them to

the exhibition space. Up to now, I'd often had the experience of something that had looked big in the studio suddenly looking much smaller when brought to a venue, but this time when we brought these walls into the museum, that didn't happen and they had a strong presence. We were able to bring them in a day earlier than originally planned, so on the first day we drew the lines to decide the locations and assembled one hut by ourselves. We couldn't actually fully assemble one in the studio, so this was the real first test case. However, the planned method of joining the walls went well, and we were able to determine the horizontal, vertical, and right angles. The method of putting on the roof, which we had originally been concerned about, also went according to plan. From the second day onwards, we asked an exhibition company to help us, and we started to put the works on display. In the end, we were able to put up the exhibition well before the opening on November 2nd. Captions were created so that visitors would understand why each of the works were sharing this space with each other.

In conclusion, this exhibition of everyone working together towards the same goal can be considered my last project. From the start, everyone worked together as volunteers. There were some professionals here and there, and when problems arose, they helped resolve them in some way. There were people who were skilled in things that I was not good at. In a way, this could be seen as the end result of the Department of Intermedia Art: producing talent across a variety of directions. All the way through the end it was very comforting. I would like to thank everyone individually by name, but as this exhibition was made possible by the efforts of so many members, I will limit myself to listing the names of the core members. Thank you, everyone, from the bottom of my heart.

謝辞

本展開催にあたり、多大なご協力を賜りました下記の諸機関、関係者のみなさまに心より御礼申し上げます。
また、ご尽力賜りながらここにお名前を記すことのできなかった方々にも深く感謝の意を表します。

[敬称略、順不同]

Acknowledgements

We thank all the institutions and individuals listed below for their generous cooperation in realizing this exhibition.
We would also like to express our gratitude to those who greatly contributed but whose names are not included here.

[Names listed without honorifics, in no particular order]

日比野克彦	Katsuhiko Hibino
野村浩 湯浅良介	Hiroshi Nomura Ryosuke Yuasa
林卓行 藤井匡	Takayuki Hayashi Tadasu Fujii
square4 Kato Art Studio 東京スタジオ	square4 Kato Art Studio Tokyo Studio Co., Ltd.
クレイグ・キャンベル ラヤ・ガンチェバ 鈴木悠生 西塚務 久木田茜	Craig Campbell Raya Gancheva Yu Suzuki Tsutomu Nishiduka Akane Kukita
イナリヤト食文化研究所 アーティクス・キューブ 大内進	INARIYATO Food Culture Institute Inc. ARTiX ³ Susumu Ouchi
大谷花 村山美羽	Hana Otani Miu Murayama
燕龍韜 藤原僚平 石原孝陽 今枝祐人 萩原貴太 BALL GAG	Yan Longtao Ryohei Fujihara Koyo Ishihara Yuto Imaeda Kanta Hagiwara BALL GAG
佐藤真実 佐藤陸	Mami Sato Riku Sato
芸術文化振興基金 公益財団法人 野村財団 公益財団法人 朝日新聞文化財団 株式会社ニコン 株式会社ニコン イメージング ジャパン 東京藝術大学 美術学部 杜の会 東京藝術大学美術館 東京藝術大学先端芸術表現科 東京藝術大学芸術情報センター 東京藝術大学美術学部付属写真センター 芸術未来研究場	Japan Arts Council NOMURA FOUNDATION The Asahi Shimbun Foundation NIKON CORPORATION Nikon Imaging Japan Inc. MORINOKAI The University Art Museum Department of Intermedia Art Art Media Center Photography Center Geidai PARK (Geidai Platform of Arts and Knowledge for the Future)



from the series Photo-Respiration #251 2005年

佐藤時啓退任記念展

with 研究室生 + 卒修生

—交差する時間—Intersecting Time

- 会期：2024年11月2日(土)～11月17日(日)
※11／5(火)・11(月)休館
- 時間：10時～17時（入場は16時半まで）
- 会場：東京藝術大学大学美術館 本館3階
〒110-8714 東京都台東区上野公園12番8号
- 料金：入場無料

カタログ B

発行日：2025年3月21日

発行：「佐藤時啓退任記念展 with 研究室生+卒修生 —交差する時間— Intersecting Time」実行委員会
編集：「佐藤時啓退任記念展 with 研究室生+卒修生 —交差する時間— Intersecting Time」実行委員会
装丁：野村浩
印刷：株式会社グラフィック
スリーブ制作：株式会社誠晃印刷
翻訳：クレイグ・キャンベル ラヤ・ガンチェバ

写真家クレジット
鈴木悠生 (p.032-033)

「佐藤時啓退任記念展 with 研究室生+卒修生—交差する時間— Intersecting Time」実行委員会

実行委員長：佐藤時啓
事務局長：飯野哲心
執行役員：田中一平 永井文仁
会場統括：堤有希 砂田百合香
会場作品配置・佐藤時啓研究室活動アーカイブ構成：菊地拓児
会場サポート：袁辰
会場案内デザイン・図録制作チーフ：神垣優香
デザインサポート：秋本瑠理子
イベント：牧田沙弥香
会場・イベント記録：永井文仁 髓良彦 轟澤文 横山渚
広報：鈴木のぞみ 石川智弥 許力静 藪乃理子 山本愛子
留学生対応：王憶冰
図録サポート：秋山果凜 門馬さくら 藪乃理子 藤本涼

Catalog B

First Edition : 21 March, 2025
Published by : Tokihiro Sato Retirement Memorial Exhibition with Laboratory Students + Graduates —Intersecting Time—
Edited by : Tokihiro Sato Retirement Memorial Exhibition with Laboratory Students + Graduates —Intersecting Time—
Book Design and Design of Promotional Materials : Hiroshi Nomura
Printed by : GRAPHIC Corporation
Sleeve box product by : SEIKO Printing CO.,LTD
Translation : Craig Campbell Raya Gancheva

Photo Credit
Yu Suzuki (p.032-033)

Tokihiro Sato Retirement Memorial Exhibition with Laboratory Students + Graduates —Intersecting Time—

Chairperson of the Organizing Committee : Tokihiro Sato
Secretary General : IINO TESSHIN
Executive Officer : Ippei Tanaka Fumihito Nagai
Venue Supervisor : Yuki Tsutsumi Yurika Sunada
Exhibition Layout and Tokihiro Sato Laboratory Activity Archive Direction : Takuji Kikuchi
Venue Support : YUAN CHEN
Chief of Venue Guide Design & Catalog Production : Yuka Kamigaki
Design Support : AKIMOTO Ruriko
Event : Sayaka Makita
Venue & Event Documentation (Photography & Videography) : Fumihito Nagai Yoshihiko Zui NIE ZEWEEN Nagisa Yokoyama
Public Relations : Nozomi Suzuki Tomoya ISHIKAWA Xu Lijing Noriko Yabu Aiko Yamamoto
International Student Liaison : WANG Yibing
Catalog Support : Karin AKIYAMA Sakura Momma Noriko Yabu Ryo Fujimoto



「佐藤時啓退任記念展 with 研究室生+卒修生 -交差する時間- Intersecting Time」ダイジェストムービー
Tokihiro Sato Retirement Memorial Exhibition with Laboratory Students + Graduates -Intersecting Time- A Highlight Video of the Exhibition
Video editing by NIE ZEWEEN

本図録に掲載された画像、文章、その他のコンテンツの無断転載を禁じます。
All rights reserved.





Tokihiro Sato Retirement Memorial Exhibition
with Laboratory Students + Graduates—Intersecting Time—